

望月町文化財調査報告第8集

金塚遺跡

— 蓼科山北麓における縄文式早期・平安時代の調査 —

1982

東信土地改良事務所

望月町教育委員会

序

金塚遺跡緊急発掘調査はここに全てを終了し、望月町文化財調査報告第8集として調査報告書を刊行するはこびとなりました。

春日地域における発掘調査は、昨年度実施した新水A遺跡、同B遺跡に続いて3遺跡めに当たります。春日地域は、明治時代から縄文時代の遺物が多く掘り出され、文献にもまとめられており、さらに、金塚古墳群に代表される古墳も数多く存在しているところで、古くから考古学的に注目されて来ました。金塚遺跡は、中でも規模が大きく密度の濃い縄文時代の遺跡として重要な位置を占めているといわれ、全体面積の僅かな部分ではありましたが、その一端を解明するに及びました。

本報告書は、調査員諸氏の熱意と、御努力によりまとめられたものであり、学問的に重要な所見と本地域を中心とした歴史的事実が包摂されているものと痛感する次第であります。

これらの成果は、参加者全員で生み出してきたものであり、自らの手で自らの住んでいる地域の歴史の一端を明らかにしたといえます。この報告書をもとに、さらなる地域の歴史解明をしていただきたいと思ひますし、広く学問研究の場で活用して下さることを希望しております。

最後に、本調査及び報告書の刊行に当たり、御尽力をいただいた関係の皆様へ衷心より感謝の意を表するものであります。

1982年3月

望月町教育委員会
教育長 佐藤 初雄

例 言

1. 本書は、昭和56年度望月地区県営ほ場整備事業に先立って実施した緊急発掘調査の報告書である。
2. 遺構の実測は、渡辺、黒岩、三石、佐藤、福島が行ない、その補助を伊藤、内藤、依田(明)、与良、福島(茂)が行なった。
3. 遺物の実測は、渡辺、黒岩、三石、佐藤、福島が行なった。
4. 写真撮影及び図版トレース、図版作成は福島が行なった。
5. 遺構及び遺物等の執筆は、文責を文末に明記した。
6. 遺物及び諸記録は望月町教育委員会で保管している。
7. 本書の作成業務は、望月町教育委員会が行なった。

目 次

序	
例言	
第1章 調査の動機と経過	1
第1節 調査の動機	1
第2節 調査団組織	2
第3節 調査日誌	2
第2章 金塚遺跡周辺の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	9
第3章 昭和55年度試掘調査報告	10
第1節 調査の構成	10
第2節 調査内容と結果	11
第4章 昭和56年度発掘調査・遺構及び遺物	13
第1節 第1号住居址	14
第2節 第2号住居址	17
第3節 第3号住居址	19
第4節 第4号住居址	19
第5節 第5号住居址	21
第6節 第6号住居址	22
第7節 第7号住居址	23
第8節 第1号土壇 (SK-01)	25
第9節 第2号土壇 (SK-02)	25
第10節 第3号土壇 (SK-03)	25
第11節 第1号集石址	26
第12節 第2号集石址	27
第5章 金塚遺跡出土の土器	28
第1節 縄文式時代の土器	28
第2節 弥生式時代の土器	31
第6章 金塚遺跡出土の石器	32
第1節 縄文式時代の石器	32
第2節 弥生式時代の石器	35
第3節 その他の遺物	36

第7章 考察	49
第1節 縄文式時代早期の住居址	49
第2節 縄文式時代早期の遺物	51
第8章 総括	55

挿図目次

第1図 金塚遺跡及び周辺部遺跡分布図 (1:10,000)	8
第2図 試掘調査平面図及び土層断面図(上図1:1,200、下図1:20)	12
第3図 金塚遺跡グリッド配置及び遺構全体図 (1:400)	13
第4図 第1号住居址実測図 (1:40)	15
第5図 第1号住居址出土遺物 (1:3)	16
第6図 第2号住居址実測図 (1:40)	17
第7図 第2号住居址出土遺物 (1:3)	18
第8図 第3号住居址、第4号住居址、第1号土壇 (SK-01)、第2号土壇 (SK-02) 実測図 (1:80)	20
第9図 第5号住居址実測図 (1:40)	21
第10図 第6号住居址実測図 (1:40)	23
第11図 第7号住居址実測図 (1:60)	24
第12図 第3号土壇 (SK-03) 実測図 (1:40)	26
第13図 第1号集石址実測図 (1:30)	27
第14図 第2号集石址実測図 (1:30)	27
第15図 金塚遺跡出土土器 (1~11・第4号住居址出土、12~16・第5号住居址出土、 17~38・グリッド出土) (1:3)	37
第16図 金塚遺跡出土土器 (1:3)	38
第17図 金塚遺跡出土土器 (1:3)	39
第18図 金塚遺跡出土石器 (41・第5号住居址出土、1~40・グリッド出土) (1:2)	40
第19図 金塚遺跡出土石器 (42~46・第3号住居址出土、47~59・第4号住居址出土)(1:2)	41
第20図 金塚遺跡出土石器 (1:2)	42
第21図 金塚遺跡出土石器 (1:2)	43
第22図 金塚遺跡出土石器 (1:3)	44
第23図 金塚遺跡出土石器 (1:3)	45

第24図	金塚遺跡出土石器 (1:3)	46
第25図	金塚遺跡出土石器 (1:4)	47
第26図	金塚遺跡出土遺物 (1:2)	48
第27図	望月町の時代別遺跡数の百分率分布	57

表 目 次

第1表	金塚遺跡周辺の分布表	9
第2表	望月町の時代別遺跡数	56

図版目次

第一図版	1. 金塚遺跡全景 (南側より) 2. グリッド全景 (南側より)
第二図版	3. 台風15号による水没状態 (南側より) 4. 第1号住居址全景 (南側より)
第三図版	5. 第1号住居址カマド (南側より) 6. 第1号住居址カマド完掘状態 (南側より)
第四図版	7. 第2号住居址 (南側より) 8. 第3号住居址・第1号土坑 (SK-01) (南側より)
第五図版	9. 第4号住居址・第2号土坑 (SK-02) (南側より) 10. 第5号住居址 (南側より)
第六図版	11. 第6号住居址 (南側より) 12. 第7号住居址 (南側より)
第七図版	13. 第3号土坑 (SK-03) (南側より) 14. 第1号集石址 (西側より)
第八図版	15. 第2号集石址 (西側より) 16. ロームマウンド (南側より)
第九図版	17. 遺物出土状態 18. 第1号住居址出土土器
第十図版	19. 第1号住居址出土土器 20. 第2号住居址出土土器
第十一図版	21. 第4号・第5号住居址出土土器 (上二段・4住、下・5住) 22. グリッド出土土器
第十二図版	23. グリッド出土土器 24. グリッド出土土器
第十三図版	25. グリッド出土土器 26. グリッド出土土器
第十四図版	27. 遺構・グリッド出土石器 28. 遺構・グリッド出土石器
第十五図版	29. 遺構・グリッド出土石器 30. グリッド出土石器
第十六図版	31. グリッド出土遺物 32. 町長、教育長、教育次長視察
第十七図版	33. 視察風景 34. 調査風景
第十八図版	35. 実測風景 36. 金塚遺跡発掘調査参加者

第1章 調査の動機と経過

第1節 調査の動機

望月町では、毎年ほ場整備事業が行なわれ、それに伴う緊急発掘調査が相次いで実施されている。本発掘調査も、望月地区(春日)県営ほ場整備事業の施行に先立って行なわれたものである。

昭和55年9月2日に、昭和56年度県営ほ場整備事業の施行に伴う埋蔵文化財保護についての現地協議が、長野県教育委員会文化課、東信土地改良事務所、望月町役場建設課、望月町教育委員会の立ち合いのもとに実施された。保護協議の対象となったのは、金塚遺跡、後沖遺跡、春日尾崎遺跡、善郷寺B遺跡で、金塚遺跡、後沖遺跡、春日尾崎遺跡は発掘調査を実施し、善郷寺B遺跡は、工事の際立ち合い調査を実施することになった。但し、金塚遺跡(調査対象部分)は水田であるため、地形的にみて遺跡としては不明確であるとする東信土地改良事務所の依頼の基に、発掘調査に先立って試掘調査を実施することになった。(その後の経過で、後沖遺跡と春日尾崎遺跡は、昭和56年度の工事対象からはずされ、昭和57年度に実施することになった。)

試掘調査は、同年10月28日に行なった。調査は、工事対象地区に250cm×250cmのグリッドを9ヶ所に設定し、土層の観察、自然地形の観察、地山の状況、遺構及び遺物の出土状態を調査した。その結果、大規模でしかも現状を良好に保っている(暗渠排水を除く)遺跡であることが明確となり、試掘調査報告書を10月29日に東信土地改良事務所に提出した。(詳細は試掘調査報告を参照)

昭和56年1月23日に、「文化財補助事業計画書」を長野県教育委員会文化課に提出、4月24日には、「昭和56年度埋蔵文化財金塚遺跡の発掘調査について」(届)の提出、5月6日には、「文化財保存事業補助金交付申請書」の提出、5月8日には、東信土地改良事務所と望月町教育委員会により、発掘調査についての打ち合せ会を行う。7月29日には、町教育委員会主催による金塚遺跡緊急発掘調査の打ち合せ会を、調査員、作業員、文化財調査委員により行なう。同日合わせて、調査方法、歴史的内容をも含めての学習会を行なう。

8月3日から5日まで、ブルドーザーによる表土剥ぎを行ない、8月5日午前10時30分より調査現場にて結団式を挙行し調査に入った。(福島)

第2節 調査団組織

- 顧問 森 嶋 稔 日本考古学協会々員・千曲川水系古代文化研究所主幹
- 調査団長 福 島 邦 男 日本考古学協会々員・望月町教育委員会学芸員
- 調査員 渡 辺 重 義 長野県考古学会々員・軽井沢町文化財専門委員
- 黒 岩 忠 男 長野県考古学会々員・佐久考古学会役員
- 三 石 延 雄 長野県考古学会々員・臼田町文化財調査委員
- 佐 藤 敏 長野県考古学会々員・佐久考古学会役員
- 作業員 大沢礼市、桜井卯作、吉沢浩矣、吉沢弥太郎、大森英七、依田慎三、倉見 渡、
福島茂子、日暮信生、市川貞雄、今井伊一、飯島正信、関嘉津武、永井健蔵、
伊藤淑夫、松本 寛、依田明子、与良悦子、井出あき江、柳沢吉男、大森一尾、
平賀章治、平賀孝弘、羽田聖一、清水真一、羽田徳子、平林さだ
- 調査協力者 大森 稔、大森 進、川井 淳、真田智昭、渡辺勝則、竹花正高、川井 登、
宮崎兼太郎(地主)、株式会社竹花組、春日保育所
- 文化財調査委員 大沢洋三、岩下清海、小野沢甚之丞、鈴木 高、桑沢俊雄、柳沢右三郎、
窪田俊朝
- 調査事務(社会教育係)、大森睦男(係長)、高橋重雄、上野早苗、小林辰男、福島邦男

第3節 調査日誌

8月3日(月) 晴れ

調査現場の表土剥ぎをブレードで行なう。耕作土がかなり厚いため、深い所で1~1.5m剥ぐ。

8月4日(火) 晴れ

昨日に続き表土剥ぎを行なう。僅かな部分を残してほぼ完了に近い。縄文式前期と中期の遺物
が出土する。

8月5日(水) 曇り

表土剥ぎは、午前中に完了した。早朝より器材の搬入、テント張りを行なう。11時より関係者
により結団式及び神事を行ない調査の開始となった。グリッドの設定(3×3m)、引き続きグリッ
ド掘りを始める。

8月6日(木) 晴れ

赤トンボが飛びかう大変涼しい一日であった。本日は15ヶ所のグリッドを掘る。近年の暗渠排
水路がみつかる。土坑2基、ピット2個を検出する。石鏃、凹石、多面体磨石(註1)(特殊磨石)、
スクレイパー、関山式土器、新道式土器、土師器、須恵器の坏が出土する。

8月7日（金）曇りのち雨

本日は立秋、例年の暑さとうって違って寒い一日だった。D-15・16、E-15・16グリッドより住居址が検出されカマド及び須恵器坏が確認される。他の地点から撚糸文土器、山形押型文土器が出土する。

8月8日（土）雨のち晴れ

朝から雨が降ったり止んだりの天気であった。昨日検出された住居址のプラン確認作業を行なう。ほぼ一辺が3.3×3.3mの方形プランを呈する平安時代の住居址とわかり、第1号住居址とする。覆土はローム混りの黒色土で明確に判明した。

8月9日（日）晴れ

本日は22のグリッドを掘る。この中で、K-2・3、J-2・3、L-2・3の各グリッドより、縄文式前期関山式土器、須恵器甕の大形破片が多数出土する。また藤内式土器も合わせて出土する。調査地区の西南部からは、早期の遺物、特に押型文土器を中心に出土する。

8月10日（月）晴れ

今までとはうって違って大変暑い一日であった。本日は新たな遺構は検出できなかった。遺物は、凹石、鋏型石鏃、打製石斧、山形押型文土器、関山式土器、須恵器甕の大形破片などが出土する。出土地点は、調査地区北東部と南西部に特に多い。

8月11日（火）晴れ

19グリッドを掘る。B-11・12、C-11・12グリッドにまたがって1基、さらにD-12、C-12グリッドにまたがって1基のロームマウンドが検出された。さらにこのロームマウンドにかけて住居址と思われる落ち込みを確認する。この付近からは、縄文式早期の遺物が中心に出土している。

8月12日（水）曇り時々雨

昨日の続きの9グリッドと新たに10グリッドを掘る。B-11グリッドの落ち込みは、暗渠排水路で部分的に破壊されており本日のところ明確に捉えることはできなかった。またB-12グリッドも同様一部分しか明確にされなかった。この地点からは、楕円押型文土器が出土している。その他本日は、多面体磨石、凹石兼敲石、磨石、石鏃、砥石などが出土する。本日までの所、全グリッドの46%の掘り上げを完了する。

8月13日（木）晴れ

本日お盆休み

8月14日（金）晴れ

本日お盆休み

8月15日（土）時れ

本日お盆休み

6月16日（日）晴れ

本日お盆休み

8月17日（月） 晴れ

お盆休み明けの作業を開始した。新たに13のグリッドを掘る。J-16・17、K-16・17にかけて、住居址と思われる落ち込みを検出する。落ち込みの全容は本日のところ明らかではないが、北東部には焼土が散乱しておりカマドではないかと考えられる。L-14グリッドからは、磨製石鏃が出土する。午後、町長さん、教育長さん、教育次長さんが視察にみえられ、調査団を含めて記念撮影を行なう。

8月18日（火） 晴れ

本日は、朝から大変良い天気であった。各地区12グリッドを掘る。昨日検出された住居址のプランの全容が明らかになる。主軸は北東方向を示し、一辺4 mの方形を呈している。カマドはすでに露呈し焼土が散乱しており、暗渠排水路で破壊を受けている。本日までに、5軒の住居址を検出した。

8月19日（水） 晴れ

掘り込みの進んでいる第1号住居址は、カマド、床面、柱穴がかなり明確になってきた。十字に残したセクションベルト（土層）の実測と取りはずしを行なった。土師器の薄い甕形土器と須恵器の坏、甕の破片が少量出土する。G-9グリッドで小規模な住居址と思われる落ち込みが検出される。黒色土内部には大きな礫が入り込んでいる。（後に土壇であることが判明）

8月20日（木） 晴れ

第1号住居址内部の掘り込みはほぼ終了し、ピットを残すだけとなった。本址外周部には柱穴が巡っており、主柱穴と垂木柱穴が明らかとなる。第2号住居址も掘り込みがかなり進み内部構造が明確になってきた。第3号住居址は、ロームマウンドとの関係がまだつかめない。田戸下層式土器が少量出土する。

8月21日（金） 晴れ

第1号住居址の実測がほぼ終り、写真撮影を残すのみとなった。第2号住居址も同様に実測が行なわれたが、床面から地下水が湧き出しており、湖水と同じように水びたしである。第3号住居址の床面に土壇状の落ち込みのあることを確認する。第4号住居址の掘り込みを開始する。楕円押型文土器が出土する。

8月22日（土） 曇り

本日は、第1号住居址及び第2号住居址の清掃と写真撮影を行う。第2号住居址は相変らずの水没状態、排水完了から撮影まで30秒以内という大変な急がしさだ。第3号、第4号住居址の床面がほぼ検出され、また、第4号住居址にも土壇状の落ち込みが確認される。山形押型文土器が出土する。

8月23日（日） 雨

作業休み、台風15号で大雨が降る。

8月24日（月） 晴れ

昨日の台風で、掘り上げた遺構、清掃の終わった遺構、現在掘り続けているグリッドなど調査地区全体が水没してしまった。かなり深いグリッドでも全てが水没し、湖水のようになった。従って本日の作業は、ポンプによる排水と排水溝を掘る作業に終始した。恐らくこんなショッキングな事は長い年月の内にはないだろうと思われる。

8月25日（火） 晴れ

排水作業は大部進んではいるが、まだ小川のような水の流れがあり、さらに住居址内に土砂が入り込んでいるため遺構調査に入れられない状態である。特に第1号、第2号住居址は7割りは埋まってしまう。第3号、第4号住居址は、ほぼ通常の調査を進める。

8月26日（水） 晴れ

C-14・15、D-14・15グリッドで検出されていた第5号住居址の掘り込みを行なう。住居址内部には炉址や主柱穴は確認できなかった。外部には柱穴が検出されており、外ピット構造の住居址であることが確認される。第4号住居址は、遺構の概要をほぼつかむことができた。黒耀石のスクレイパーやフレイクが出土する。本日も一日中排水作業を行なう。

8月27日（木） 晴れ

本調査はいよいよ仕上げの段階に入った。本日までに出された遺構は、第1号～第9号住居址があり、そのうち第1号、第2号、第9号住居址が平安時代、第3号～第7号が縄文時代、第8号が時期不詳である。第5号住居址の清掃と写真撮影、第6号住居址の掘り込みを行なう。相変わらず排水作業が続く。

8月28日（金） 晴れ

第3号、第4号住居址と切り合いをもつ第1号、第2号土壇の掘り込みを行なう。規模が大きいうえに地下水が激しく湧き出してくるため大変な作業となった。第6号住居址の掘り込みも続ける。排水作業が続く。

8月29日（土） 晴れ

第1号土壇と第2号土壇の掘り下げを完了するが、湧水のため水が満杯状態である。土層セクション図も完了する。第6号住居址の掘り下げを行なうが、大きな礫が混入し、しかもかなり深いため本日完掘はできなかった。ここにも水が湧き満杯となる。

8月30日（日） 晴れ

本日は作業を休みにする。

8月31日（月） 晴れ

第3号住居址、第4号住居址と合わせて第1号、第2号土壇の写真撮影を行なう。排水作業をくり返しながらの撮影だったので大変苦労した。第6号住居址は、湧水のため確認できなかったが、掘り切り部の一部がロームマウンドであることがわかり、プランの拡張を行なう。プランは変則的となり住居址ではないとの疑問をもつ。

9月1日(火) 晴れ

本日は、再度第2号住居址の清掃と写真撮影、第3号、第4号住居址、第1号、第2号土坑の実測を行なう。第6号住居址と考えられていた遺構は土坑であることが明確になり第3号土坑とする。したがって第9号住居址を欠番としそれを第6号住居址とする。変更後の第6号住居址の清掃と実測を行なう。

9月2日(水) 晴れ

第6号住居址にかかるロームマウンドの精査を行なう。また、2ヶ所にみられた集石址の精査も行なう。集石址の清掃、写真撮影、実測のためのやり方を組む。

9月3日(木) 晴れ

本日は、第1号、第2号集石址の実測を行なう。調査地区北部の遺物集中区の点検を行なう。最後に図面、写真など取り残しの点検を行ない全ての調査を終了する。 (福島)

第2章 金塚遺跡周辺の環境

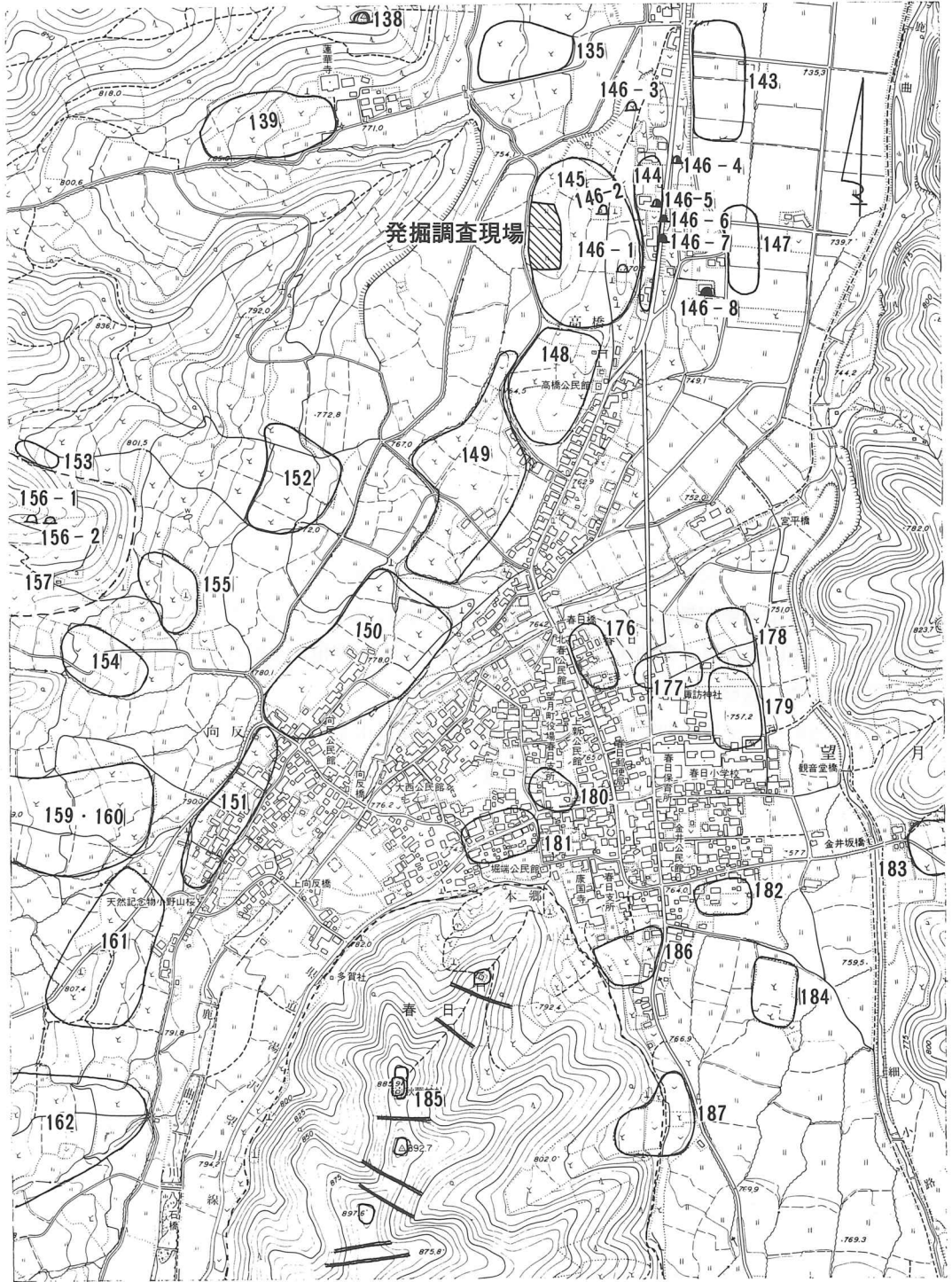
第1節 地理的環境

金塚遺跡は、望月町の中心地から一部鹿曲川と接する春日街道を北に向い、天神の家並みを過ぎると東側に望月中学校が見えてくる。そこから比田井にある王塚古墳を西に見ながら春日に入り、バイパスとの分れ道を旧道に進み、西側に小路を折れると春日保育所に至る。この保育所から続く北側の尾根とその両斜面が遺跡であり、調査地域は、尾根から西側へ緩傾斜した下部の水田面である。

この地域は、蓼科山(2530m)から北側へ延びる雄大な裾野に当たっている。裾野は、春日竹之城付近に至って、山なみの一部が扇状地形を作り出し、向反から本遺跡のある下の宮地籍にまで達している。扇状地の形成は、竹之城原及び八ッ石久保に水源をもつ小河川と、桂久保、浦谷に水源をもつ小河川が要因であると思われる。これらの地域のうち、特に河川の流れる低位な所は、押し出しによる礫が散在しており、また河川の東側に続く尾根は、ローム層の堆積が厚い。金塚遺跡は、東に鹿曲川と鹿曲川によって形成された広大な沖積地を臨み、西側には扇状地をひかえる南北に長い地形を成している。

望月町の地形は、地質年代の新生代第四紀更新世に蓼科山を中心とする蓼科火山群によって形成されたといわれている。(註2) 蓼科山周辺地域は安山岩の分布が広くみられ、中でもしそ輝石安山岩、両輝石安山岩、角閃石安山岩が主体を成している。(註3) それらは望月町においては、八丁地、壘石、菅原、大谷地、吹上など八丁地川中流域に見ることができ、しかも熱の珍化作用による板状節理が発達し、天然記念物のごとき美しい露頭がみられる。その後、火山灰(ローム)や火山岩層が厚く堆積し、現在の基本的な地形の形成が成立している。(註4) 但し河川の周辺部は、河川の流れの変更や浸食作用をくり返し、あるいは河岸段丘を作り出しているので、形成期以後の地形変更はかなりあったものと思われる。さらに、蓼科火山と意を異にする形成層がある。それは、瓜生坂周辺と、本牧小学校西側から観音寺に向う高台で、「相浜層」(模式地：佐久市相浜)と呼ばれる湖沼性堆積物によって成り立っているものである。岩石は、凝灰岩、泥岩、砂岩及び礫質砂岩などが幾層にも互層しており水平層にちかい。上部の泥岩からは針葉樹、広葉樹や珪藻類の化石が、また下部からはメタセコイヤ(瓜生坂)の化石が産出する。なお、さらに下部の地層は、新生代第三紀鮮新世に層し、「瓜生坂層」と呼ばれるものである。(註5)

つまり、この地域一帯は、湖(沼)であり、湖の底に堆積したものが、隆起運動によりせり上り、現在の地形のように形成されたものと考えられる。金塚遺跡の詳しい地質構造は、「金塚遺跡試掘調査報告」を参考にされたい。(福島)



第1図 金塚遺跡及び周辺部遺跡分布図 (1 : 10000)

町遺跡番号	遺跡名	大字	小字	町遺跡番号	遺跡名	大字	小字
135	善郷寺A遺跡	春日	善郷寺	148	池田遺跡	春日	池田
138	姫塚古墳	"	別府久保	149	後沖遺跡	"	後沖
139	別府遺跡	"	別府	150	松原遺跡	"	松原
143	矢那田遺跡	"	矢那田	151	向反遺跡	"	向反
144	長戸遺跡	"	長戸	152	春日尾崎遺跡	"	桂久保
145	金塚遺跡	"	金塚	153	桂久保遺跡	"	"
146-1	金塚第1号古墳	"	"	154	栃久保A遺跡	"	栃久保
146-2	金塚第2号古墳	"	"	155	栃久保B遺跡	"	"
146-3	金塚第3号古墳	"	"	156-1	栃久保第1号古墳	"	"
146-4	金塚第4号古墳	"	長林	156-2	栃久保第2号古墳	"	"
146-5	金塚第5号古墳	"	"	157	栃久保城跡	"	"
146-6	金塚第6号古墳	"	"	159	浦谷A遺跡	"	浦谷
146-7	金塚第7号古墳	"	"	160	浦谷B遺跡	"	"
146-8	金塚第8号古墳	"	"	161	浄永坊遺跡	"	浄永坊
147	落合遺跡	"	落合	162	大門先遺跡	"	大門先

第1表 金塚遺跡周辺の遺跡分布表

第2節 歴史的環境

望月町における遺跡は、昭和55年11月から12月にかけて、教育委員会が主体となり分布調査を実施し、「望月町遺跡詳細分布調査報告書」(註6)を刊行した。すでに登録されているものも含めて349遺跡を確認している。

望月町は、山林、耕地、宅地、その他道路を含め127.28km²を有しており、特に山林や原野に囲まれた地域であるといえ、それ故、遺跡の立地状況がかなり限定されている。この分布区域は、八丁地川水系、鹿曲川水系、細小路川水系、布施川水系、茂田井地域に区分することができ、いずれも蓼科山を頂点として北側に放射状に広がり、やがて望月(本牧)地区に集中している。これらの水系や地域に分布する遺跡は、時代的かたよりをもっており、八丁地川水系は、平安時代、鹿曲川水系は、縄文式時代、細小路川水系は、縄文式時代と平安時代、布施川水系は、平安時代、茂田井地域は縄文式時代が主に存在している。また、弥生式時代の遺跡は、数例を除いてはほとんど確認されていないし、古墳時代の生活址も全く確認されていない。

金塚遺跡の位置する鹿曲川水系は、中でも最大の縄文式時代遺跡群(春日縄文式時代遺跡群)

(註7)を構成している。この遺跡群の範囲は、第1節でも記したが蓼科山の北麓、竹之城から向反、下の宮地籍までで、鹿曲川西方の扇状地に分布している。一部は、鹿曲川により形成された下の宮地籍の広大な河岸段丘面に位置している。発掘調査を実施したのは金塚遺跡だけなので詳細をとらえることはできないが、分布調査の結果からみると早期から晩期までくまなく存在し、中でも圧倒的に中期が多い。しかも中道、松原、大門先など3万㎡もの大規模な遺跡が目立って存在している。

遺跡群の構成要因は、扇状地を作り出した多数の湧水とその河川また、このなだらかな扇状地と、その中に存在する微高地や低位な尾根あるいは台地があげられる。さらに、細小路川との合流地点にもあたり、かなり環境に恵まれた所である。

本遺跡周辺には、さらに金塚古墳群が存在し、かつては20基程はあったということであるが、現存するものは3基だけである。

時代は下るが、鹿曲川と細小路川の合流地点の右岸には、江戸時代に築かれた五郎兵衛用水の取り入れ口がある。五郎兵衛用水は、春日の取り入れ口から鹿曲川に比高差をつけながら右岸を流れ、断涯に長い隧道をあげ、あるいは外を通り、協和の片倉から入布施を下り、布施川を渡り、布施川右岸を流れながら百沢に抜け、やがて浅科村五郎兵衛新田に至っている。また、用水に伴う石像物が多数残されている。参考までに付け加えておきたい。(福島)

第3章 昭和55年度試掘調査報告

第1節 調査の構成

- | | |
|---------|---|
| 1、調査内容 | 金塚遺跡試掘調査
依頼者より、発掘調査地域の一部が遺跡とは考えられない、また破壊されているのではないかという内容に答えるために実施した。 |
| 2、調査地域 | 長野県北佐久郡望月町大字春日字金塚538の1番地 |
| 3、調査依頼者 | 東信土地改良事務所(委託契約事業ではない) |
| 4、調査主体 | 望月町教育委員会 |
| 5、調査期日 | 昭和55年10月28日 |
| 6、調査方法 | 250cm×250cmのグリッド方式 |
| 7、参加者 | (担当者)福島邦男、(作業員)大沢礼市、吉沢浩矣、吉沢弥太郎、大森英七、倉見渡、桜井卯作、関嘉津武、大塚米子、福島茂子 |

第2節 調査内容と結果

試掘調査の理由は、発掘調査予定地域の一部が、金塚遺跡の中心地をはずれ、斜面下方の水田面であること、斜面と水田面の間に1.5m～1m程の段差が生じており、水田造成の時に破壊されているのではないかということである。この疑問に答えるため、できるだけ条件の悪い部分を選定し、またできるだけ広い範囲に250cm×250cmのグリッドを9ヶ所設定し調査を実施した。(第2図)。

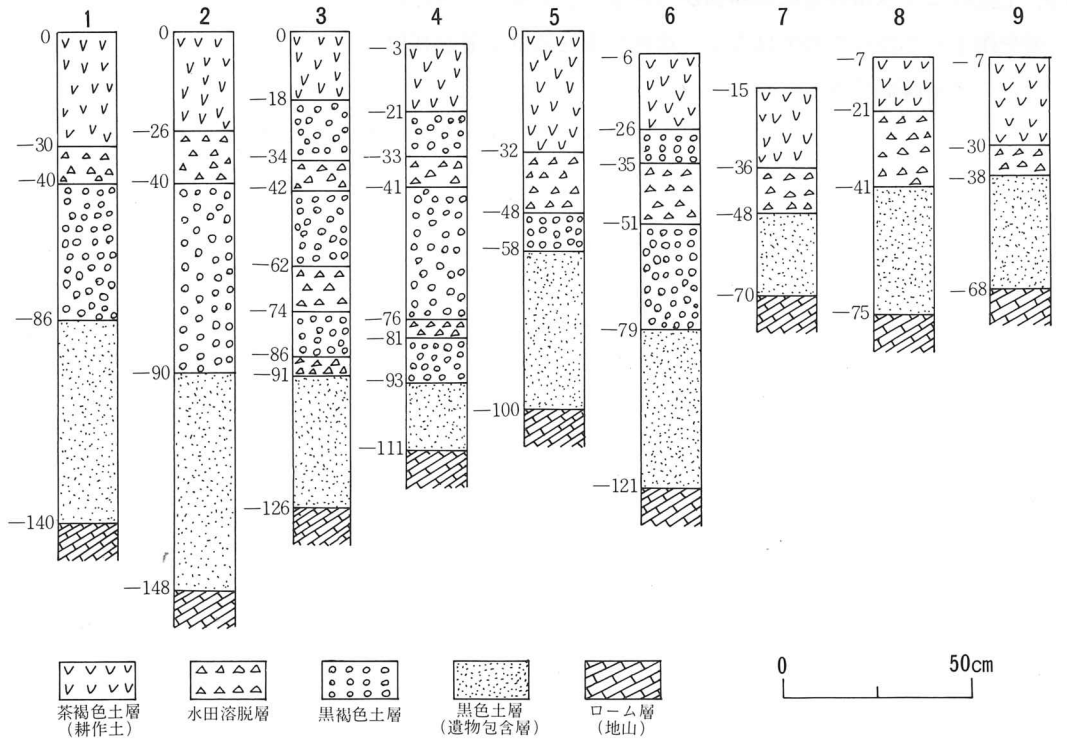
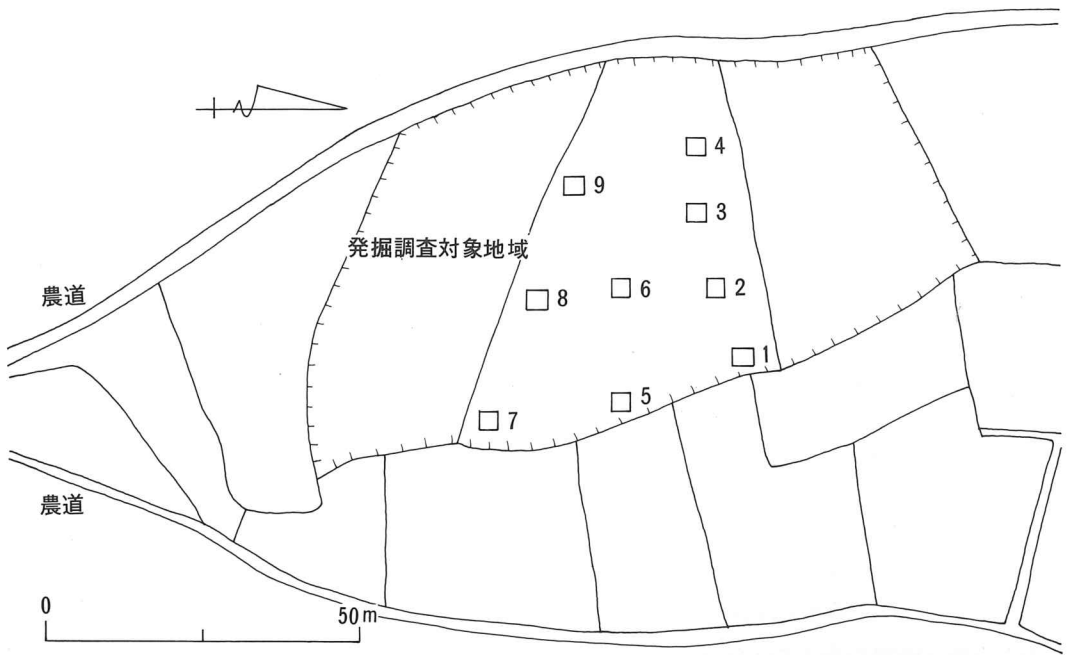
調査内容は、遺構と遺物の検出である。本地域は、蓼科火山を中心とした火山灰堆積層であるため、表土から地山(黄色ローム層)までの掘り込みを行なった。

その結果は、次のとおりである。

- ①、表土から地山までの深さは、当初予想していた以上の130cm～60cmを測り、調査した9グリッドのうちほとんどが100cmを越えていた。
- ②、土層の状態は、地山直上の黒色土層だけが自然堆積層であり、それより上層はすべて後世における流れ込み、あるいは客土による人為的な水田造成を示しており、黒色土層(遺物包含層)から下層は破壊を受けていない。
- ③、上記により水田の造成は断面からみると、1層～3層にわたって存在しているが、自然堆積層を削平して作ったのではなく、後世の流れ込み土層を利用し、あるいは客土を行なって造成したことが確認できる。
- ④、斜面と水田の段差は、段差のある部分程地山が深い事を考えれば、沢状の地形が存在し、自然にこのような地形になったのではないかと思われる。あるいは、本遺跡の西方を流れる小河川による河岸段丘線とも考えられる。
- ⑤、遺物は、黒色土層中だけでなく上層からも出土したが、下層の破壊により浮いたものではなく、斜面上方からの流れ込みと考えられる。
- ⑥、以上の内容から、試掘調査の範囲内においてはまったく破壊はなく当時の状況をそのまま保っていると判断した。

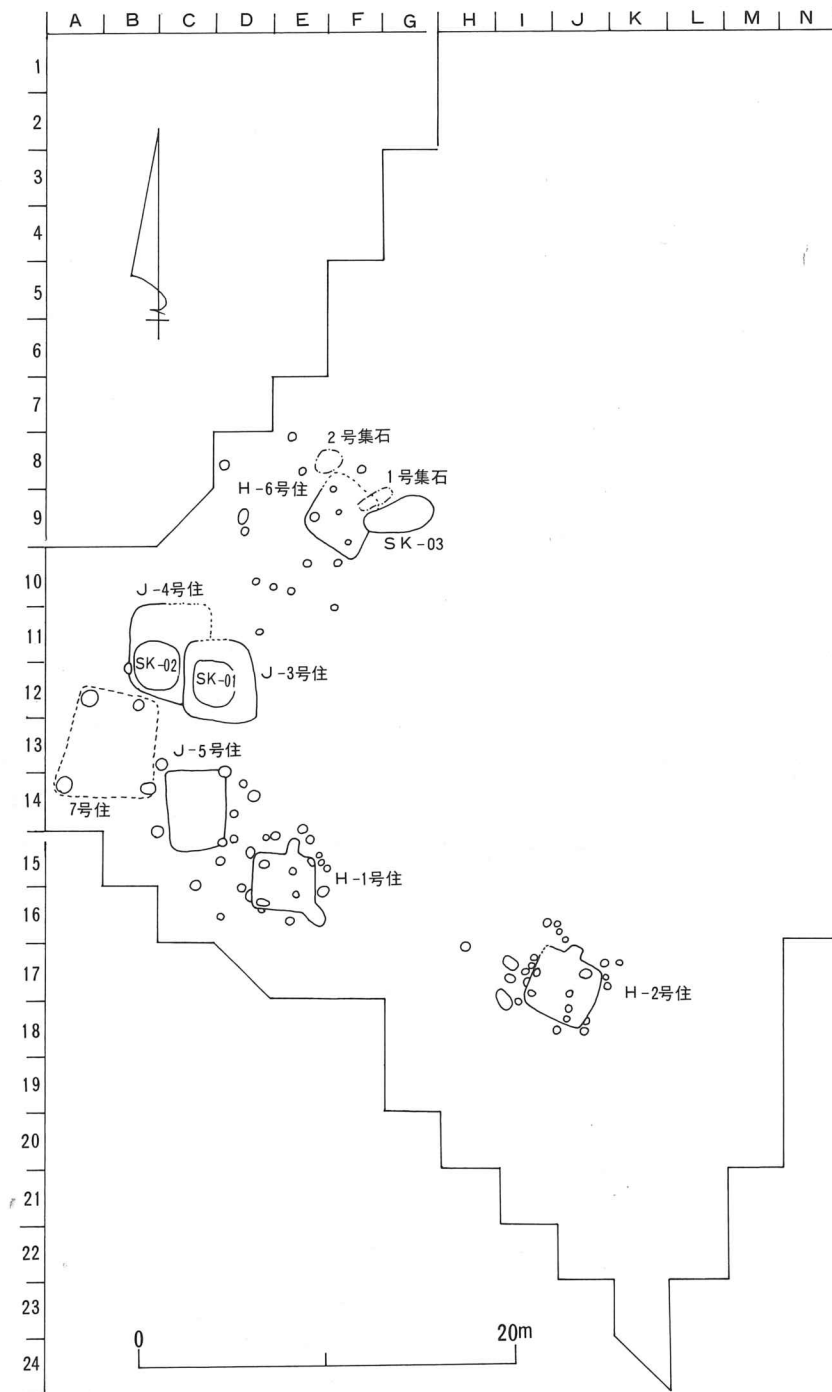
出土した遺物は、次のとおりである。

- ①、縄文式土器(早期) 田戸下層式土器
(前期) 関山式土器、諸磯式土器
(中期) 藤内式土器
 - ②、石器 打製石斧、凹石、磨石、敲石、石錐、スクレイパー、その他剥片
- なお、遺構は住居址らしい落ち込みが1ヶ所確認されているが、限定されたグリッド中では明確にすることはできなかった。
- (本章は、55望教第1239号で東信土地改良事務所に提出した内容に加筆したものである。)(福島)



第2図 試掘調査平面図及び土層断面図 (上図 1 : 1200 · 下図 1 : 20)

第4章 昭和56年度発掘調査・遺構及び遺物



第3図 金塚遺跡グリッド配置図及び遺構全体図 (1 : 400)

金塚遺跡で検出された遺構は、縄文式早期の住居址3軒、平安時代の住居址3軒、時期不詳の住居址1軒、時期不詳の土坑3基、時期不詳の集石址2基がある。遺物は、縄文式早期～晩期の土器、石器、弥生式土器、古墳時代の飾り金具、平安時代の土師器、須恵器が出土している。

総体的には良好な検出状態とはいえませんが、中でも平安時代の第1号住居址は、原形を保ち、保存状態がよかった。また、予想もしていなかった縄文式早期の住居址が検出できたことは大きな成果であった(第3図)。

第1節 第1号住居址

遺構(第4図、第2・3図版)

本住居址は、調査区南西部のD-15・16、E-15・16グリッドにかけて検出された平安時代の住居址である。プランは、東西3.3m、南北3.3mを測り隅丸方形を呈している。壁高は30cmで比較的深い。主軸はほぼ真北方向を示している。カマドは北側壁面の中央に位置し、長さ(南北)1.3m、幅(東西)1mを測る。焚口部は住居址の内部に存在するが他は外部に突き出す外カマドの様相を呈している。構造は石組みであるが、石の支えとして粘土が詰められていた。焚口部の両袖石と内部の支柱石はすでに抜かれており、痕跡だけが明瞭に検出された。煙道はすでにつぶれていたが両側の石は残っており、これからかなり狭長なものであったことが解かる。焚口部を中心に床面にまで焼土、炭、灰が厚く堆積しており、長期間使用したことを物語っている。床面の状態は、極めて固く締っており、タタキを成した感を受ける。全体に凹凸があるがほぼ水平である。壁面は、床面程には締っていないがかなり固い。住居址の東と南側壁面下には浅い周溝がある。柱穴は、床面に支柱穴4個と住居址の壁外の周囲に12個検出されている。支柱穴は、柱の立替えがあったと考えられ、楕円形に大きく広がっている。周囲の柱穴は、竪穴部分から立ち上がる壁を構築したとすれば、屋根の垂木を支えるとともに壁の構造材のものと考えられ、木材による壁を構築しなかったとすれば、直接屋根の垂木の柱穴と考えられる。東南の隅には、住居址から直接連なるピットが存在しており、柱穴状のものがその内部にさらに存在するが、むしろ土坑(貯蔵穴)ではないかと考えられる。

本住居址は一般的なものであるが、保存状態が良く良好なものである。

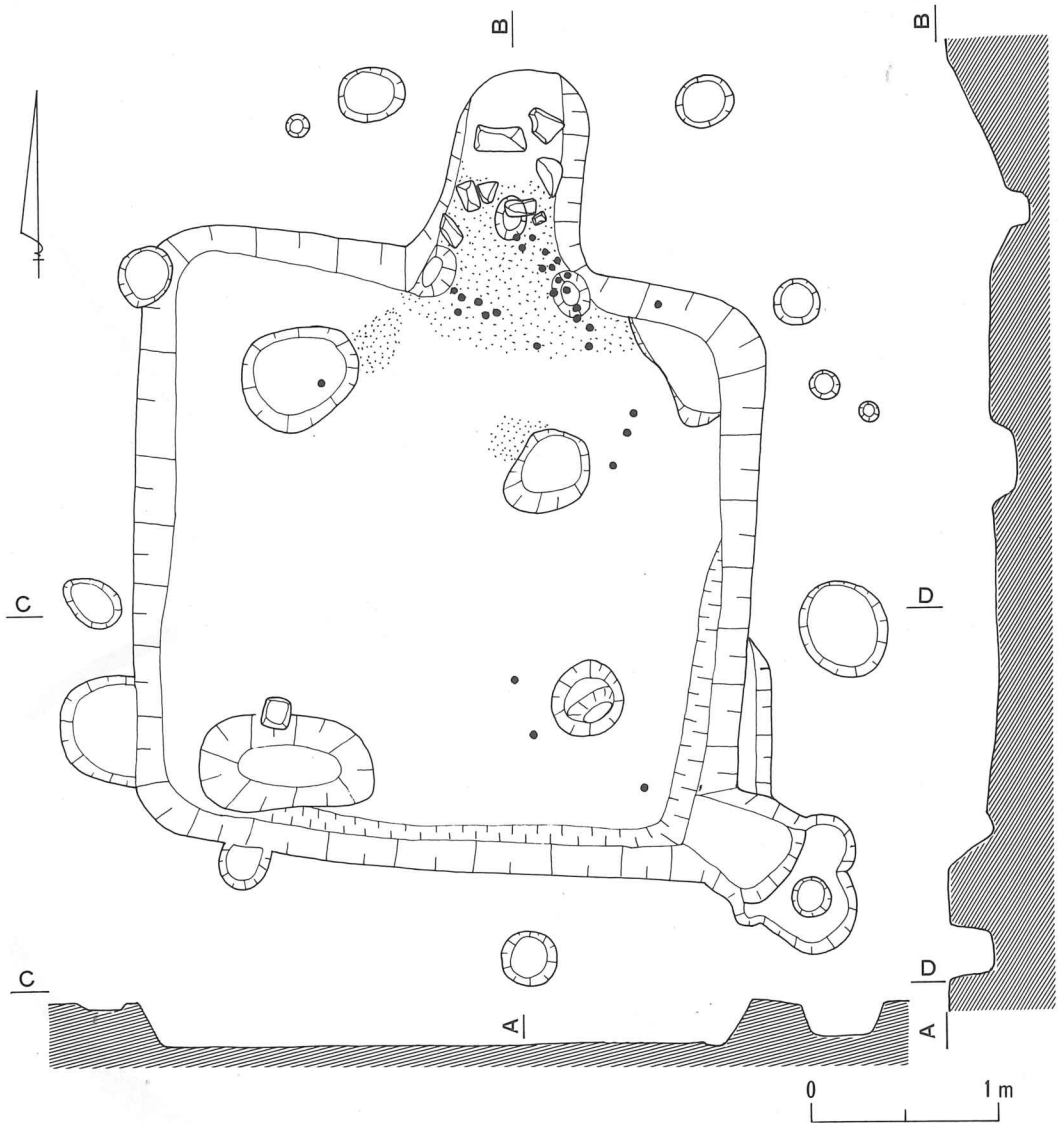
遺物(第5図、第9・10図版)

本址出土の遺物は、カマドに近い覆土内で須恵器坏形土器(1・2・3)、カマド内部及び焚口部、さらに焼土散乱部で土師器の甕形土器(4・5)、須恵器の甕形土器(6・7)が出土している。1～3は、ロクロの水引き整形痕が顕著で、いずれも右廻りを示し、胎土には小石や砂粒がやや混入している。内外面には重ね焼成のための火だすきが残されている。青灰色を示す焼成良好の資料である。3はかなり薄い甕形土器の資料であるが、赤褐色を呈し焼成は悪い。7は、比較的

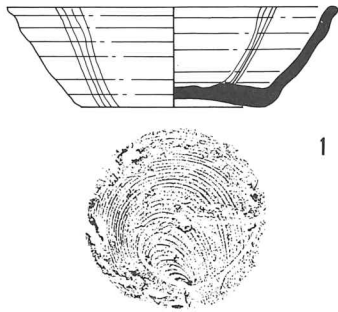
厚手の小型の甕形土器の資料で、外部は丁寧な整形が成されているが内部は整形痕が顕著に残されている。

本資料は9世紀末から10世紀初頭に比定されるものである。。

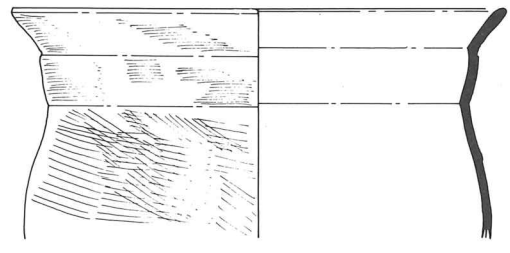
(福島)



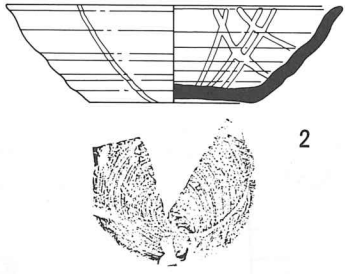
第4図 第1号住居址実測図(1:40)



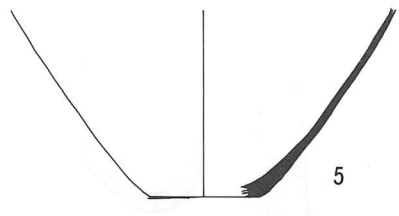
1



4



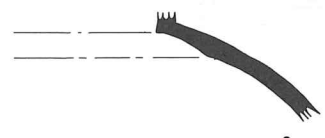
2



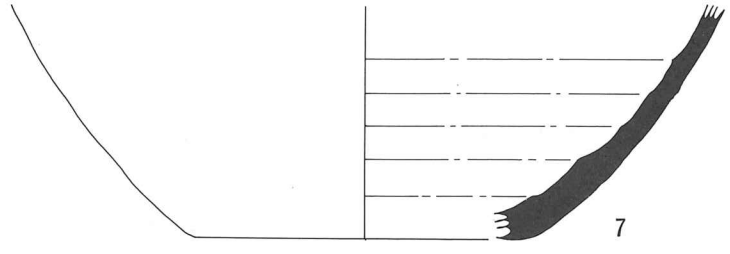
5



3



6



7

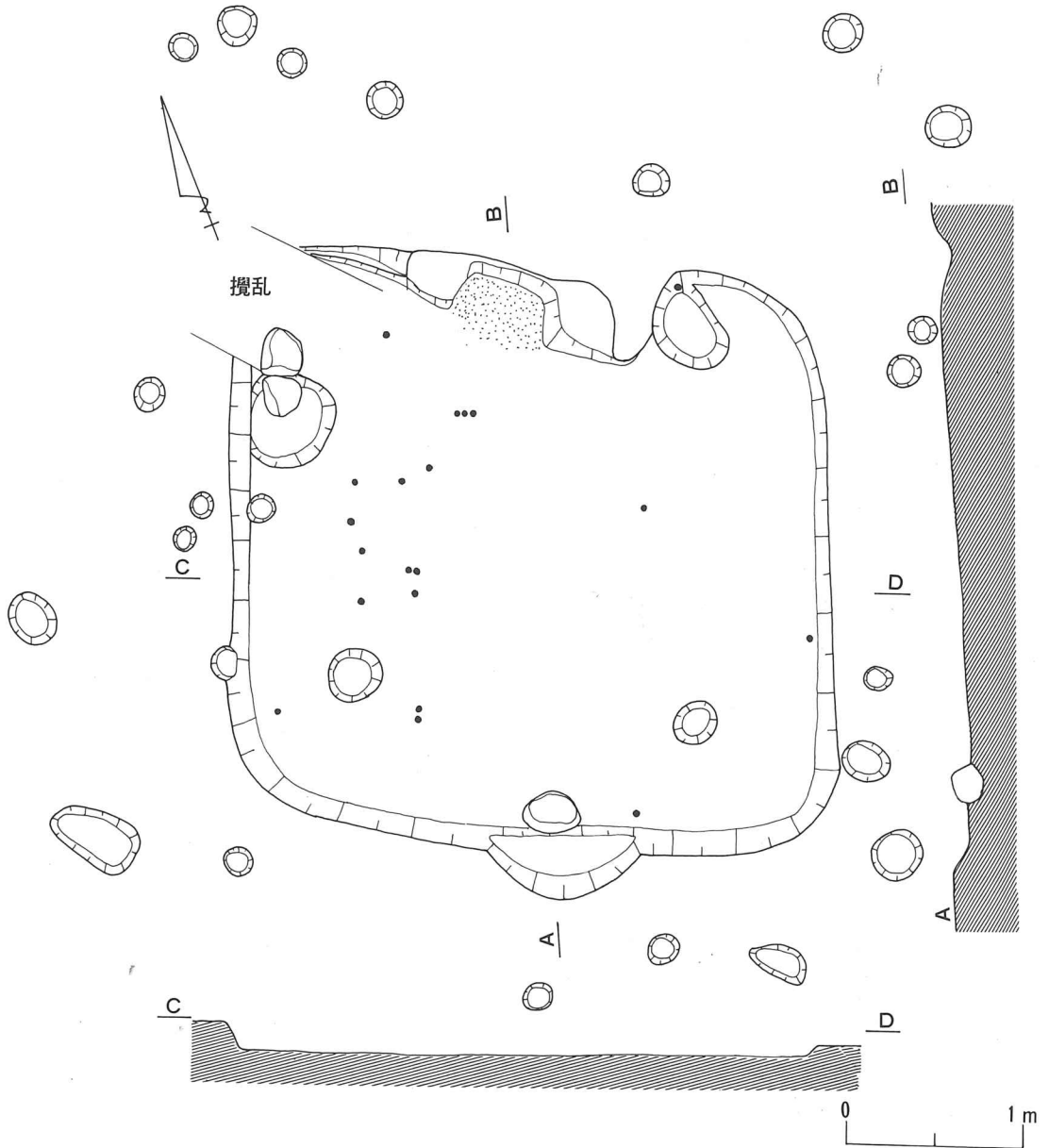
0 10cm

第5図 第1号住居址出土遺物 (1 : 3)

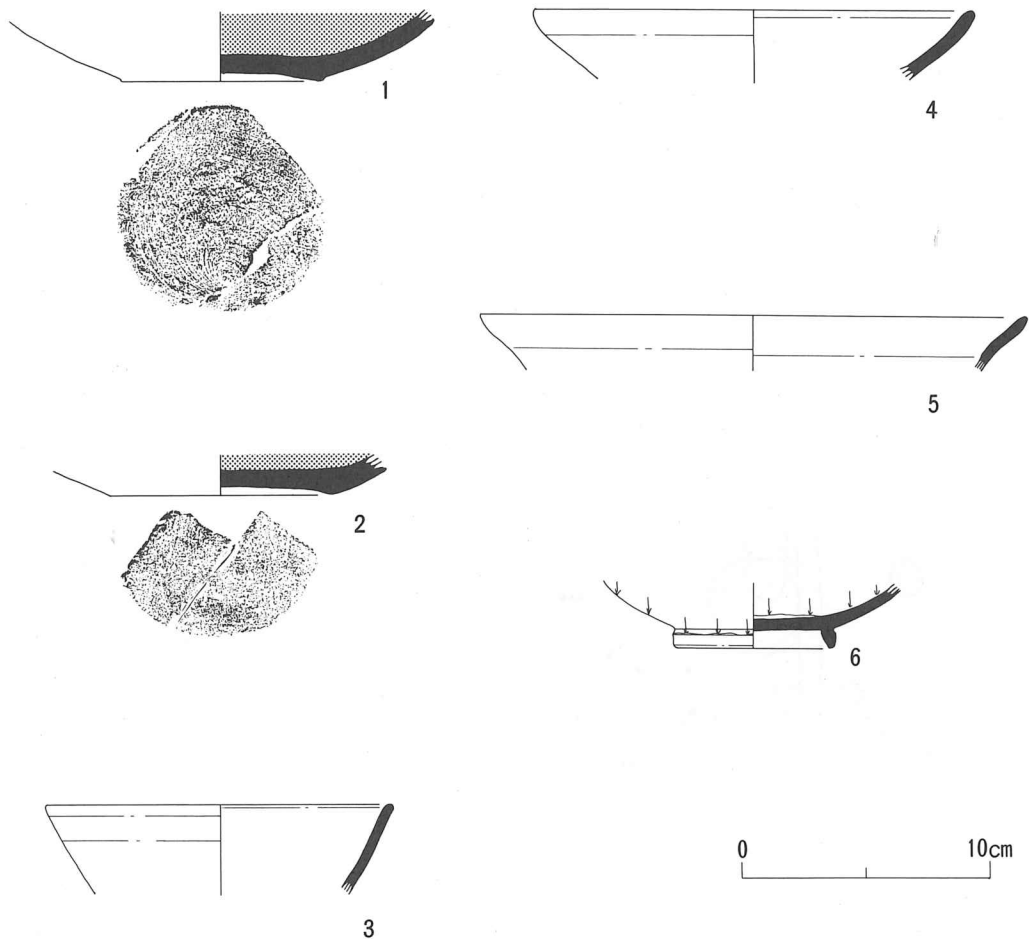
第2節 第2号住居址

遺構 (第6図、第4図版)

本住居址は、調査区南部のJ-16・17、K-16・17グリッドにかけて検出された隅丸方形の住



第6図 第2号住居址実測図 (1:40)



第7図 第2号住居址出土遺物（1：3）

居址である。規模は、東西3.35m、南北3.35mを測る。主軸はN23°Wでやや東側に主軸が向いている。壁高は平均18cmでかなり浅い。カマドは、北側壁面のほぼ中央部に位置しているが、住居址内の北側を走る近年の暗渠排水路によりほとんど破壊されてしまった。本来は石組みのカマドであつたらしく焼けた石が付近に散乱し、また焼土もかなり厚く堆積していた。残存する掘り方の規模は、長さ(南北)50cm、幅(東西)60cmを測る。煙道は住居址外に存在していたと考えられるが、本体は内部に構築されていた。住居址の掘り込み当初から湧水がたまり、また床面や壁面からもかなり激しい勢いで湧水が噴出しており、短時間で住居址が水没する程であつたが、床

面は比較的固く締っており、部分的に凹凸がみられるが全体にほぼ水平である。壁は湧水のため周囲の生活面と共に軟弱であった。

本住居址の上層は耕作土まで1m以上の自然あるいは人為的な堆積があり、暗渠排水路の部分を除いては攪乱がみうけられない。したがって、当初から浅い住居址であったといえる。また湧水は、いつの時期かに地下水の水脈に変化がおり、本址に通づるようになったと想像される。

遺物（第7図、第10図版）

本址出土の遺物は、床面から土師器の内面黒色研磨の環形土器（1、2）、甕形土器（5）、須恵器の環形土器（3・4）、甕形土器、灰釉陶器（6）が得られている。1は大形の環で、底部からの立ち上がりはかなり外反している。厚さは3.5mmと薄いが比較的焼成は良好で赤褐色を呈している。底部は糸切りが行なわれロクロ回転方向は右である。2も同様の環であるが、1に比べるとやや小形である。（渡辺）

第3節 第3号住居址

遺構（第8図・第4図版）

本址は、調査区西寄りのC-11・12、D-11・12グリッドで検出された縄文式時代早期の住居址である。本址は、西側に続く第4号住居址と複合関係をもっており、切り合いの状態から第4号住居址→第3号住居址の順に新旧関係が解っている。また、本址の東側から第4号住居址の北側を貫ぬく近年の暗渠排水路が作られており破壊が目立つ。規模は、東西3.85m、南北4.15mを測り、隅丸に近い方形を呈している。床面の中央部には、規模の大きな土壇（SK-01）が切り合い関係を成しており、床面の大部分がこれにより破壊を受けている。土壇構築の際床面が若干変更されたと思われ、土壇側にやや傾斜をもっている部分が認められる。壁は比較的良く残り、高い所で27cm、低い所で14cmを測る。柱穴は確認することができなかった。

遺物（第19図42～46、第14図版）

本址出土の遺物は、縄文式早期の山形押型文土器、田戸系土器、撚糸文土器、の微細片、石鏃、両極石器（註8）（曾根型彫刻器といわれている資料）、スクレイパーが出土しており、押型文系土器群に伴なう一括資料とみることができる。詳細は後述の第5章を参照されたい。（三石）

第4節 第4号住居址

遺構（第8図・第5図版）

本址は、調査区西寄りのB-10・11・12、C-10・11・12グリッドにかけて検出された縄文式時代早期の住居址である。本址は、第3号住居址の西側に位置し、東側のほぼ半分を切り取られる複合関係を成しており、その状態から第4号住居址→第3号住居址の順に編年が確認されている。

る。プランの北側には、第3号住居址部分を暗渠排水路が走っており、かなり破壊を受けている。したがって規模は南北5.1mを測り、東西は推測の域を出ないがほぼ同様と思われ、隅丸を示す方形プランになると思われる。本址も第3号住居址の例と同様、床面には大きな土壇（SK-02）が存在しており、残存する床面はほんの僅かである。したがって床面の様相は明瞭ではない。壁は、南と西側がかなり明確に把握されており、高さは15~20cmを測る。柱穴は、西側壁面の中央部よりやや南の所で1個壁を切るように検出されたただけである。

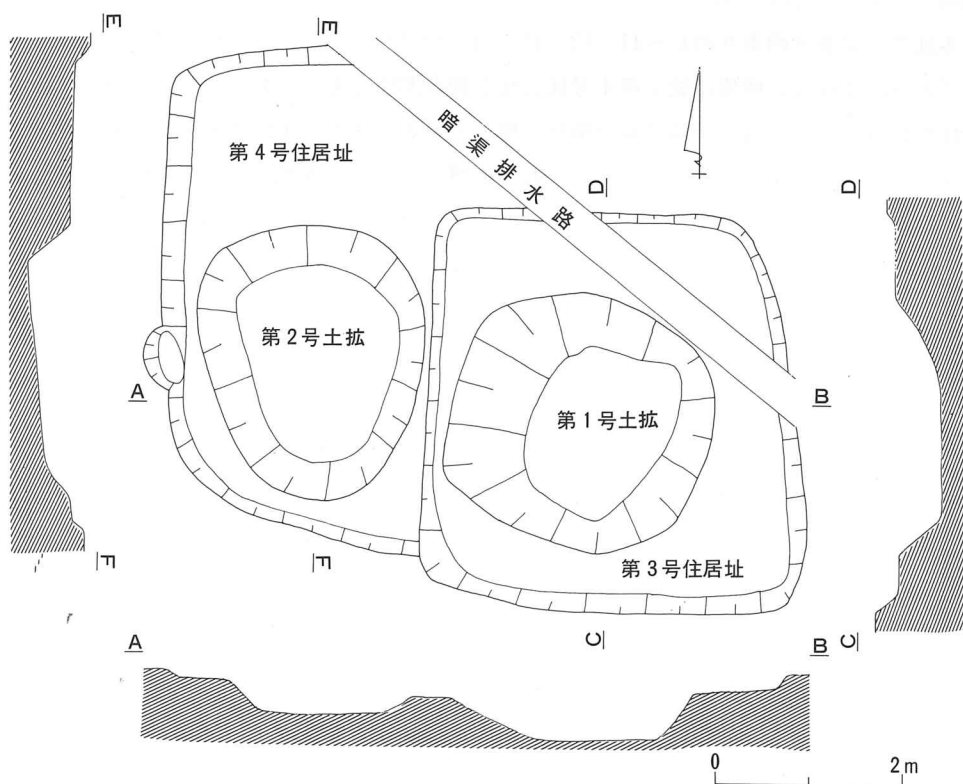
本址の中央部から第3号住居址にかけてローマウンドが見つかり、深さは第2号土壇の底部直上にまで達していた。時期的には、本址及び土壇構築以後のものであることは確かである。なお住居址の覆土は黒色土である。

遺物（第15図1~11、第19図47~59、第11・14図版）

本址出土の遺物は、縄文式早期の山形押型文土器、楕円押型文土器、田戸下層式土器、撚糸文土器、石鏃、両極石器、スクレイパーなどが出土しており、組成は第3号住居址と同様であるが、黒曜石の製品や末製品及び剥片が特に多く目立った。

詳細は第5章で一括分析をしたので参照されたい。

（黒岩）

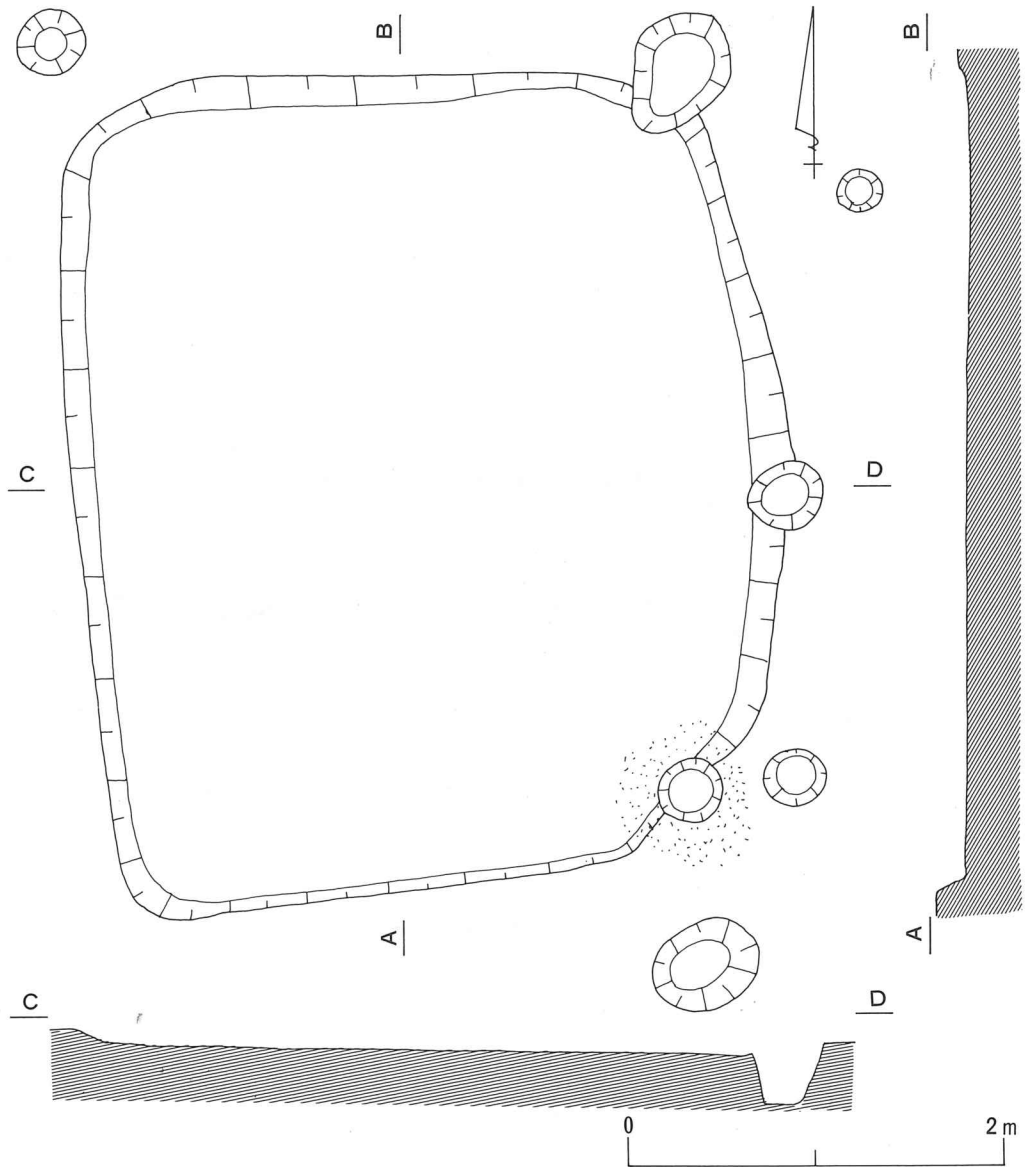


第8図 第3号住居址、第4号住居址、第1号土壇（SK-01）第2号土壇（SK-02）実測図（1：80）

第5節 第5号住居址

遺構 (第9図・第5図版)

本址は、調査区南西部のC-13・14・15、D-13・14・15グリッドで検出された縄文式時代早期の住居址である。第3・4号住居址の南側に位置し、切り合いもなく単独で検出された。規模



第9図 第5号住居址実測図 (1:40)

は、東西3.8m、南北4.3m、壁高8～15cmを測る隅丸方形のプランを呈している。床面は全体に北東方向へ微妙に傾斜しているが、固く締っており良好である。柱穴は、内部には存在せず住居址の周囲に7個検出されている。これらの在り方は、南西コーナーにはないが他の3つのコーナーにそれぞれ1個ずつ存在し、また東側壁外に集中して4個みつまっている。深さは25～30cmとほぼ平均している。主柱のない恐らくは屋根の垂木を直接埋めて家屋の構築を成したものと思われる。住居址東南隅の内外部にかけて焼土が比較的厚く堆積しており、本址に伴なう炉址ではないかと思われる。焼土の範囲はおよそ60×60cmで内部から多面体磨石1点と黒曜石の剥片が出土している。

本址の様相は、新水B遺跡第5号住居址に近似している。

遺物（第15図12～16、第18図41、第11・14・15図版）

本址出土の遺物は、縄文式早期の山形押型文土器、田戸下層式土器、撚糸文土器、両極石器、尖頭器、多面体磨石などが出土しているが第3・4号住居址に比べ出土量は少ない。また本址は押型文土器よりも田戸下層式土器の方が主体を成している。

詳細は後述の第5章を参照されたい。

（黒岩）

第6節 第6号住居址

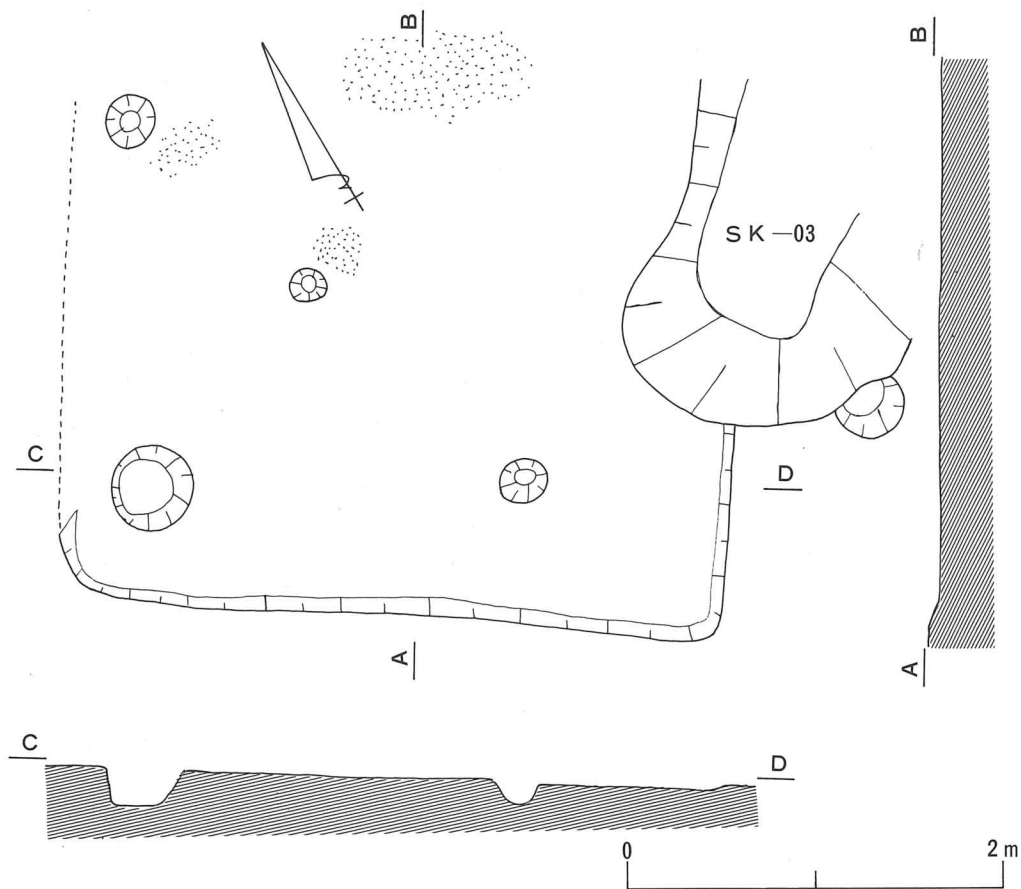
遺構（第10図・第6図版）

本址は、調査地区のほぼ中央部E-9・10、F-9・10グリッドで検出された平安時代の住居址である。本址は第3号土壇（SK-03）との複合関係をもっており、第3号土壇に東側部分が切られている。この部分だけは、全体に耕作によるものであろうと思われ壁が浅く、西側壁面と北側壁面は存在していなかった。規模は推定で3.6m、壁高は僅かに1.6cmを測るにすぎない。柱穴は、床面の中央に1個とコーナーに当たる所に3個存在している。コーナー部の柱穴は、主柱穴と考えてよさそうである。床面の状態は、ほぼ平坦で固く締っていた。床面の中央部と北側壁面に近い所に焼土が散乱しており、カマドが北側にあったことを暗示している。比較的規模の小さな平安時代の住居址として位置づけることができる。

遺物

本址からは、確実に伴なうと考えられる遺物は出土していない。やや上層で須恵器の坏が出土しているが、危険をさげグリッド遺物とした。

（佐藤）



第10図 第6号住居址実測図 (1:40)

第7節 第7号住居址

遺構 (第11図・第6図版)

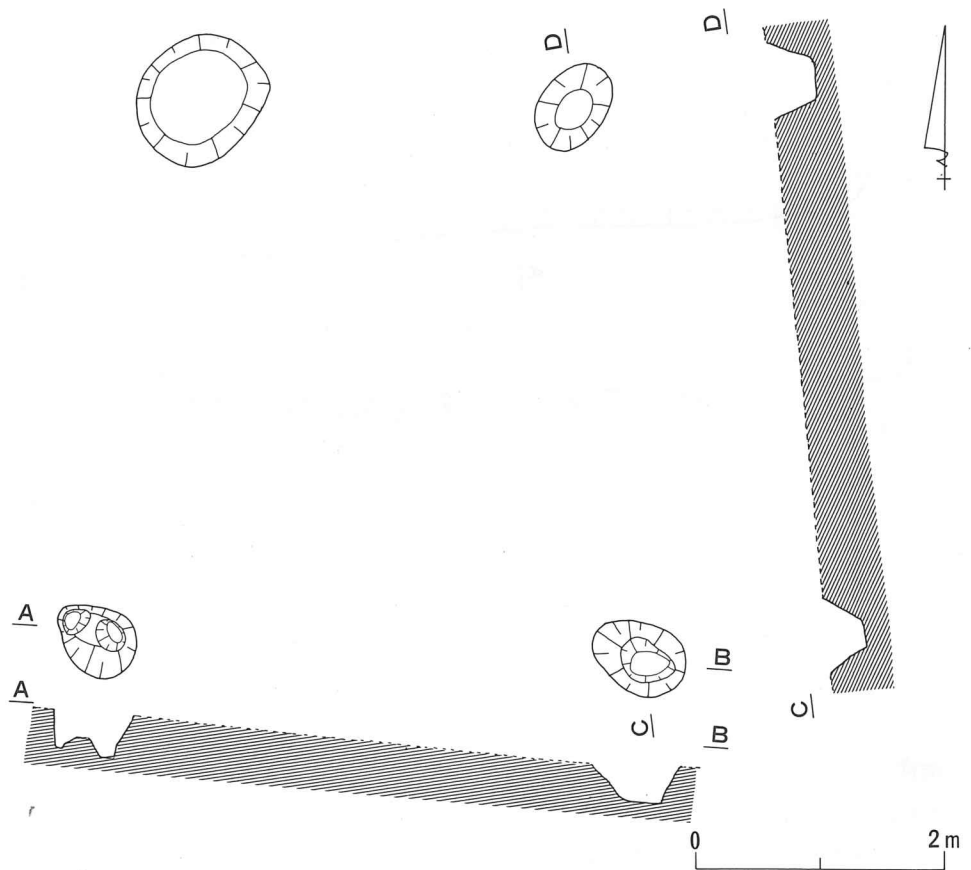
本址は、調査区の西側A-12・13・14、B-12・13・14グリッドで検出された住居址である。本址は、床及び壁面などがすでに破壊を受け、柱穴だけでプランを確認したものである。西側の東西の柱穴間4.3m、東側の同柱穴間4.4m、北側の南北の柱穴間3m、西側の同柱穴間4.4mを測り、あくまでも想定の域は出ないが、およそ一辺4.5～5m内外の方形の住居址であったと思われる。これらの柱穴は、主柱穴として捉えることができる。柱穴の深さは、30～35cmとほぼ一定している。南西部の柱穴は柱の取り替えが行なわれたとみられ、同じ掘り方の内部に2つの柱穴が

存在していた。柱穴内より遺物が出土していないことから本址の時期を捉えるすべもないが、形態的に平安時代のもものと推測することができる。しかし、確実なる把握ができないのでここでは時期不詳として取りあつかいをしたい。

遺物

本址出土の遺物は何もなかった。

(渡辺)



第11図 第7号住居址実測図 (1 : 60)

第8節 第1号土坑 (SK-01)

遺構 (第8図・第4図版)

本土坑は、調査区西寄りの第3号住居址の床面を切って存在していた。平面プランは、隅丸方形に近い円形を呈しており、東西2.57m、南北2.54m、深さは50cmを測るが底部に至ってはやや中央部に摺鉢状に微傾斜しているため、中央部程深いという傾向をもっている。土坑内覆土の堆積状況は、土坑上層から続くロームマウンドが底部直上まで存在し、土坑の壁に接する部分及び底部には黒色土が堆積していた。土坑壁面からは多量の湧水が噴出し、水のくみ上げと並行しながらの調査であり、底部の調査には難を極めた。

本址の時期は、遺物からは捉えることができないが、縄文式早期の住居址を切って構築しているのでこの段階での新旧関係を確認したのみである。(三石)

第9節 第2号土坑 (SK-02)

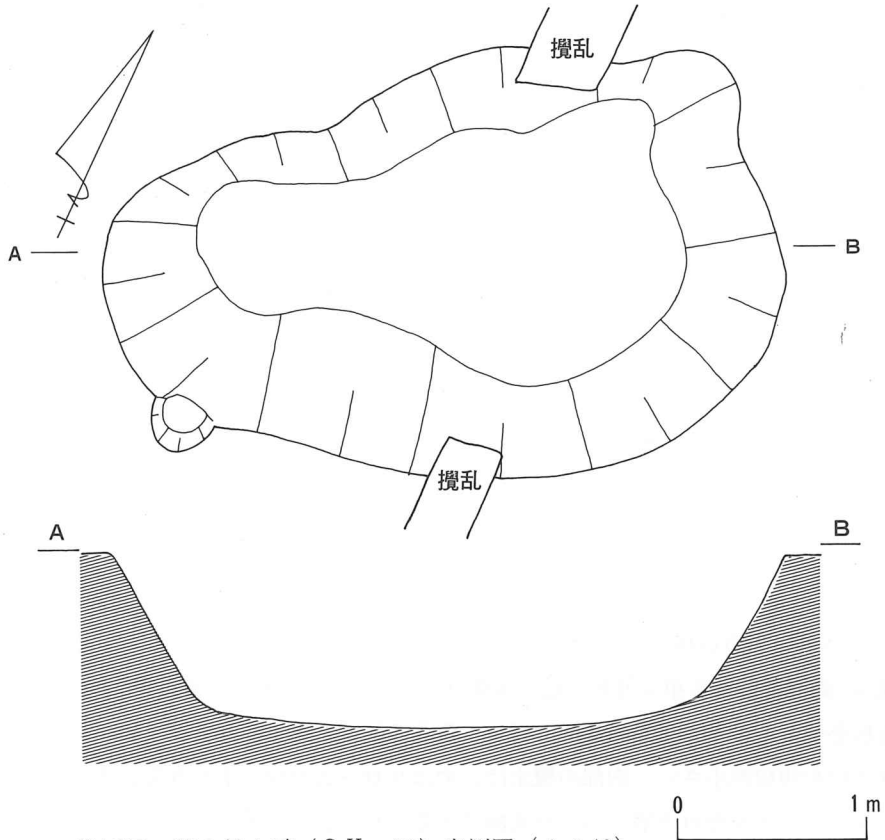
遺構 (第8図・第5図版)

本土坑は、調査区西側の第4号住居址の床面を切って存在していた。平面プランは、やや方形に近い楕円形を呈しており、東西の長径2.43m、南北の長径2.86m、深さ35~40cmを測り、第1号土坑よりはやや規模が小さい。内部の覆土は、やはりロームマウンドが底部直上にまで続き、壁に接する部分と底部が黒色土層といった状態である。したがって本土坑は、ロームによる埋土が行なわれたとみてもよい。第3号土坑と同様湧水が激しく噴出し、排水作業と並行しながらの調査であった。本土坑の時期を決定する資料は皆無といってよく、ロームマウンドに混在するように押型文土器やスクレイパーが出土しているが、原位置から移動されたロームであり、さらにロームの所在を確認できない以上土坑に伴う資料とすることはできない。したがって第4号住居址よりも新しい遺構であること以上には時期設定はできなかった。(黒岩)

第10節 第3号土坑 (SK-03)

遺構 (第12図・第7図版)

本土坑は、調査区のほぼ中央部の第6号住居址を切って構築されたものである。平面プランは東西に長い楕円形を呈しており、規模は、東西3.5m、南北の長径2.25m、深さは95~100cmを測る。第1・2号土坑に比べかなり深い。覆土は黒色土と拳大の礫が混在状態で堆積していた。他の土坑と同様湧水が激しく噴出し排水作業と並行しながらの調査であり、特に底部の調査に難を極めた。時期は、内部より縄文式土器の細片、土師器環、四耳壺の小片が出土しているが、主体的な遺物を捉えることができず、時期不明と言わざるを得ない。(佐藤)

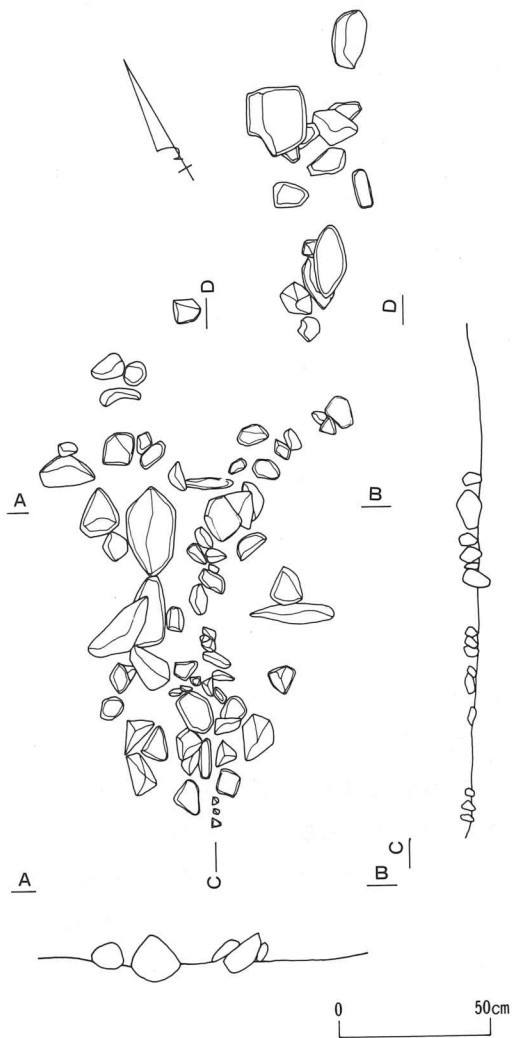


第12図 第3号土塚 (SK-03) 実測図 (1:40)

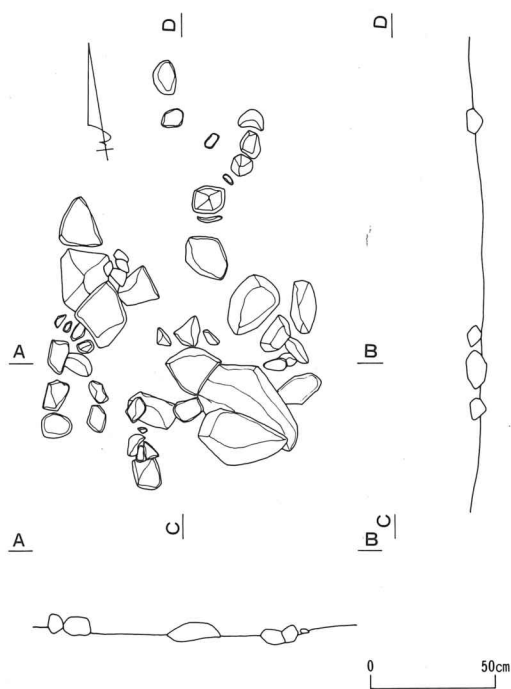
第11節 第1号集石址

遺構 (第13図・第7図版)

本集石址は、第6号住居址上にかかって検出されたもので、この上面にはロームが乗っていた。集石址の石は、人頭大のものは僅かで多くは拳大のものである。全体に配置されたというよりも、あくまでも集石の様相を呈している。北東-南西方向に2.7m、幅1mを測り、下部は、ロームと黒色土混りの土層で、この上に乗っている状態であった。したがって土塚状の落ち込みなどは存在していない。遺物はなにも出土していない。(佐藤)



第13図 第1号集石址実測図 (1:30)



第14図 第2号集石址実測図 (1:30)

第12節 第2号集石址

遺構 (第14図・第8図版)

本集石址は、調査区のほぼ中央部、第6号住居址の北西部で検出された。本址も同様にロームと黒色土の混在した土層上に位置しており、東西1.1m、南北1.7mを測る。石は人頭大と拳大が半数程度に存在し、第1号集石址に比べると比較的集中している感を受ける。集中の下部には何ら遺構を検出することができはかった。集石中には木炭が僅かに散乱していたが、第6号住居址のカマドとの関連があるので、本址に伴うものかどうかは不明である。遺物は何も出土していない。

(三石)

第5章 金塚遺跡出土の土器

第1節 縄文式時代の土器

金塚遺跡出土の縄文式土器は、完形品はなく、破片がおびただしい数にのぼっている。その中で資料的に代表的なものを挿出し図示した。遺構から出土した土器は極めて僅かであったため、本章で一括して分析を行なうことにした。

第1群土器（第15図・第11図版）

本群は、山形押型文土器、楕円押型文土器、撚糸文土器、沈線文及び貝殻沈線文土器、無文土器の一群をいう。これらは、縄文式早期末葉に位置づけられるものである。第15図1～11は、第4号住居址出土、12～16は、第5号住居址出土の資料で、他は第3号・4号・5号住居址付近のグリッドから出土した資料である。グリッドの資料は、本来はいつれかの住居址に伴うものと考えられる。

第1類土器：山形押型文土器を本類とした。原体の種類から三種に大別される。

A種は、山形文だけが器面に対して横位に施文されているもの（1～7、12、18～20）である。これらの中には無文帯のみられるもの（1～3、5、7、18）があり、他はみられない。しかし、小破片であるため他の資料も無文帯を有するものである可能性もある。施文原体の長さが解かる資料はない。山形の1サイクル(原体の円周に陰刻された山形の数)は2～3と考えるが確実に捉えることのできるものはA種にはない。胎土は3区分でき、石英粒を多量に含んでいるもの（5、19）、石英粒が殆んど含まれず、軽石等砂粒を比較的含んでいるもの（1～4、6、7、12、20）、殆んど何も含まず、胎土が一定しているもの（18）がある。繊維を含んでいるものは1片もない。色調は、1が内外面ともに赤褐色、5も外面は赤褐色であるが、内面は黒色である。他は、うすい茶褐色ないしは黄褐色であり、内面が黒色のものが多い。厚さは全体に1cm前後である。

B種は、山形文が縦位に施文されているものであり、17と21が対象となるが、21は施文原体がやや異なるので本種は17の1片を対象とした。A種に比べると山形文が整っており、陰刻部の間隔も不烈いの部分はほとんどない。胎土には、軽石と僅かな石英が混入し、茶褐色を示している。

C種は、山形文の所々に楕円がみられるもので、21の1片だけである。山形文は、A種、B種とは異なり、角度が鋭角で波調も長い。原体の長さは1.8～2cm程度で4条の陰刻が成され、円周には2個の山形のくり返しがみられる。楕円の粒はあまり整ってはならず、大小2種が確認できる。厚さは0.7cmを測り胎土には石英、砂粒が混入し、赤褐色を示すものである。

第2類土器：楕円押型文土器を本類とし、A、Bの二種に分類できる。

A種は、一般的な楕円文（8、22）で、8は、扁平な楕円文で横位に施文されている。胎土に

は極めて多量の石英粒が混入しており厚さは6mmを測る。内外面ともに黒褐色で焼成がやや悪い資料である。22は、かなり整った穀粒状の楕円を成している口縁部の資料である。口唇及び口縁部には僅かな無文帯を残している。原体の末端部にも陰刻が成されており、無文帯との境の所にも楕円文がみられる。胎土は極めて一定しており、混入物はほとんど無いといってよい。色調は薄茶色をしており、焼成良好の資料である。

B種は、粗大な楕円文(9、23、24)で、繊維の入らない23と、多量に混入している9、24とに分けることができる。23は、楕円の長さ1.6cm×1.6cmのほぼ四角形をしており斜位に回転押捺されている。胎土には、石英、チャートを中心にした混入物がみられ、厚さは1cmを測る。表面は赤茶褐色を示し平かつで、内面は黒色ないしは茶褐色を示し、混入物が浮き出している。9と24は繊維を多く含んでいるもので、9は1.2cm×1.6cmの細長い菱形状の形態を示しているが、大きさ、形ちはまちまちである。内外面とも黒褐色を示し石英やチャート粒の混入したややがさついた資料である。24もほぼ同様であるが1.2cm×1.7cmの菱形を程し、楕円文は整っている。繊維が多量に混入し、また石英粒やチャート粒も含まれた黒褐色を示すものである。

第3類土器：本類は、沈線文、貝殻沈線文、刺突文のある土器である(11、15、16、25~33)。これらは、文様の種類により3種に細分できる。

A種は、沈線のみのも(15、16、26~28、32)で、26、27は口縁部資料である。また28は、口縁部直下のものとみることが出来る。いずれも口縁部に併行する2~3本の平行沈線をめぐらし、さらに斜状の沈線(26、27)を描いている。他の本種も同様平行沈線と斜状沈線がみられる。石英粒が極めて多く混入し、焼成は良好である。器厚は0.6~0.7cmを測る。

B種は、沈線文と貝殻沈線文の組み合わせの土器(29、31)で、29は、横走する沈線に対して斜位に貝殻沈線文を行ない、31は口唇に貝殻による施文を行ない、口縁には二条の平行沈線、さらに円形の沈線を描き、この空間部を縦位の貝殻文により埋めている。胎土にはいずれも石英粒が多量に混入している。厚さは0.6~0.7cmで茶褐色ないしは黒褐色を示し焼成良好である。

C種は、沈線文と刺突文の組み合わせの資料(11、14、25、33)で、11と14、33は、平行沈線の間を半截竹管様の工具でやや斜めに刺突してある。また25は口縁部の資料で、口唇はやや肥厚し外反するが無文で、口縁部に半截竹管様の工具で刺突(押し引き)が成され、その直下には横位に数条の平行沈線が描かれている。刺突具と沈線を描く工具は同様のものと思われる。胎土には石英粒が多量に混入し、茶褐色または黒褐色を示す焼成良好な資料である。器厚は0.8~1cmを測る。

第4類土器：撚糸文土器を本類とした(10、13、35~38)。

35は口縁部の資料で口唇はうすく、直下に至ってやや肥厚しており口縁部はやや内弯している。口縁から斜位に施文されている。器厚は8mmで胎土には僅かな砂粒と繊維が混入している。36は、底部直上の資料で、やはり斜位に撚糸文が施文されている。表面赤褐色、内面黒褐色で胎土に砂粒と僅かな繊維が混入している。10は口縁部直下の資料で斜位の施文が成され、器厚5mmで赤褐色

を示し焼成良好である。37は、底部直上の資料で、幾方向からも施文が行なわれている。器厚は5mmを測る。38は、2本の撚糸原体を一度に施文した資料である。器厚は4mmを測る。

第5類土器：無文土器を本類とした(34)。本資料は、補修孔があり、両側から開けられている。胎土には、石英や砂粒が混入しており薄茶褐色をしている。やはり押型文系土器群に伴なう資料と思われる。

第II群土器 (第16図39~44、43、44、47~50)

本群は、花積下層式にあたるもので、半截竹管文、沈線文、押圧した縄文、刺突文が成されているものである。(註9)

第1類土器：竹管文や刺突文ないしは押圧した縄文により文様を構成している一群である(39~41、43、44)。39、41、43は、口縁部に横走る隆帯を貼付し、その上に半截竹管文(39、43)や刻目(41)を行なったものである。他の資料の押し引き文は、器面に直接直線ないしは円形の文様を描いている。39、43は左から右方向へ、他は右から左方向に施文されている。39~41は、直線ないしはうず巻形状に、縄文の押圧が成されている。刺突文は39~41、44にみられ、直径0.7~1.1cmの中空の工具により描かれている。その他の空間にはいづれも沈線が施文されているが、41だけは工具が異なり、先端の尖ったものを使用している。器厚は0.8~1.2cmと厚く繊維の混入がみられる。

第2類土器：縄文をもつ一群を本類とした(47~50)。47は原体をそのまま回転して施文したもので一見撚糸文のように見える。48は、結束の羽状縄文のようにみえるが、単一原体を交互に方向を変えて施文したものである。結束にみえる部分は原体の末端を折り曲げて作ってある部分である。その他は原体の短い羽状縄文である。器厚は1~1.3cmで、いづれも胎土に砂粒や繊維が混入している。

第III群土器 (第16図51~68、第17図69~73)

本群は、関山式土器に比定されるものである。縄文式土器の破片中では最も出土量が多いものである。文様の種別からみると二種に分けられ、ひとつは、隆帯上に刻目を入れたもので、沈線文、刺突文、貼付文、縄文の押圧文が組み合わされたもの、もうひとつは、縄文のみ施文されたものであるが、関山式土器の多くは、胴部上半に前者の文様、胴部下半に後者の文様が同一個体に施文されている場合が多いため、文様の形態は異なっても類別することは本資料では不可能である。

70は、関山貝塚(註10)では、第7群第7類Aで分類されているもので、「R { R }^{III}」で単節の異種の縄を3段目に撚る時どちらか一方が撚りもどるもの」である。口縁部から底部に至るまで施文されているのが普通である。胎土には僅かな繊維が混入し焼成良好である。69はその亜種としてみることができる。71は、関山式第1群土器に分類されているもので、波状口縁をもち、隆帯に刻目を入れ、ボタン状の貼付文及び刺突文が施文されている。関山式には刺突文のある土器は少ない。胎土には繊維が入らず、内外面ともかなりなめらかに整形がされている。72は、関山式第3群土器に分類されているもので、平縁を示し、口縁部直下にボタン状貼付文と刺突文、それ

に貼付文の左右には縄文の圧痕がみられる。胎土には繊維が僅かに混入している。73は、関山式の第1群第11類に分類されているもので、波状口縁を成し、波状部の口縁直下には、「縦長の振り子」状貼付文がある。その脇には刺突文が成されている。74は、関山式第4群第3類に比定するもので、口縁部直下のコンパス文の部分である。51～68は、縄文の様々な種類で、71～74のいずれかの文様の下部に付属する系統的なものである。

第Ⅳ群土器（第17図75～81、83、84）

本群は、縄文式中期中葉の藤内式土器に比定されるものである。本群の土器は、蓼科山北麓地域では数少ないものの1つである。多くは深鉢形土器の破片であるが81は、「椀形土器」(註11)として器形分類されているものである。いずれも器厚は1cm前後と厚く赤褐色を示しているものが多い。胎土には砂粒が混入しているが、かなり整えられているものである。

第Ⅴ群土器（第17図85～98）

本群は、縄文式後期に比定されるものである。

第1類土器：86～93は横走る沈線を器面全体に施文したものであるが、文様というより器面整形痕といった方が正しいのかも知れない。胎土と色調は、他の土器と全く異質で、微量の砂粒が混入されているがほぼ一定しており、白色に近い薄い黄色を示している。本資料は、当町の新水B遺跡(註12)に僅かにみられるが、当地域ではあまりみられない資料である。

第2類土器：本類は、縄文式中期最終末から後期初頭に位置づけられるものであり85の1片だけ出土している。むしろ後期の土器として捉えた方が正しいと思われる。半截竹管文の区画の中に後期的な細い縄文がみられる。厚さは1cm、胎土には砂粒が残るが良質のもので、やや白色に近い黄褐色をしている。

第3類土器（第17図94～98）：縄文式後期初頭の堀之内式土器に比定されるものである。94は表面が荒れていて焼成が悪い。粗成土器に近い資料とみられる。95～98は、内外面共に黒色の研磨が成され光沢があり、焼成良好の土器である。95、96は口縁部の資料で細い隆帯の上から刻目が入れられている。

これらは関東系土器群の中で理解されるべきものである。

(福島)

第2節 弥生式時代の土器

本遺跡から出土した弥生式土器(第26図123)は、小片が1片だけである。やや外反しており、頸部から口縁部に向う部分と考えられる。比較的細い櫛描波状文が施文されている。器厚5mmで黄褐色を示す焼成やや良好の資料である。

蓼科山麓及び千曲川上流地域の弥生式土器の出土状況は、佐久市を中心とした沖積平野に圧倒的に多く、特に後期の箱清水式(岩村田式)(註13)土器が中心を成している。(福島)

第6章 金塚遺跡出土の石器

第1節 縄文式時代の石器

本遺跡出土の石器は、遺構から出土した資料を除けば、時期決定が難かしいものばかりである。しかし、出土土器からみれば前期、中期、後期の資料も出土しているので、石器においてもその期の存在性も十分に考慮しなければならないと思われる。石器の中では、黒耀石製品は、第3号、4号、5号住居址に伴なうものと、その周辺部からほとんどが出土しているので、早期に比定されるものと考えてもよさそうである。又多面体磨石などは、その特殊性から早期の遺物として理解して間違いないものである。なお、打製石斧、凹石などは、各時期に出土するので遺構外の資料は時期設定が難かしい。

石鏃 (第18図1～37、第19図42、43、47)

42、43は第3号住居址、47は第4号住居址出土の石鏃であり、遺構から出土したものは3点にすぎない。その他はグリッドから出土しており37点を数え、合計40点が得られた。これらの資料を分類すると、①鍬型鏃、②三角鏃、③長身鏃、④長脚鏃、⑤その他になる。①の鍬型鏃は、早期特有の形態と考えられており、33～36、42がそれにあたる。33、35、36は三角鏃に近似する形態であるが、脚部作出が明瞭である。②の三角鏃は、脚部の作出がないものを分類した。3、5、8、9、14がそれで、正三角形に近いものと二等辺三角形に近いものの二種にさら分類できる。③の長身鏃は、脚に比べて身の部分が長いものを分類した。数量では圧倒的に多く24点を数える。これらの中には、両側部分が内弯するものとゆるやかにカーブをえがき外側に弯曲するもの、あるいは対象にならないものに種別が可能である。④の長脚鏃は、身の部分に対して脚部が同径ないしは長いものを分類した。24、26、27、29がそれで、やはり全体に内弯するものと外弯するものがある。本種は突出部が大きいため破損品が目立つ。⑤のその他の類には、32や37が含まれる。32は長身鏃といえるものであるが、両側辺には左右対象に凹部と突出部のくり返しが認められ、やや異種の感を受ける。37は、いわば小型の尖頭様石器ともいふべき形態をしているが、基部直上には、柄付の縛り部ともいふべき加工が成されている。

時期的には、鍬型鏃は早期(本遺跡では恐らくは押型文系土器に伴う)のものと理解することができる。他の資料は明確さは欠くが出土地点からみると早期に伴なうものかも知れない。

尖頭器 (第18図41)

尖頭器は1点だけ出土した。石質は良質の黒耀石で、長さ7.2cm、長幅1.3、短幅1cm、厚さ7

mmを測る。本資料は、第5号住居址の覆土から出土している。部分的にみだれる所もあるが、全体にサイドからセンターに向ってリタッチが行なわれている。ほぼ左右対象で、機能点は、尖端部と両側辺部である。

これと類似する資料は、長野県上高井郡石小屋洞穴（註14）で発見されており、時期的には石小屋洞穴資料の方が古く編年されるものであるが、テクニックから見ると、むしろ古い形態を伝えており、真正なものである。

石錐（第18図38～40）

本資料は3点だけであり2種に分類することができる。ひとつには、38のように中央部に一次の剝離を残すがほぼ全面加工の資料で、紡錘形に近い形態を成している。先端部はやや丸味を帯びているが、使用痕は認められない。39、40は、頂部にツマミのある資料で、39はツマミの欠損、40は刃部の欠損した資料である。

両極石器（第19図48～53、第20図60～61、64～67）

「両極石器」という用語は、森嶋 稔が提唱し、ここで初めて用いるものである。詳細は別章で記述することにするが、両極石器は、藤森栄一が諏訪湖底曾根遺跡の報告で用いた「曾根型石核」（註15）、森嶋 稔が用いた「曾根型彫刻器」（註16）、岡村道雄が用いた「ピース・エスキーユ」（註17）を包括するものである。

本遺跡で出土した資料は12点を数え3類の形態分類をすることができる。①平面が方形もしくは長方形で、両側面が平坦なもの（48、49）、②全体の形状が紡錘形で、石核状の縦長の多面体剝離面が残るもの（51、60、61）、③平面形態は不規則であるが、片面ないしは両面に原石表皮を残すもの（50、52、64～67）に分類できるが、60のように原石表皮面を有していても、それを機能として残しているものは③には含めてない。

①は、岡村のいうピース・エスキーユ、すなわち「くさび型石器」と呼ばれているものである。しかし、その用途については不明な所が多く、今のところ両極石器の一分類として扱うことがよいと思われる。長径は2～2.5cm、幅は1.4～1.7cmである。②は、藤森の提唱した曾根型石核と呼ばれるものである。石核となりうる条件は整ってはいるが、両端もしくは片面を工具として機能することが解って来た現在にあっては、この用語も学史的な存在である。長径は2.4～3cm、幅は1.2～1.6cmである。③は、一見スクレーパーないしは加工痕ある石器の取扱いをされそうな資料であるが両極端部の加工により片端もしくは両端部に機能点を作出している。かなり原石に近いものも見ることができる。長径3～3.5cm、幅1.1～2.5cmを測り、他の種類に比べればやや大型である。

スクレイパー（第19図44～46、54～57、第20図62、63、68～77）

スクレイパーは、サイドスクレイパーとエンドスクレイパーに分類でき、後者は、68と74で他

は前者に含まれる。但し、46、55、56は、側辺を機能の主体とするが先端の機能も考えられる。また、46、55、62、63、69、74は、両極石器に近似するものとみることができる。石材は全て黒耀石であり、第1次剥離の剥片を利用しているものが圧倒的に多いが、中には片面に原石表皮をそのまま残している資料も多い。これらの資料は、早期の3軒の住居址周辺部から多数出土している。

打製石斧（第22図、第23図92～94）

出土した打製石斧は、遺構に伴うものは1点もなく、全てがグリッドから出土したものである。これらの中で、ほぼ完形品は、85と93であり、他は多かれ少なかれ欠損している。先端刃部は、84、86、92、94の4点、基部は87、88、89、90、91の5点である。平面形態は、多少の変化はあるが全てが短冊型に分類できる。先端刃部の平面形態は、長軸に対して片寄りのみられるもの86、92、93、94が圧倒的に多く、左右対称になるのは84、85の2点だけである。基部の側面が変化なくほぼ直線的に先端刃部に至るものと、柄付け部分を加工しているものがある。使用痕は比較的良く残り、特に85は磨滅部分が多くみられる、石質は、硬砂岩と安山岩の二種類である。特に本遺跡の場合、大形打製石斧と小型打製石斧の差が明瞭である。

凹石（第23図96～99、第24図100～103、106～109）

出土した凹石は、単独で使用しているものと、多面体磨石と兼用しているものがある。96～103は、単独で使用しているもので、両側に凹部のあるものが最も多く、片面だけのものは98と99の2点だけである。凹部は、比較的面積が大きくしかも深い。また2個の凹部のあるものも大分ある。全体の形状は、中期で出土するような扁平楕円の整ったものはなく、それぞれ異った形態を示している。石質は全てが気包の多い安山岩製である。また多面体磨石との両機能が考えられる106～109の資料は、片面にだけ凹部が残りしかも平面及び深さが小さい。106と107は一端に敲打痕があり、敲石としての機能も考えられる。

多面体磨石（第24図106～109、第25図）

多面体磨石という用語は、福島邦男が提唱し本書で初めて使用するものである。従来使用している穀すり石あるいは、特殊磨石という用語は、笹沢(註18)が指適する通り、極めて莫然としたものであり、あいまいである。したがって多面体磨石という用語で呼ぶことにする。

図示した資料は18点であるが、その他にも欠損が著しいものや形態が崩れてしまっているものがあり、これらを含めると極めて多量の出土量である。基本的な形態は、全体が縦長の楕円形をしており、断面は大小3面づつの六角形になる。この基本形態をAとすれば、112、114～117、120があてはまる。完形品は少ないが、三面が大きく磨滅し、それによって残る三ヶ所の稜の部分に再び磨痕が残っているものである。その他の資料Bは、磨面が4～8面を有しており、断面が三

角形に近いものないしは六角形になるものからはややはずれるものである。多くは断面が扁平の楕円形になっている。石質は、砂岩、安山岩、花崗岩が最も多く、河原石というよりは山石に近いものである。

磨石（第24図104、105）

磨石は、多面体磨石とはやや形態が異なり、多くの面によって構成されるものではなく、表裏2面とその空間部に対して一様に磨痕が認められるものである。本遺跡の磨石は、後の磨耗が激しく、自然石と見分けのつかないものが幾つもある。したがって、使用痕の明瞭な資料のみをここにとりあげた。石質は安山岩が最も多く、次いで砂岩製のものが続いている。

横刃型石器（第21図78、81）

横刃型石器として明瞭に確認できうるものは2点だけである。78は、硬砂岩製の資料で二次的な縦長の剥片の一方を刃部に加工している。この資料は、新水B遺跡出土の早期のものと全く同一のものである。81は、比較的軟弱な砂岩の薄い自然石の一側面を刃部に加工しており、また、背になる部分にも部分的に剥利面がみられる。

横刃型石器は、中期以降弥生式時代までに多数存在するが、生産様式から考察すれば、用途が異なっているものと考えられる。

その他の石器（第19図58、第21図83）

58に示す石器はチャート製で、中央部近辺から欠損しているものである。かなり丁寧に加工がされているが、部分的に原石表皮面を残している。尖頭器様石器の一部かとも考えられるが、いづれにしても用途を捉えることはできない。

83に示す石器は、緑泥片岩製で、断面の基本形は四角形である。全体に渡って研磨痕が明瞭に残り、それとは別に、何か鋭い刃物で擦り切られたような痕が深く残っている。時期及び用途不明の石器である。(福島)

第2節 弥生式時代の石器

弥生式時代の石器は、第26図124に示した磨製石鏃1点のみである。本資料は、調査区の東側中央部で出土しており、第5章第2節で記述した弥生式後期土器と同時期の資料と考えてもよさそうである。形態は、無茎扁平で基部近くに両側から穿孔されている。両面は全面にわたって研磨されており、研磨方向は基本的に左下↔右上の方向である。片面でみると一次～三次段階の研磨過程が位置をずらしてみられ、それぞれの段階の接点部には、微妙に陵が走っている。石質は、やや縁があった粘板岩で、先端部と基部の一部が欠損している。残存部で、長さ4.4cm、幅2.2cm、

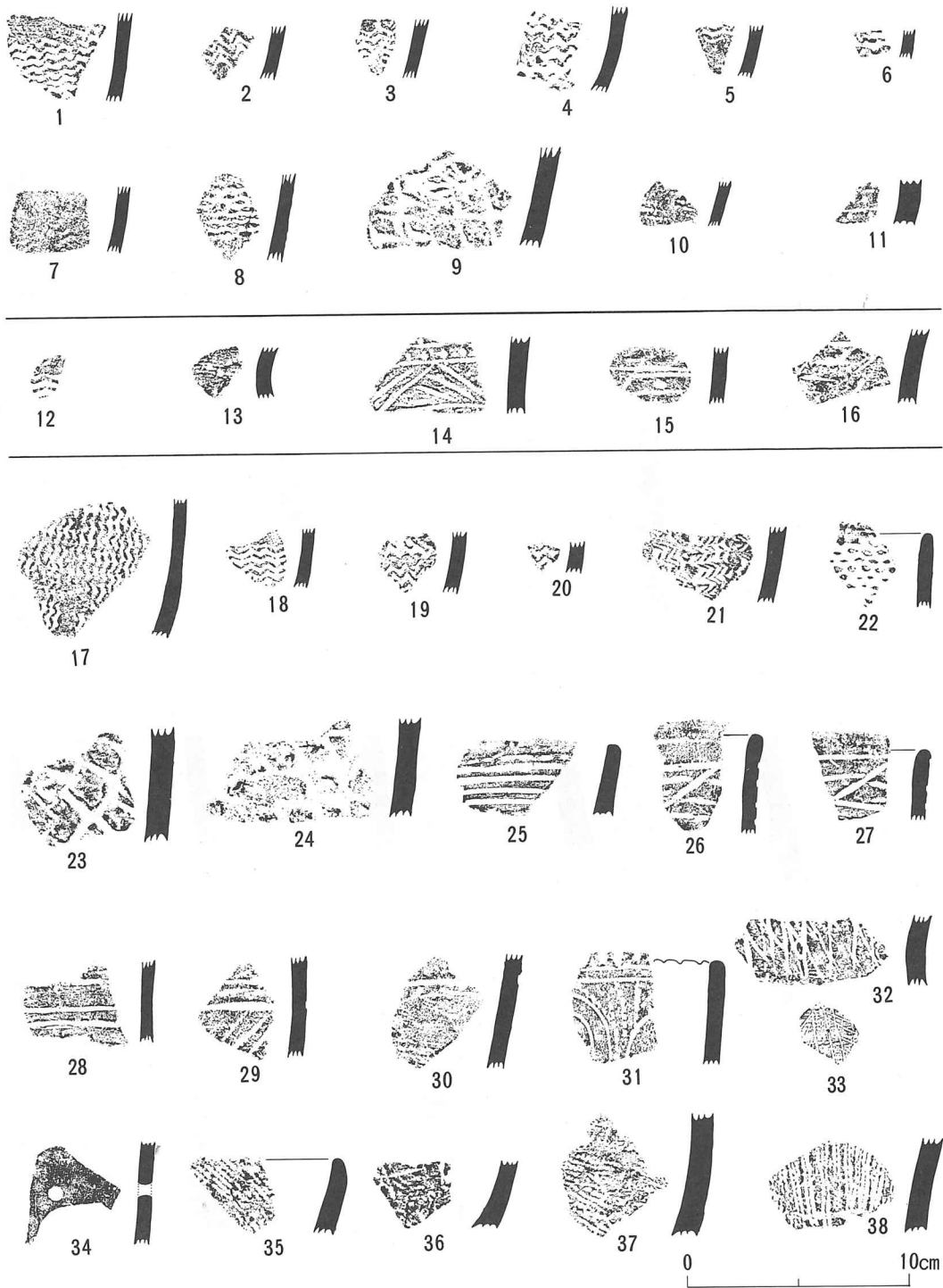
厚さ0.2～0.3cmを測る。これから推測すれば6cm前後と思われ、大形の種類に入るもの(註19)である。
(福島)

第3節 その他の遺物

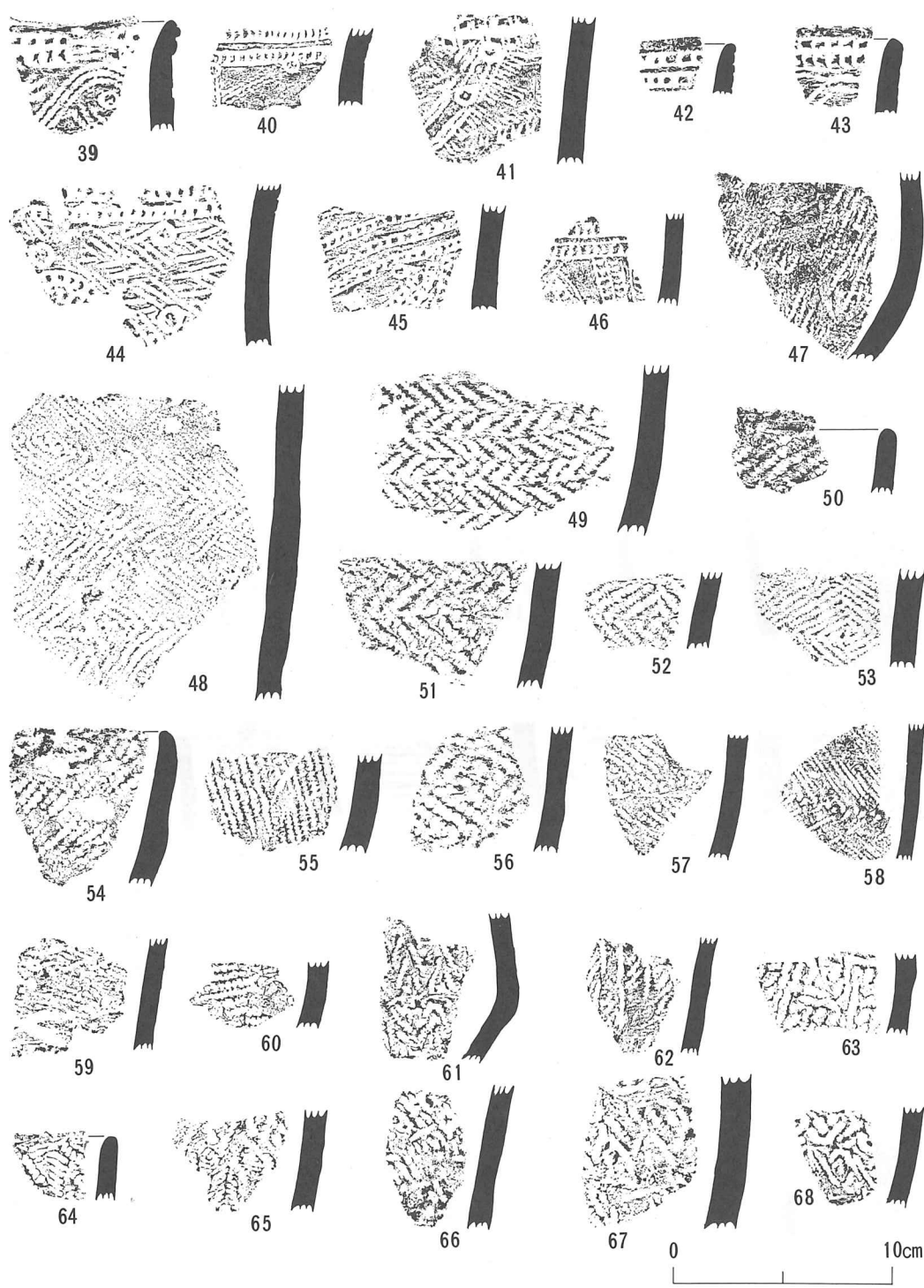
第26図125に示したのは、古墳時代の装飾金具とみられる資料である。恐らくは、馬具に伴なうものと思われ、剥げ落ちている。材質は銅製で、部分的に金装が残っている。元来は全面に金が施されていたと思われる。本遺跡の東側は金塚古墳群が存在しており、古墳の副葬品との関連を思わせるものである。

同図127と128は、平安時代の砥石である。128の1部は欠損しているが、いずれも平面な長方形で、127の断面は方形、128は扁平な長方形である。127は、全面が使用されており、二面に、櫛のような鋭い利器で付けられた二次的な痕跡が残っている。128は、前者に比べてかなり使用されており、光拓がある。

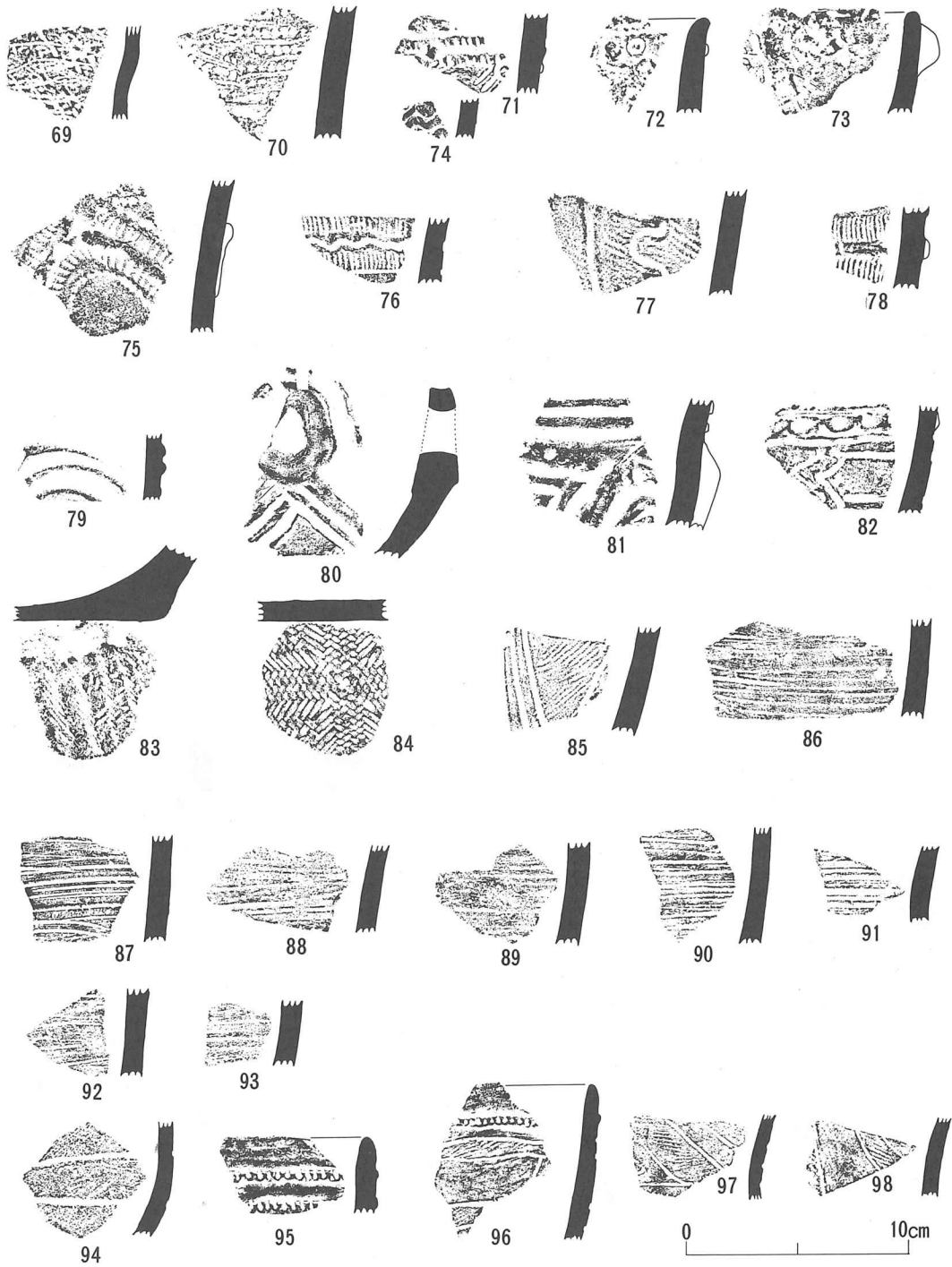
平安時代の砥石は、望月町犬飼遺跡(註20)でかなりの量が出土しており、これらと全く同種の資料である。
(福島)



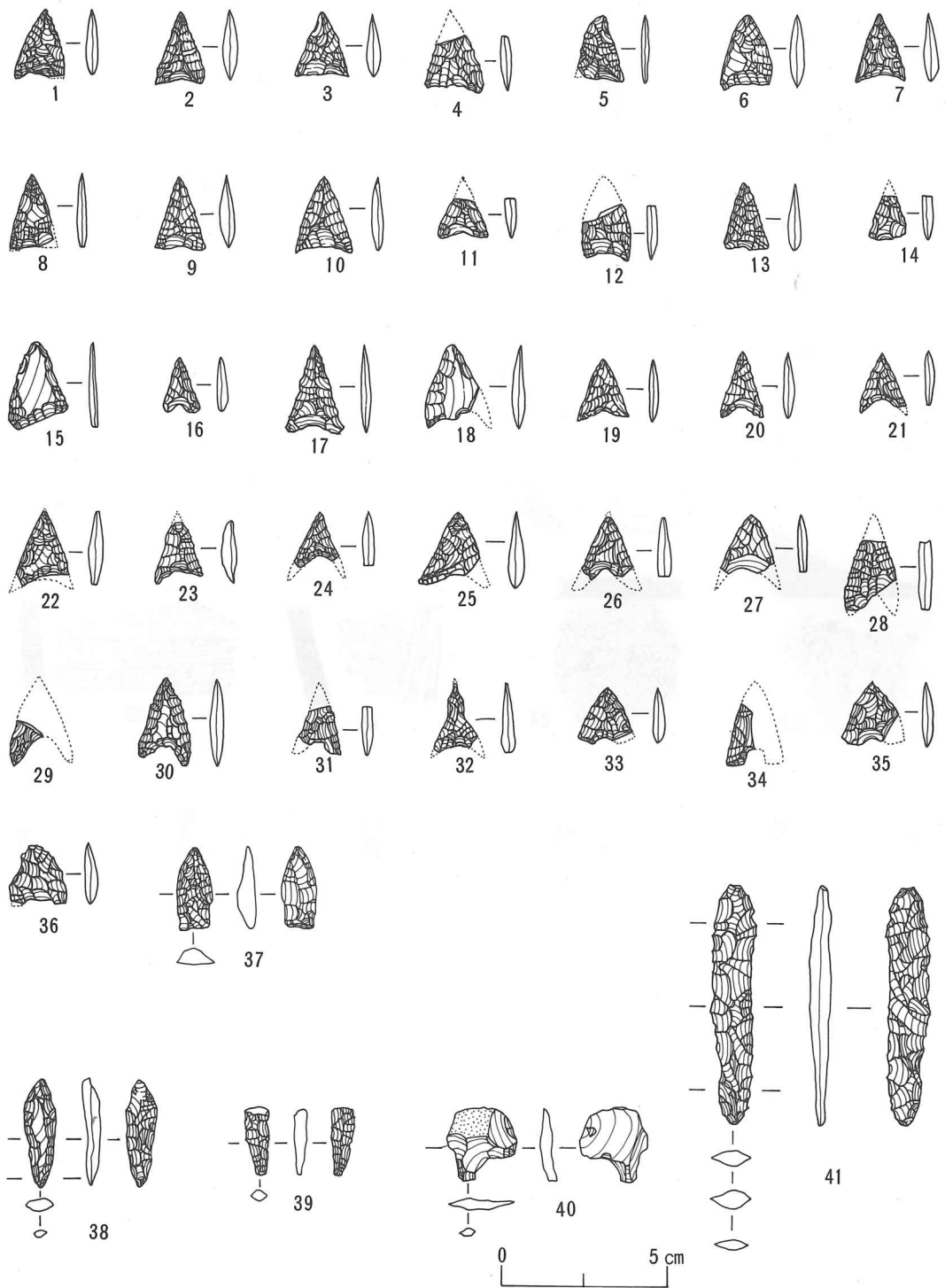
第15図 金塚遺跡出土土器（1～11・第4号住居址出土、12～16・第5号住居址出土
17～38・グリッド出土）（1：3）



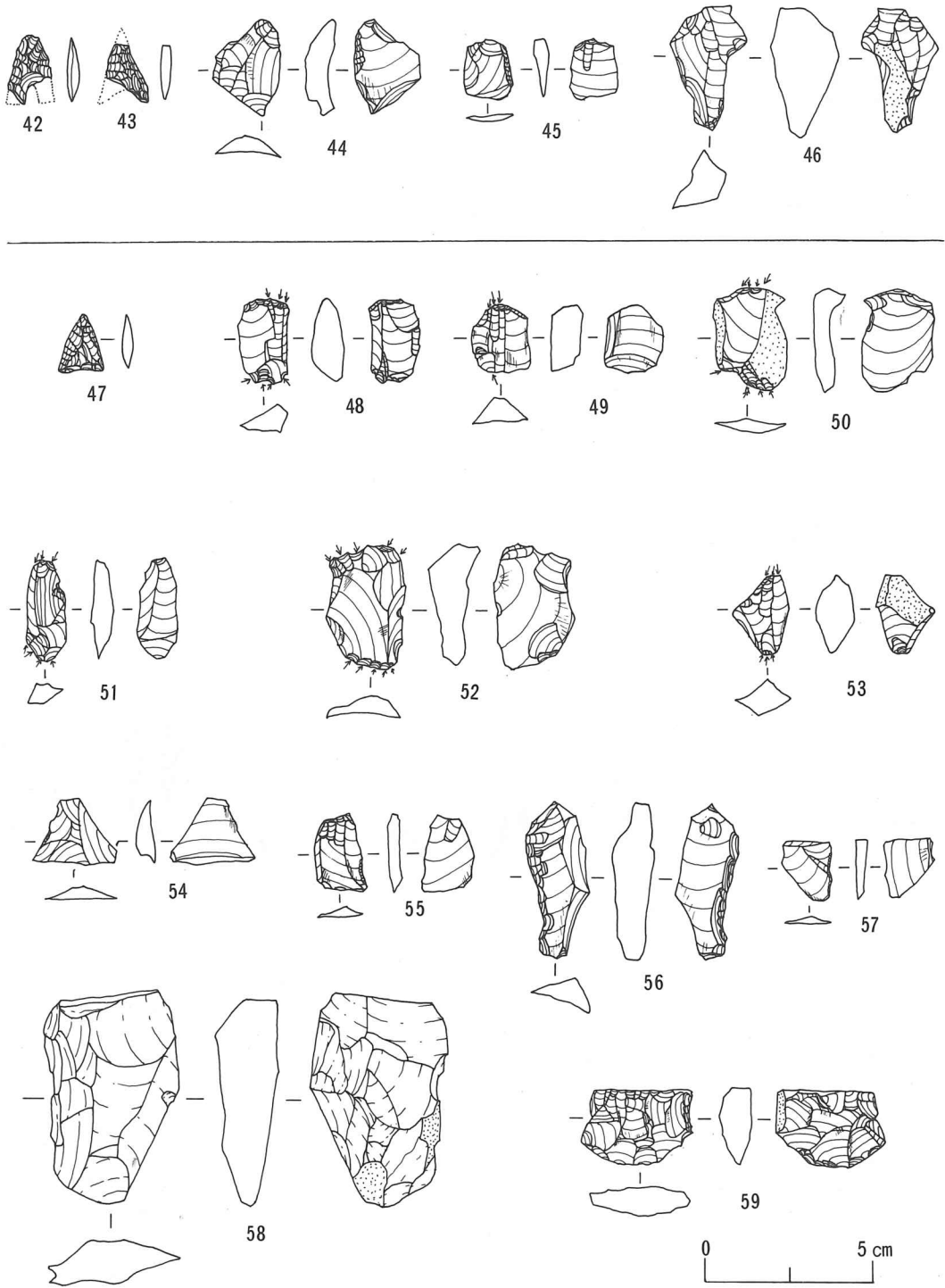
第16图 金塚遺跡出土土器 (1 : 3)



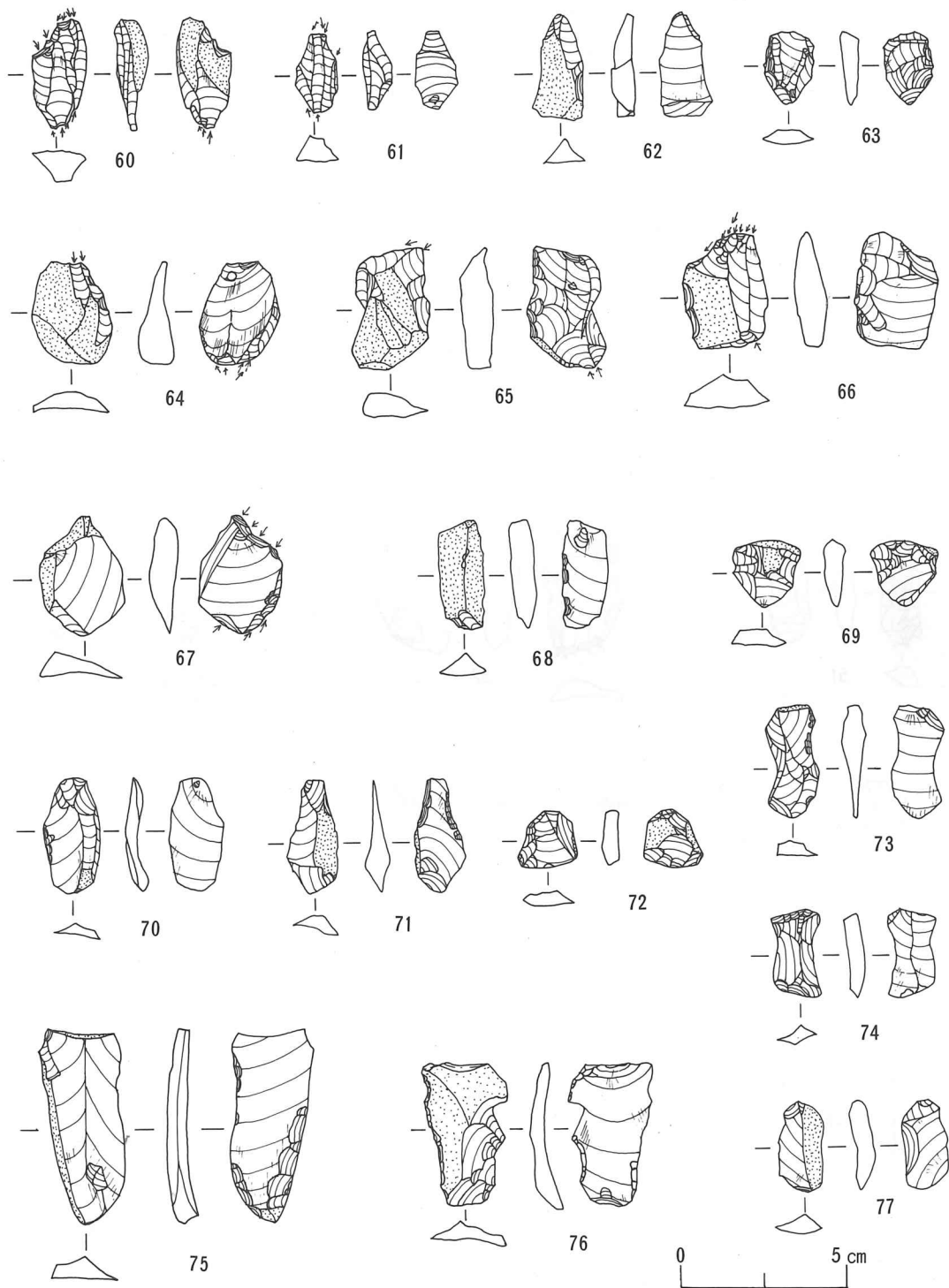
第17图 金塚遺跡出土土器 (1 : 3)



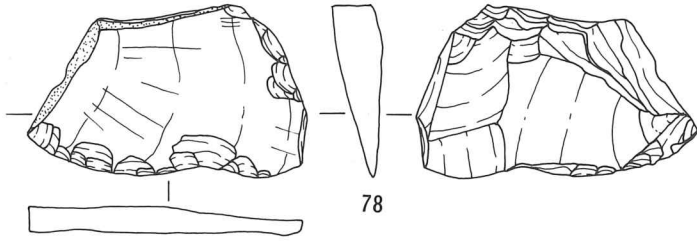
第18図 金塚遺跡出土石器（41・第5号住居址出土、1～40・グリッド出土）（1：2）



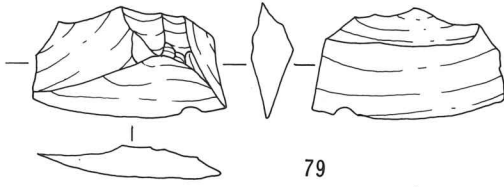
第19图 金塚遺跡出土石器（42~46・第3号住居址出土、47~59・第4号住居址出土）（1：2）



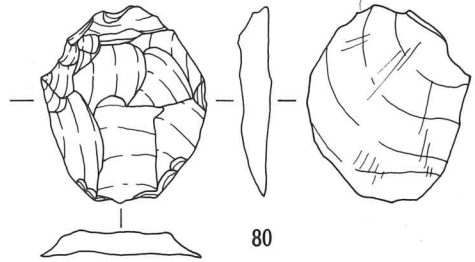
第20图 金塚遺跡出土石器 (1:2)



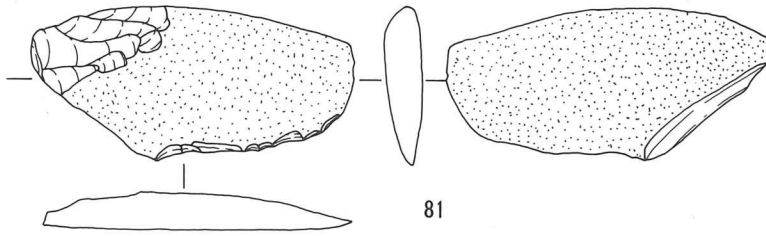
78



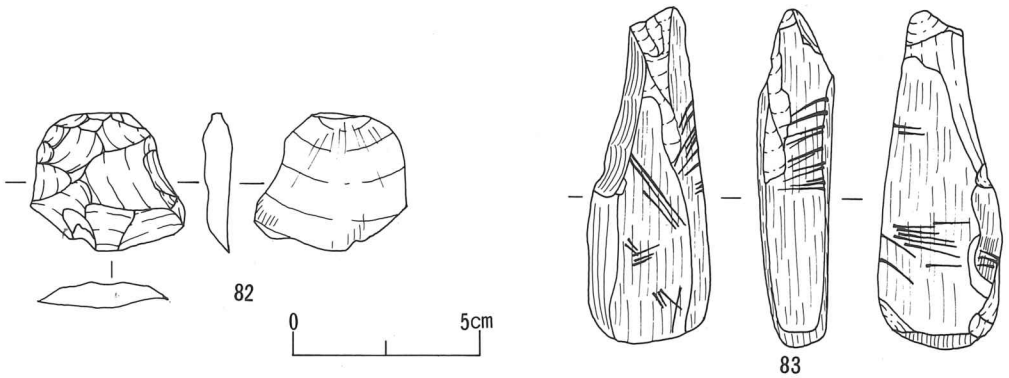
79



80

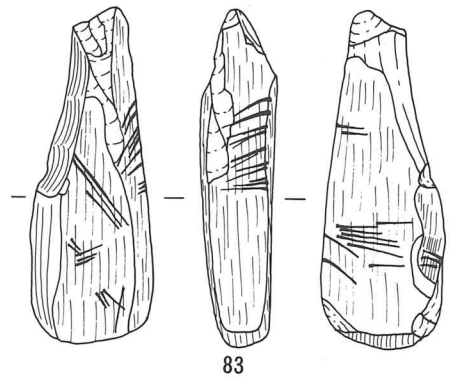


81



82

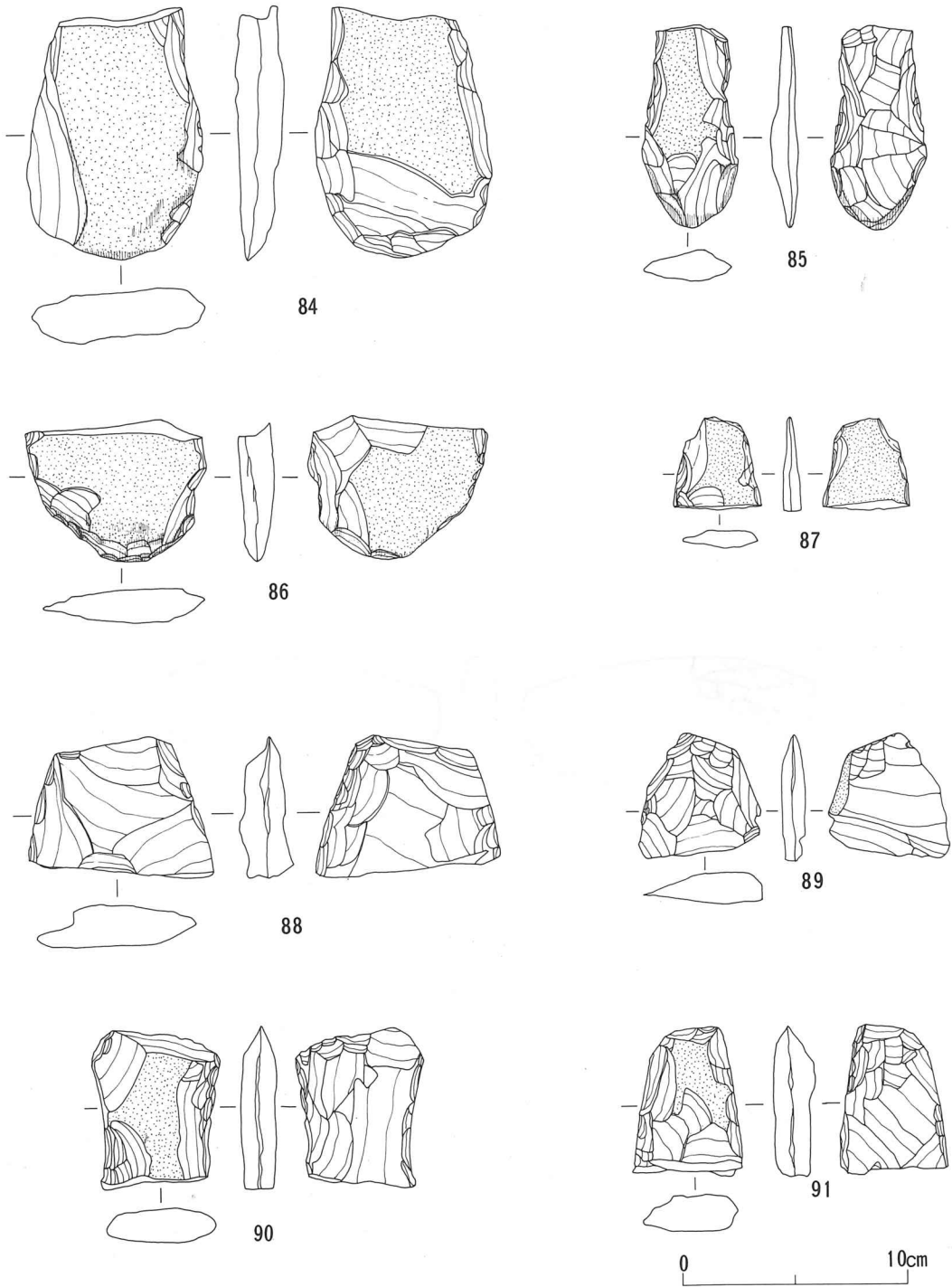
0 5cm



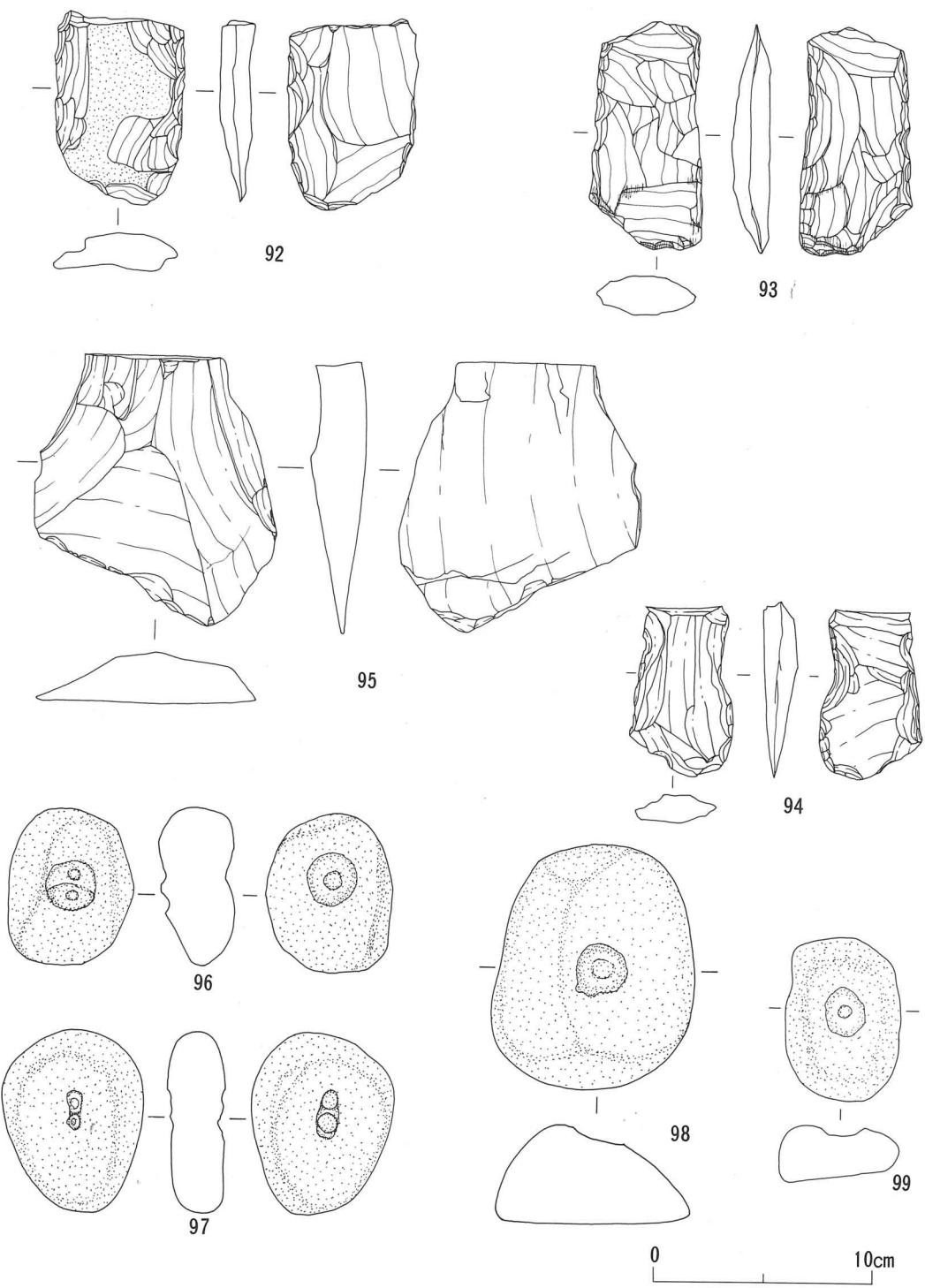
83

第21图 金塚遺跡出土石器 (1:2)

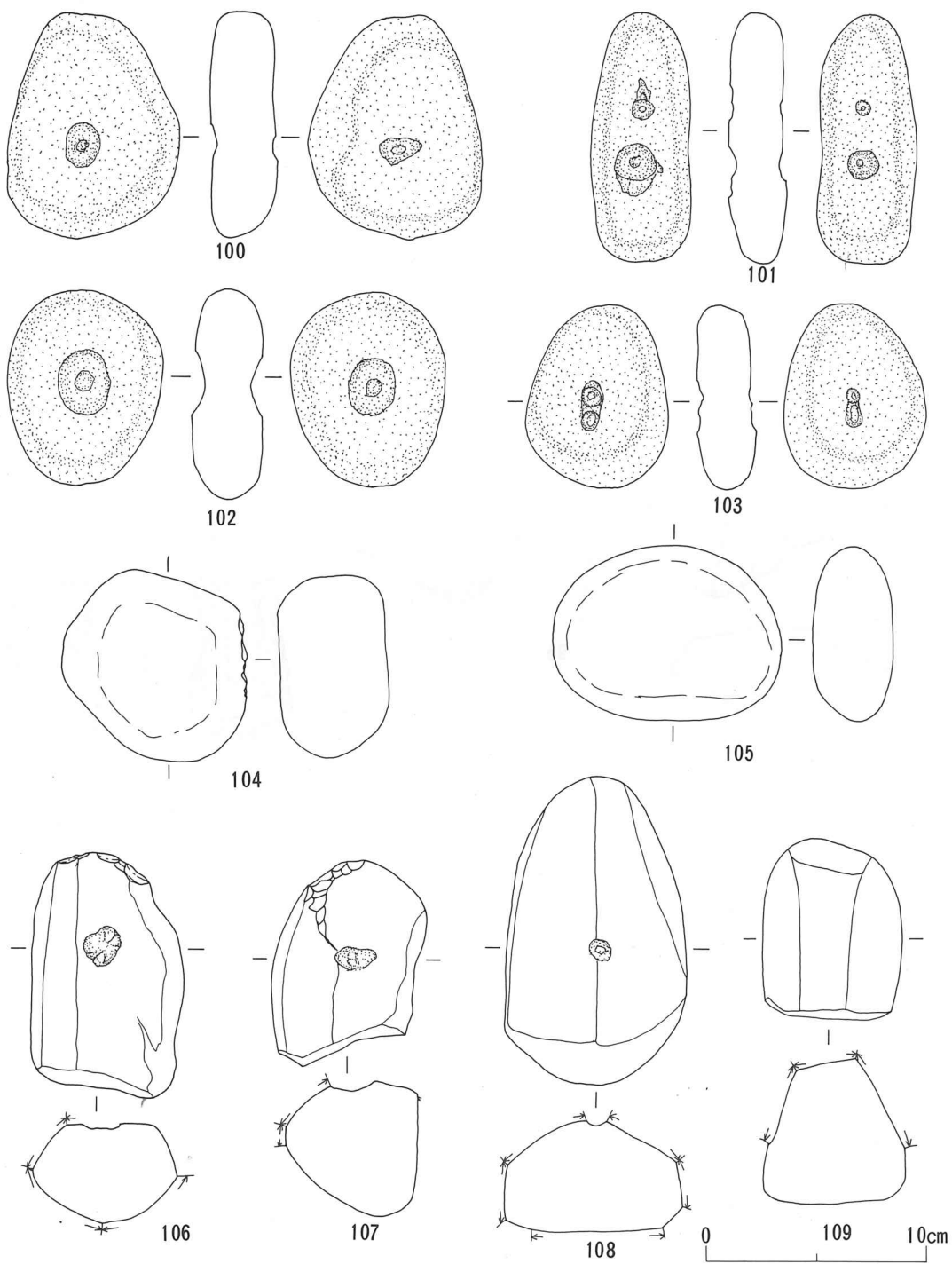
五折



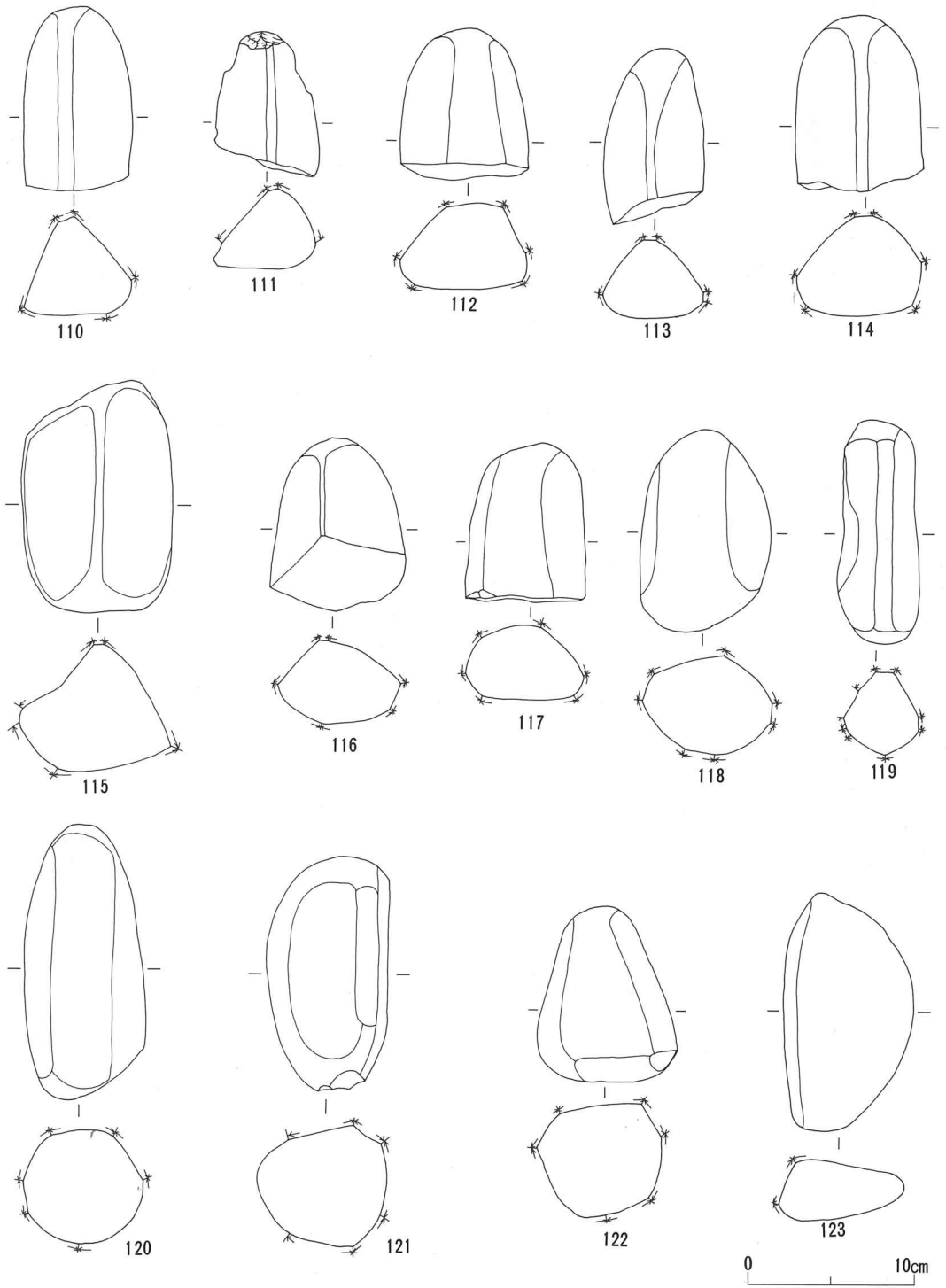
第22図 金塚遺跡出土石器 (1 : 3)



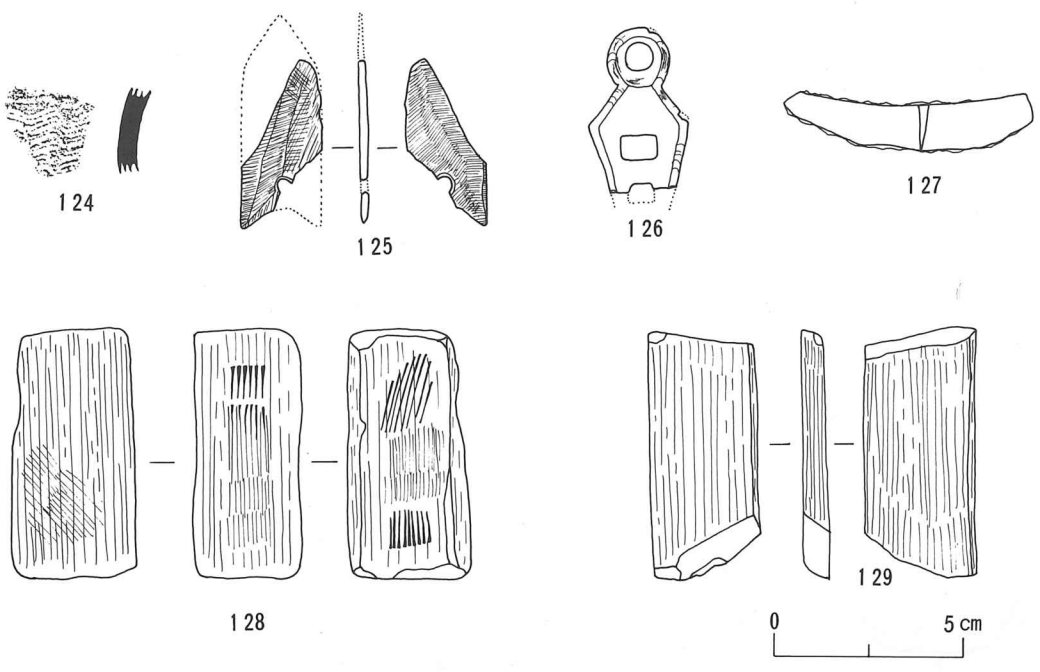
第23図 金塚遺跡出土石器 (1 : 3)



第24图 金塚遺跡出土石器 (1:3)



第25図 金塚遺跡出土石器 (1 : 4)



第26図 金塚遺跡出土遺物 (1 : 2)

第7章 考察

第1節 縄文式時代早期の住居址

縄文式時代早期の住居址は、その多くは岩陰や洞窟にみられるが、なぜか多くの論文ではオープンサイトに遺構が検出されなければ住居址ではないような扱いをしているのが不思議である。確かに岩陰や洞窟の中には、一時的な狩猟のための拠点として把握できうるものがあり、したがって定住生活のための住居址としては考えられないものがあるが、多くは、生活用具のセットともいべき土器や石器の出土がみられ、また、幾つもの炉址やファイヤーピットが確認されている。さらに埋葬をしたと考えられる人骨や栃原岩陰遺跡のように生活中落石により圧死した人骨が確認されている（註21）など一時的なものではなく、日常生活を伝える資料が多くみられる。季節における居住地の移動は考えられるが、生活が満されている限りにおいて一定地域内における生活のサイクルとして理解することができる。

これら岩陰や洞窟遺跡は、旧石器時代からそれ以降各期の遺物を出土するが、遺物の在り方や生産様態からすれば、縄文式早期末葉、とりわけ中部高地においては押型文土器の時期までを日常生活の場として選定していたことがうかがい知れる。しかし、これ以前にオープンサイトに住居がなかったというわけではなく、検出例は僅かではあるが周知のとおりである。

近年、押型文土器を主体的に出土する住居址（遺構）の検出例が報告されるようになって来た。本金塚遺跡の第3号、第4号、第5号住居址もその一例である。第3号、第4号住居址は、複合関係を成し、さらにそれぞれ土壇との切り合いにより明確さは欠くが、第3号住居址は、東西3.85m、南北4.15m、壁高14～27cmを測る隅丸に近い方形を成し、第4号住居址は、南北5.1mを測り、測定できない東西を推定すれば、ほぼ隅丸方形のプランと考えられる。第5号住居址は、東西3.8m、南北4.3m、壁高8～15cmを測り、やはり隅丸方形のプランを呈している。これらの中では第5号住居址が最も良好に検出されており、住居址壁外に柱穴が7個、さらに東南部の内外にかけて厚い焼土の炉址が検出された。屋外炉としての様相が強い。

当町の新水B遺跡では、田戸系土器群を多量に出土する住居址3軒と数十基にも及ぶ土壇群検出の中にあって、遺物は少量ではあるが押型文土器を主体に出土する第5号住居址が検出された。

（註22）東西3.8m、南北3.2m、壁高30mを測り隅丸方形を呈している。柱穴は、床面に2個検出したが、金塚第5号住居址と同様多くは壁外を巡るよう存在している。炉址はやはり屋外炉である。

東北信地方においては、さらに昭和45年に更級郡大岡村鍋久保遺跡で押型文土器を伴う竪穴住居址1戸を検出している。（註23）長径4m、短径3m、壁高15cm～50cmを測り、楕円形を呈している。柱穴や炉址は発見されていないが、住居址の一部に敷石状の沢石の存在が報告されてい

る。昭和47年のいわば第二次調査では、住居址は検出されていないが、押型文土器及び田戸系土器群に伴う土壇群と礫10数個を集積する炉址が検出されている。(註24)

南信地方上伊那郡の萱野遺跡では、小竪穴2基と炉址が検出されているが、(註25) 定住生活のための遺構(住居址)とは捉えてはいない。

また、昭和55年に調査された樋沢遺跡では、柱穴を有する住居址を検出したと伝えられている。正式な報告を待ちたいところである。

これら以外に、小竪穴や炉址が報告されている例が幾つかあるが、住居址として捉えている遺構は少ないようである。さらに、すり鉢状の落ち込みから押型文土器群を出土したり、炉址的遺構を検出している例がある。更埴市池尻遺跡では、トレンチ調査によりすり鉢状の落ち込みを確認し、楕円押型文土器を得ている。(註26) トレンチ調査という制約はあるにせよ学史的に貴重な発見例である。また、塩尻市高出遺跡では、すり鉢状の落ち込みの底部に、焼土を含有する石囲いの炉と理解される遺構が発見されている。(註27)

県内を中心におもだったものを記述したが、望月町新水B遺跡と金塚遺跡、大岡村鍋久保遺跡の検出例は、プランが明瞭に把握できた住居址として貴重であり、標識となりうるものである。これらの共通点は、プランの形態が隅丸の方形ないしはそれに近い楕円形をなし、一辺が4m前後であること、また、柱穴は住居址壁外を巡るように位置すること、炉址は屋外炉であることなどである。立地条件は、標高800m~1000mで、湿地ないしは河川を臨む尾根状の台地緩斜面である。斜面といってもややテラス状を成す部分に位置している。

縄文式早期の遺構(住居址・炉址)は、移動生活における一時的な拠点として考えられている場合が多く、またその先入観念があまりにも強すぎるが、少なくともこの3遺跡の例からすれば、長期にわたる定住生活を考えてもよさそうである。さらにらに金塚遺跡では3軒の住居址が一定エリアの中に集中しており、血縁的な小規模集落として理解してもよいのではないだろうか。新水B遺跡においても、押型文土器を主体とする住居址は1軒だけであったが、押型文土器を伴出し、田戸系土器群を主体とする住居址が3軒も集中して存在していることを考えれば、文化的様相を異にするにせよ一定程度の集落を営む定住生活が、この時期にすでにあったと考えてもよさそうである。金塚遺跡と新水B遺跡は、いずれも蓼科山北麓に延びる裾野に位置し、蓼科山を源とする細小路川水系及び細小路川と合流する鹿曲川水系という同一水系にあり、環境的にも両遺跡の関連性を示しているといえる。今後の資料増加に期待する中で、さらに明確化されるものと思われる。

本地域は、第2節で記述するが、押型文系土器群は中部高地型式と西日本型式の二系統があり、また東北日本に中心を置く土器群や関東に中心を置く土器群が同一の遺構内に混在するという状況がみられ、必ずしも一系統的な文化段階として把握することはできないのではないかと考えられ、難しい側面を表出しているものである。より詳細な分析の中で、早期住居址(遺構)を位置づけていきたいと考える。(福島)

第2節 縄文式時代早期の遺物

早期土器群の研究は、とりわけ押型文土器の研究史の立場から神村 透が優れた論文を発表している。(註28) それは、昭和43年までの内容であり、それ以降については「稿を改めて考える。」としているので大いに期待したいところである。この一連の論文から言えることは、一部の遺跡を除いてあまりにも不明確な出土状況や僅少の資料の中で編年が組み立てられてきたということである。また、現在一般的に使われている編年は、さも確立されたごとく問題も感ぜずに当てはめてしまっているが、実は根本的に大きな問題をはらんでおり、研究の初元的段階で紆余曲折していることである。神村論文は、「立野式土器の編年的位置について」ということであり、基本的には樋沢式と細久保式に対する立野式土器の位置づけが問題として表出しているものといえる。今後、一定程度核心にふれていくためには、良好な文化層を有する遺跡の調査を実施する以外には考えられないところまで来ているような感を受ける。それだけにこの論文は現段階までを極めたものであり重々しさを感じざるを得ない。

金塚遺跡出土の早期土器は、編年にせまる資料とはなり得ないが、一つの生活を単位にした土器群の様相と、3軒の早期住居址の文化的傾向を把握するには貴重な資料である。第3号住居址からは、山形押型文土器、田戸系土器、撚糸文土器と時期不詳の土器が僅かに出土しているが、とにかく微細片であるため図示できなかつたのは残念である。第4号住居址からは、山形押型文土器、楕円押型文土器、田戸下層式土器、撚糸文土器が出土している。この2軒の住居址は、それぞれが土塚との複合関係をもっておりやや明確さは欠くが、出土状況からしてまず間違いなく住居址に伴うものと考えてよい。第5号住居址からは、山形押型文土器、田戸下層式土器、撚糸文土器が伴出している。本址は切り合いもなく、他の遺物との混在もないのでプライマリーに把握できた貴重な資料である。全体に数量は僅かであるが、各遺物の組成率は、第4号住居址の山形押型文土器7片の64%、楕円押型文土器は2片の18%、田戸下層式土器は1片の9.0%、撚糸文土器は1片の9.0%で圧倒的に山形押型文土器が多い。第5号住居址は、山形押型文土器が1片の20%、田戸下層式土器は3片の60%、撚糸文土器は1片の20%と田戸下層式土器が多い。参考までに、本遺跡全体における早期遺物の組成率は、山形押型文土器が13片で34.2%、楕円押型文土器は5片で13.2%、田戸下層式土器は13片で34.2%、撚糸文土器は6片で15.8%、無文土器は1片で2.6%となっている。

新水B遺跡第5号住居址は、楕円押型文土器と無文土器が出土し、量的には無文土器が上回っている。(註29) 鍋久保遺跡第1号住居址は、山形押型文土器4片の30.8%、楕円押型文土器は3片で23.1%、沈線文土器は3片で23.1%、斜縄文土器は2片で15.3%、無文土器は1片で7.7%である。(註30) また昭和47年の調査では、A土塚群地域の結果から山形押型文土器(第I群第1、4類)36片で16.2%、楕円押型文土器(第I群第2類)5片で2.3%、沈線文土器(第II群

第1～4類) 82片で36.9%、突刺文と爪形文をもつ土器(第3群第1、2類) 8片で3.6%、絡縄体圧痕文土器(第4群) 1片で0.5%、縄文をもつ一群(第5群第1～3類) 35片で15.8%、無文土器(第6群第1、2類) 55片で24.7%という組成率が得られている。(註31) 池尻遺跡では、限定された調査状況のため組成率は把握できないが、拓影図から推測するに、楕円押型文土器、沈線文土器、斜縄文及び縄文土器の順に出土量をとらえることができる。(註32) 信濃町塞ノ神遺跡では、楕円押型文土器138片の75%、山形押型文土器7片の3.8%、変形押型文土器7片の3.8%、斜縄文土器5片の2.7%、撚糸文土器3片の1.6%、沈縄文土器5片の2.7%、無文土器1片の0.5%、その他18片の9.9%で圧倒的に楕円押型文土器が多い。(註33) 和田村男女倉遺跡B地点では、山形押型文土器6片の46.2%撚糸文土器3片の23.0%、押圧縄文土器4片の30.8%、同C₂地点では、表裏縄文土器、山形押型文土器、楕円押型文土器、沈線文土器、絡縄体圧痕文土器などが出土し、また同F地点では、押型文期の住居址が不明確ながら検出され、そこから山形押型文土器107片の96.4%、楕円押型文土器3片の2.7%、撚糸文土器1片の0.9%が得られており、そのほとんどが山形押型文土器で占めているといつてよい。(註34) 洞穴及び岩陰においては、栃原岩陰遺跡が代表されるが、報文(註35)から第V区では楕円押型文土器が、また第I区～第IV区では山形押型文土器、楕円押型文土器、格子目文土器の順に多いようである。

以上、東北信地方で発掘調査を実施した遺跡の中で、押型文土器を出土した主要なものについて、特に遺構からの判出土器と遺跡全体からの出土状況の概略を記述してきた。これらからいえることは、地域的な差異や押型文土器の形式的、時間的な差異を明確にしていかなければならないが、押型文土器をとりまく土器群には沈線文系土器群(沈線文土器、貝殻沈線文土器)と撚糸文土器、縄文土器(斜縄文土器)の存在がかなり明確に把握できるものと思われる。この傾向は、神村論文でも学史の中で指適しているとおり、関東地方でも例がみられるようであるが中部高地においては普遍的な様相としてとらえることができる。笹沢論文(註36)では、押型文土器と田戸系土器との関係において、その編年的検討から①密接構成の押型文土器と田戸系土器が共存する。楕円文が最も多く、格子目、山形があるが、後者は少ない。異種文様構成の押型文もある。②ともに微量の繊維を混入するものがある。③田戸上層式併行と田戸下層式土器(田戸曾式土器とあるが構成ミスと思われる。)とに共存する押型文土器との間には大きなへだたりは認められない。ただ後者の押型文には繊維を含む率が多くなる傾向がみられそうである。と記している。田戸系土器群については、山内清男の「日本遠古之文化」(註37)や赤星直忠の「横須賀市田戸先史時代遺跡調査報告」(註38)吉田格の「千葉県城之台貝塚」(註39)などにみられるように、東北日本に分布の中心があるにもかかわらず、関東地方で編年や分析が行なわれているというやや変則的一面をもっている。中部高地における田戸系土器群は、「単純遺跡は皆無」(註40)であるといつてよく、押型文土器との伴出関係の中でとらえているにすぎない。しかし、昭和55年に調査した望月町新水B遺跡では、数千片に及ぶ資料が得られており中部高地の田戸系土器群の研究に大きく貢献するものと考えている。また、押型文土器に普遍的に伴なう時間的空間の様相も、かな

り核心にふれる資料となりうるのではないかと思われる。撚糸文系土器群については、南関東を核として拡散する傾向をもっているが、中部高地においては、やはりその実態ははまだ明らかではないと言わざるを得ない。

押型文土器にふれてみたい。押型文土器の編年については前掲の神村論文の中で学史の立場から立野式土器の位置づけを行ない、立野式→樋沢式→細久保式→(高山寺式)を強く主張しているところであるが、押型文土器の初現から全国的な視野に立って、系統的把握と編年を行なった戸沢充則の論文がある。(註41) その概要は、押型文土器A型式群は、神宮寺式→大川式→立野式がそれにあたり、それぞれ示すとおり編年の序列が与えられている。これらは、「神宮寺式土器を初現とする押型文土器は、その発生の時期において近畿地方を中心とする中部日本西部に、押型文土器文化の基盤をもった。」とし、「神宮寺式から大川式へという型式変化と、押型文土器としての土器製作・施文技法の改良を積み重ねながら、押型文土器A型式群は立野式土器を生み出すとともに、岐阜県や長野県などの山地地帯に深く浸透し、一方太平洋岸地方の東海にも分布をのばしていき、主要なそして伝統的な押型文土器文化圏を中部日本において確立する。」としている。押型文土器B型式群は、沢式、樋沢式、普門寺式、細久保式、卯ノ木式をあげており、「前三者は山形文を主体とする直交帯状施文を特徴としている」とし、また施文及び出土層位から樋沢式→細久保式の編年を示し、普門寺式と樋沢式の関連においては「関東で古くから普門寺式といわれていた土器は樋沢式の地域的なあらわれ」としている。細久保式以後をB型式の後半期とし、細久保式土器は、「直交帯状施文が残存程度にしかみられない」「密接・不規則走行施文が増える」「楕円文が文様要素構成比の主体を占めるようになる」と特徴を示している。卯ノ木式土器は、「新潟県内を中心に分布を示す」もので、「基本的には細久保式の範疇でとらえられるものであろう。」と示している。押型文土器C型式群は、高山寺式と穂谷式を設定している。穂谷式土器については、やや不明確な現状を示しているが、高山寺式土器は、「口の大きく開らく砲弾形の深鉢」を特徴とし、「先行する細久保式土器にもすでに見られる」こと、西日本各地で層位関係が明らかになっていることなどをあげ、細久保式→高山寺式の編年がほぼ確立したとしている。また、片岡 肇も近畿地方を中心とした押型文土器群の分析を行なっている。(註42)

これらの研究成果の中で金塚遺跡出土の押型文土器を見ると、細久保式土器と高山寺式土器が第4号住居址内で相伴関係をもって出土していることが特徴である。細久保式→高山寺式という編年からみると、本址の場合二つの時間的關係を捉えることができる。そのひとつは、量的に細久保式土器が上回っていることから、細久保期最終末に至って高山寺式土器が流入してきたと考えられる。あくまでも細久保式土器群が主体を成し、高山寺式土器を受け入れたという見解である。もうひとつは、高山寺式期の動態の中で、残存形態として細久保式土器が存在しているという考え方である。細久保式土器は、中部高地をいわば核として拡散する傾向をもち、ほぼ一円に分布が確認されており、高山寺式土器は、西廻りの流入された土器であり、分布地域や出土量が比較的限られていることを考慮すれば、前者の細久保式土器群に高山寺式土器が伴うものであ

ることはほぼまちがいないものと思われる。第4号住居址の外に、グリッドから出土した高山寺式土器が2片あり、西廻り文化との接点を強く表示しているものである。

最後に本地域ではまれな高山式土器についてふれてみたい。高山寺式土器は、和歌山県高山寺貝塚出土の資料を標式(註43)とし、「近畿地方から西日本にかけて分布の中心がみられる」(前掲戸沢論文)が、長野県内の分布の北限は戸沢の言う塩尻市平出遺跡ではない。菅平高原に位置するフロンティア牧場遺跡(註44)と富沢畑遺跡(註45)で1片ずつ出土している。それぞれ繊維を含有しており、楕円陰刻部は、前者は0.5×0.8cm、後者は0.7×1.0cmで器厚は0.8~0.9cmを測る。そして新たに金塚遺跡出土の3片を付け加えたい。千曲川水系においては今のところこの3遺跡に限られている。平出遺跡では、第一類に分類され、合計3片で厚く、焼成不良で、小石等の夾雑物(恐らく繊維と思われる)を含有すると報告されている。(註46) 図版を見ると裏面には斜行する凹線がみられる。同塩尻市野辺沢遺跡でも1片だけ出土している。(註47) 「粒子が大きい」と記載があるだけで詳しくは解からないが0.9×1.1cm程の粗大楕円で、器厚は0.8cm程と高山寺式土器の中にあってはやや薄手である。下諏訪郡富士見町御射山西遺跡からは1片出土しているが、報文には記載がない。(註48) 拓影図で見る限り0.9×1.4cmの楕円を成し、器厚は0.9cmと思われる。諏訪市本城遺跡では、2片が出土している。「大粒の石英粒と繊維を胎土に含む」ようであり、「黒褐色」と「褐色」を成している。(註49) 駒ヶ根市辻沢遺跡、(註50)でも報文はないが、拓影図で見る限り粗大楕円文の資料である。飯田市宮崎A遺跡のピット2から3片と、「その他」(グリッドと思われる)から1片の計4片が出土している。ピット2の3片は、「セシウムを含み器厚が15mmと厚い」。(註51) 拓影図から測定すると0.8×1.2cmを平均すると楕円であり、グリッド出土の資料も同様で、裏面には斜状の凹線文が施文されている。また、木曾郡木曾福島町生物研究所遺跡、(註52) 同上松町サイノ神遺跡、(註53) 同王竜村里宮遺跡、(註54) 同山口村青野原遺跡、(註55) 同河原田遺跡、(註56)でも表面採集資料ではあるが、粗大楕円の押型文が出土している。中部高地における分布域は、千曲川水系で僅かに見られるだけで他のほとんどは天竜川水系や木曾川水系を中心とする南信地域に見ることができ西廻り文化の様相をうかがい知ることができる。しかし、中部高地の資料は全てが断片的なものといってよく、あくまでも一時期における流入と考えられ、独自に発展した様子はみられない。

北陸地方では、富山県直坂遺跡で数片出土している(註57)が詳細は不明である。

東海地方では、かなりの出土例がみられる。岐阜県恵那郡中原遺跡、(註58) 同加茂郡不老井遺跡、(註59) 同恵那郡星の宮遺跡、(註60) 同恵那郡上原遺跡、(註61) 同益田郡裏垣内遺跡、(註62) 同恵那郡野尻遺跡、(註63) 同美濃加茂郡二ツ塚遺跡、(註64) 同関市赤土坂遺跡、(註65) 同山県郡九合洞穴、(註66) 愛知県小牧市総濠遺跡、(註67) 同知多郡先苺貝塚、(註68) 同小牧市織田井戸遺跡、(註69) 同豊橋市大清水遺跡、(註70)が主なものである。

近畿地方の分布は、まず標式遺跡である和歌山県田辺市の高山寺貝塚がある。昭和13年に浦宏によって調査され(註71)、また、昭和39年に網干善教が調査を行なっている。(註72) 粗大楕円

押型文土器と共に石鏃、礫器、搔器、磨石、叩石（礫石錐）が出土し、さらに自然遺物も出土している。この他に、滋賀県東浅井郡松原遺跡、（註73）同大津市石山遺跡、（註74）奈良県山辺郡大川遺跡、（註75）京都府京都市一乗寺遺跡、（註75）同京都市修学院遺跡、（註56）同京都市大枝遺跡、（註77）同竹野郡宮ノ下遺跡、（註78）兵庫県美方郡タツケ平遺跡、（註75）などが知られている。近畿地方の押型文土器は、第3期までに区分されており、高山寺式土器は第3期に当たる。分布地域は、京都府と兵庫県に集中するようである。（註79）

近畿地方以西については、時間がなく調べることができなかつたので省かせていただくが、全体の分布地域は、「長野県南部（東部と訂正していただきたい）から九州にまで及ぶきわめて広い範囲に分布」しており、「とくに超大形の楕円文の施文された土器は、今のところ長野県南部（東部としていただきたい）から近畿地方にかけて分布している」（註80）ことがほぼわかっている。

論巧は時を待って行ないたいと考えているので、ここでは分布地域の提示に止めたい。

金塚遺跡出土の早期土器群から、とりわけ組成と、当地方では極めて出土例の少ない高山寺式土器について、多くの方々の研究成果を参考にさせていただきながら記述してきた。本遺跡では僅かな出土しかなかったが、この僅かな資料の中にも重要な要素や問題、課題が内包していると痕感した次第である。

なお、石器群についての考察も準備していたが、時間的な関係で記述することができなかつた。稿を別に行ないたいと思っている。（福島）

第8章 総括

信濃国におかれた古代の官牧、16牧のうち、望月牧は貢馬生産の4分の1の20匹をしめていたことは古くから知られていることである。しかし、そうした重要な地帯にあっても、ここ望月町では、近年ようやく、その実態が明らかになろうとしているところである。望月町教育委員会の学芸員福島邦男氏の精力的な調査によって、望月牧の歴史的時点のいくつかの側面で、その構造が明らかになる日は近いものと思われる。本、金塚遺跡の調査もその一環であり、農業構造改善のためのほ場整備事業により行われる遺跡破壊から、情熱的にその遺跡の記録保存をしようと努力したものである。その努力は高く学問的とも評価されるべきものである。

現望月町は、望月牧とそれにかかわる諸施設、諸生活を基盤とする古代社会にその原点を求めることができる。古代東山道古道も、まして、近世の中山道の宿駅の設置の原点すらも、その存在を無視することは可能でない。望月牧のあらゆる意味での全懇を明らかにすることは、生活基

望月町の時代別遺跡数

第2表

時代 期	旧 石 器	縄 文					弥 生		古 墳		奈 良	平 安	中 世	近 世	計
		早	前	中	後	晩	中	後	集落	古墳					
遺跡数	1	6	18	125	23	3	0	11	4	51	11	201	12	1	467
%	0.2	1.3	3.9	26.8	4.9	0.6	0	2.4	0.9	10.9	2.4	42.9	2.6	0.2	100.0
%	0.2	37.5					2.4		11.8		2.4	42.9	2.6	0.2	100

盤の破壊と再構成、再編成の進行する現代社会の成員の責務であり、理念でなくてはならない。

昭和55年度、望月町教育委員会によって行われた「望月町遺跡詳細分布調査」はそうしたなかにあつて、実にその歴史的構造を明確に浮き彫りにしたものとして高く評価される。第2表はその調査による「望月町の時代別遺跡数」でありその百分率である。望月町の総遺跡数は286なので、およそ60%は複合遺跡であることがわかる。

遺跡総数467に対して、平安時代の遺跡数が201、42.9%をしめている。望月町がいかに平安時代において、遺跡の集中した地帯であるかはおそらく周辺地域と比べても群を抜いているのである。金塚遺跡においても第1、2、6、7号住居址と平安時代住居址4棟が検出されたが、1、7号址がやや古く前半に属し、2、6号址が中葉に属するものようである。住居址の方向、出土遺物のあり方等、そうした資料批判にたえられるものと思われる。こうした資料批判を積み上げることにより、古墳時代、奈良時代、そして平安時代における。いわば望月の古代における社会構造、生産構造の消長を理解することになるものと期待するのである。金塚遺跡は、そうした良好な資料を提供し、更に今後の大きな指針となりうるものを提示しているとみることができるのである。

○

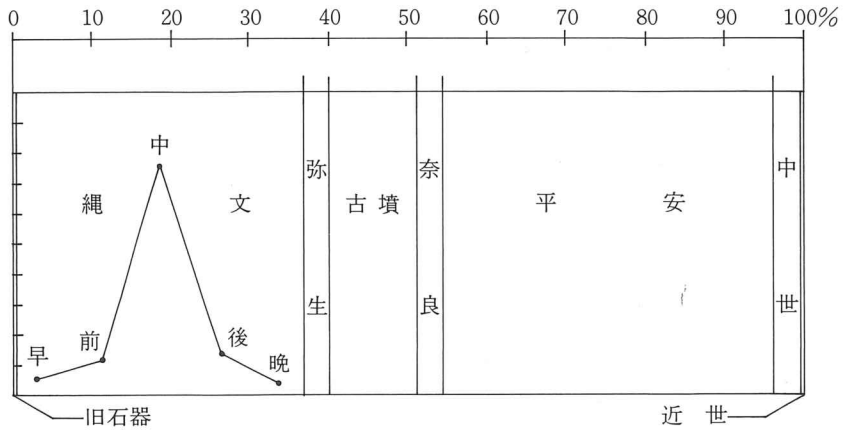
○

望月町の歴史的展望の中でもう一つ重要なのは、縄文時代のあり方である。37.5%、遺跡数の3分の1強が縄文時代の遺跡であつて、とりわけ縄文中期の遺跡は125で全体の26.8%、4分の1をしめている。縄文時代の遺跡中では71%が縄文中期の遺跡であることがわかる。しかもそれはほとんどが中期後半の遺跡であることも注意されねばならないところである。ところが近年、その縄文中期の集落構造や、遺跡構造の研究が進行し、同一地域の占有空間における遺跡の構造化、その生産構造と性格の問題が明らかになろうとしているのであつて、望月町でも、おそらく、こうした研究が可能な段階に至つて来ているものと見てよいように思う。

金塚遺跡からは、こうした時代の土台となつた、もう一つ古い時期の資料群が検出されているの

である。縄文早期に属する押型文系土器群とそれに伴う石器群、そしてかなり明確な竪穴式住居址が検出されたことは、類例の少ないこの時期のものとして、極めて重要なものであると言える。それを総括すると、

第27図 望月町の時代別遺跡数の百分率分布



- ①住居址は隅丸長方形の浅い竪穴を基本として、竪穴内に柱穴を持たずに、竪穴外に持つこと。
- ②押型文系土器群を主体とし、沈線文系土器群と、捺系文系土器群若干を伴出すること。
- ③両極石器、各種搔器、石鏃、多両体磨石などを伴出すること。

などが明らかである。しかも第4号住居址は、第3号住居址の構築によって一部の破壊が行われているので、3号址より4号址の方が古いことは自明であるが、このことにより、各土器群の資料に新旧のタイムスケールを与えることが可能であって、今後の研究に期待するものである。中部高地的な押型文系土器文化に対して、東北地方的な沈線文系の土器文化、そして関東的な捺系文系の土器文化の接触型の土器文化を見ることができ、4号住居址、5号住居址など明らかに住居址の床面から伴出する形で検出されていることが重要である。この土器群が、伴出か混在かは多年明らかにならなかったものの一つでもあって、その両様の考えに分れていたところであった。それにピリオドを打つ重要な所見であって、金塚遺跡で確認された押型文系土器文化を主体とする。沈線文系、捺系文系土器文化の接触型土器文化として一型式を成すものと理解してもよいように思われるのである。換言すれば、一住居址という生活単位で確認された押型文系土器を主体とする、沈線文系、捺系文系土器を伴出する接触型土器群をなすものは、中部高地北東部にかなり分布しているが、これをもって、「金塚式土器」と仮称する一型式の土器文化と設定できる可能性があるということである。望月町では、同様な遺跡は、新水B遺跡などがあって、更に詳細な研究が世に問われる日が近いことを期待している。ここでは一つのアプローチを投げかけるにとどめておきたい。

曾根型石核から出発したこの種の石器の混乱を整理して、曾根型彫刻器、ピエス・エスキューなどの名称に「両極石器」の名称を用いたいと思う。これについては一つ論文を用意しているのでそれとゆずることとする。また穀すり石、原始石鋸、特殊磨石といわれたものにも「多両体磨石」を用いることとした。こうした名称の変更にもより研究史的側面を検討しながら妥当な姿へと近づけて行く責務があるものと考えている。

(森嶋 稔)

註

- 1 第6章第1節・多面体磨石参照。「穀磨石」「特殊磨石」という用語を改め、「多面体磨石」という用語を用いる。
- 2 神津淑祐・木崎喜雄 1955「北佐久郡誌 第一巻 自然編」北佐久郡志編纂会
- 3 宮沢恒雄 1976「長野県の地質（地質図）」信濃教育会出版部
- 4 註3に同じ
- 5 註3に同じ
- 6 福島邦男・渡辺重義 1981「望月町遺跡詳細分布調査報告書—分布図・地名表」望月町教育委員会
- 7 「春日縄文式時代遺跡群」は、ここで新たに名称を与えるものである。範囲は本文中に記述したところであるが、蓼科山から北に延びる裾野の平坦部を立地条件とし、湧水に恵まれた絶好の地域である。時期的には早期から晩期までくまなく分布し、特に中期と後期に集中している。昭和57年以降も二、三の調査が予定されている。
- 8 第6章第1節・両極石器参照。「曾根型石核」「曾根型彫刻器」「ピエス・エスキュー」という用語を改め、「両極石器」という用語を用いる。
- 9 第II群土器、第III群土器については、児玉卓文氏、宮下健司氏に御教授をいただいた。記して感謝の意を表するものである。
- 10 庄野靖寿他 1974「関山貝塚」埼玉県教育委員会
- 11 藤森栄一他 1965「井戸尻」中央公論美術出版
- 12 福島邦男 1981「新水—長野県北佐久郡望月町新水A・B遺跡緊急発掘調査中間報告書」望月町教育委員会
- 13 藤森栄一 1972「岩村田一本柳—佐久市岩村田一本柳遺跡緊急発掘調査概報」佐久市教育委員会
- 14 永峯光一 1967「長野県石小屋洞穴」日本の洞穴遺跡 日本考古学協会洞穴調査委員会
- 15 藤森栄一 1968「諏訪湖底曾根遺跡—過去・現状と保存」信濃考古No.24
藤森栄一氏は、「曾根型石核」なる用語を『語り』で伝えていたのは大分以前のことであるが、論文や報文で記述したのはそれよりかなり時が経ってからである。
- 16 森嶋 稔 1975「曾根型彫刻器—考—」長野県考古学会誌21 森嶋稔氏は、高出遺跡発掘調査頃から彫刻器説を唱えていたが、文献に託したのはこれが初めてである。
- 17 岡村道雄 1976「ピエス・エスキューについて」東北考古学の諸問題 「碁石遺跡」ではすでにその用語が使われている。日本でこの用語を最初に用いたのは芹沢長介氏で、F. ボルドの「旧石器時代」の翻訳の時である。岡村道雄氏の御教授をいただいた。記して感謝の意を表するものである。

- 18 森嶋 稔・笹沢 浩・原田勝美・福島邦男 1976「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」長野県考古学会誌23・24（合併号）
- 19 桐原 健 1969「信濃の磨製石鏃—その具有する問題点の一、二について」信濃21-10
- 20 福島邦男 1978「犬飼遺跡第1次緊急発掘調査報告書—蓼科山麓における堂宇を中心とした遺構群の調査」望月町教育委員会
- 21 鈴木 誠 1966「長野県北相木村栃原岩陰遺跡出土人骨の概要」信州ロームNo.9
- 22 註12と同じ
- 23 森嶋 稔・須佐安登・大竹俊正・小林竜起 1972「更埴市鍋久保遺跡の押型文土器を伴う住居址について」長野県考古学会誌14号 『更埴市』は誤りであることは、1976年刊の鍋久保遺跡の報告の中で述べた。
- 24 註18と同じ
- 25 神村 透 1982「立野式土器の編年の位置について（完）」信濃Ⅲ34-2所収
- 26 米山一政・森嶋 稔 1964「長野県更埴市桑原池尻遺跡調査報告」上代文化34
- 27 藤沢宗平他 1967「松本・諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告」長野県教育委員会
- 28 神村 透 1968~1969・1982「立野式土器の編年の位置について（1~7・完）」信濃Ⅲ20-10・12、21-3~5・7・9、34-2
- 29 註12と同じ
- 30 註23と同じ
- 31 註18と同じ
- 32 註26と同じ
- 33 笹沢 浩・小林 孚 1966「長野県上水内郡信濃町塞ノ神遺跡出土の押型文土器」信濃Ⅲ18-4
- 34 森嶋 稔他 1975「男女倉—国道142号新和田トンネル有料道路事業用地内緊急発掘調査報告書」和田村教育委員会 B地点は福島が、C₂地点は笹沢が、F地点は酒井が報告している。
- 35 小松 虔 1976「栃原岩陰遺跡の押型文土器」長野県考古学会誌27
- 36 註18と同じ
- 37 山内清男 1967「日本遠古之文化」先史考古学会
- 38 赤星直忠 1935「横須賀市田戸先史時代遺跡調査報告」史前学雑誌7-6
- 39 吉田 格 1968「千葉県城ノ台貝塚」石器時代1
- 40 註18と同じ
- 41 戸沢充則 1978「押型文土器群編年研究素描」中部高地の考古学1
- 42 片岡 肇 1974「近畿地方における押型文土器文化について」平安博物館研究紀要5
- 43 浦 宏 1939「紀伊国高山寺貝塚発掘調査報告」考古学10-7

- 44 小林 孚 1970「菅平の古代文化」菅平研究会刊
- 45 註44に同じ
- 46 永峯光一 1955「平出一長野県宗賀村古代集落遺跡の総合研究」平出遺跡調査会編
- 47 藤沢宗平他 1973「東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 第二卷歴史上」所収 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会
- 48 小林秀夫 1981「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一茅野市・原村その3、茅野市その4、富士見町その3一」長野県教育委員会
- 49 岡田正彦 1974「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一岡谷その1 その2、諏訪市その3」長野県教育委員会
- 50 北沢雄喜他 1974「辻沢遺跡群一辻沢川流域における遺跡分布調査報告」辻沢遺跡群研究会
- 51 山岡栄子 1971「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一阿智、飯田、宮田地区一」長野県教育委員会
- 52 神村透氏に御教授をいただいた。記して感謝の意を表するものである。
- 53 "
- 54 "
- 55 "
- 56 "
- 57 橋本 正 1973「富山県大沢野町直坂遺跡発掘調査概要」富山県教育委員会
- 58 紅村 弘・原 寛 1977「東海先史文化の諸段階一資料編 I」所収
- 59 註58に同じ
- 60 註58に同じ
- 61 紅村 弘 1963「東海の先史遺跡一総括篇一」東海叢書13
- 62 大江 命 1965「益田川流域の縄文遺跡」飛驒の考古学 1
- 63 註61に同じ
- 64 註61に同じ
- 65 註61に同じ
- 66 澄田正一・大参義一 1956「九合洞窟遺跡」名古屋大学考古学研究室紀要一
- 67 註58に同じ
- 68 山下勝年他 1980「先苺貝塚」南知多町教育委員会
- 69 大参義一・安達厚三・井口喜晴 1965「織田井戸遺跡発掘調査報告」いちのみや考古No.6
- 70 註61に同じ
- 71 註43に同じ
- 72~80 註42に同じ

版 圖



1. 金塚遺跡全景（南側より）



2. グリッド全景（南側より）



3. 台風15号による水没状態（南側より）



4. 第1号住居址全景（南側より）



5. 第1号住居址カマド（南側より）



6. 第1号住居址カマド完掘状態（南側より）



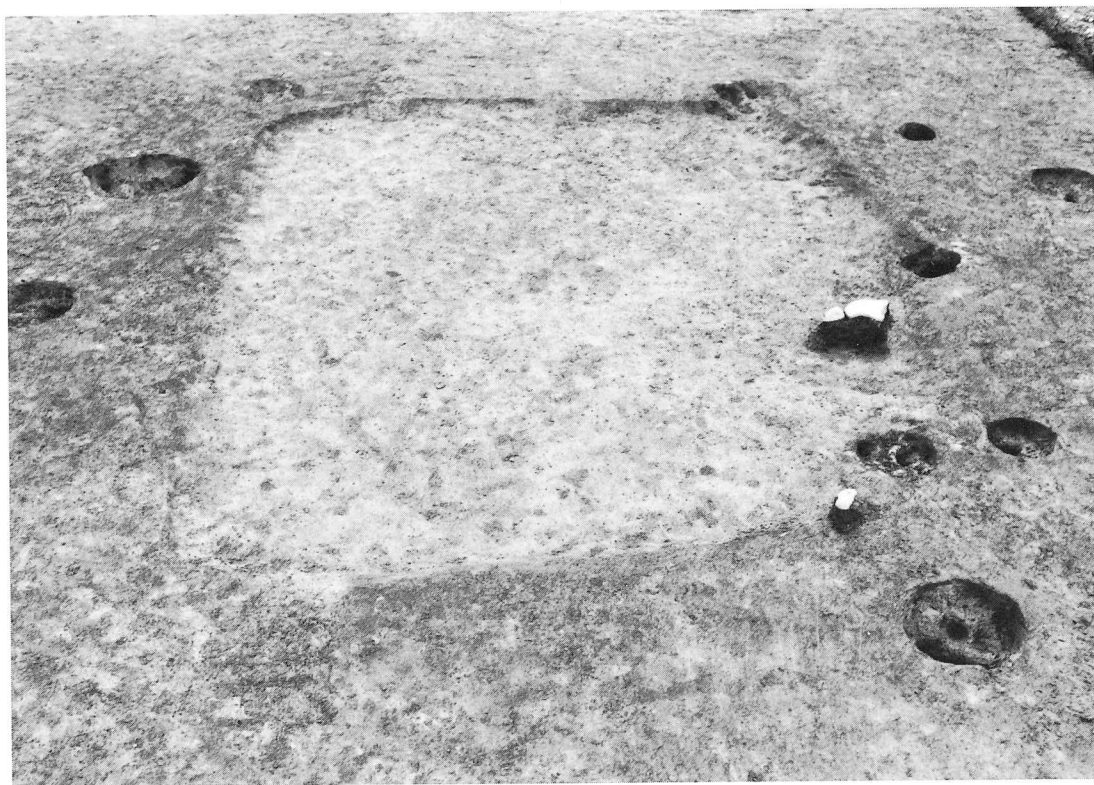
7. 第2号住居址（南側より）



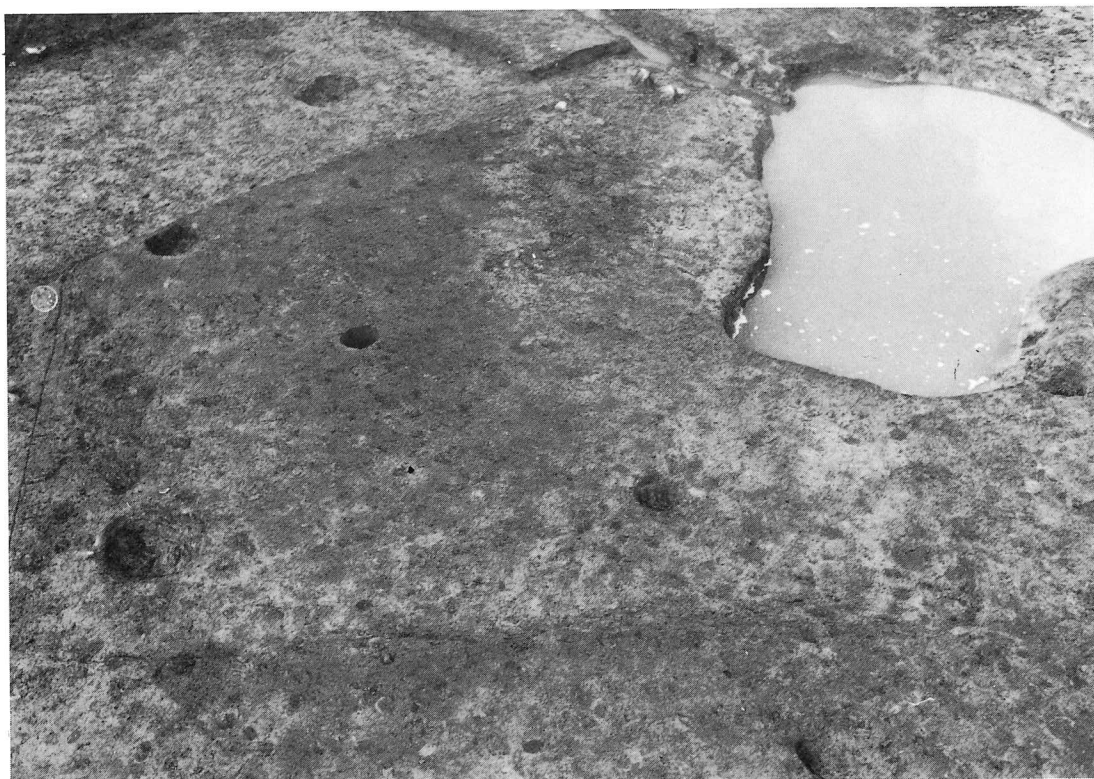
8. 第3号住居址・第1号土壇（SK-01）（南側より）



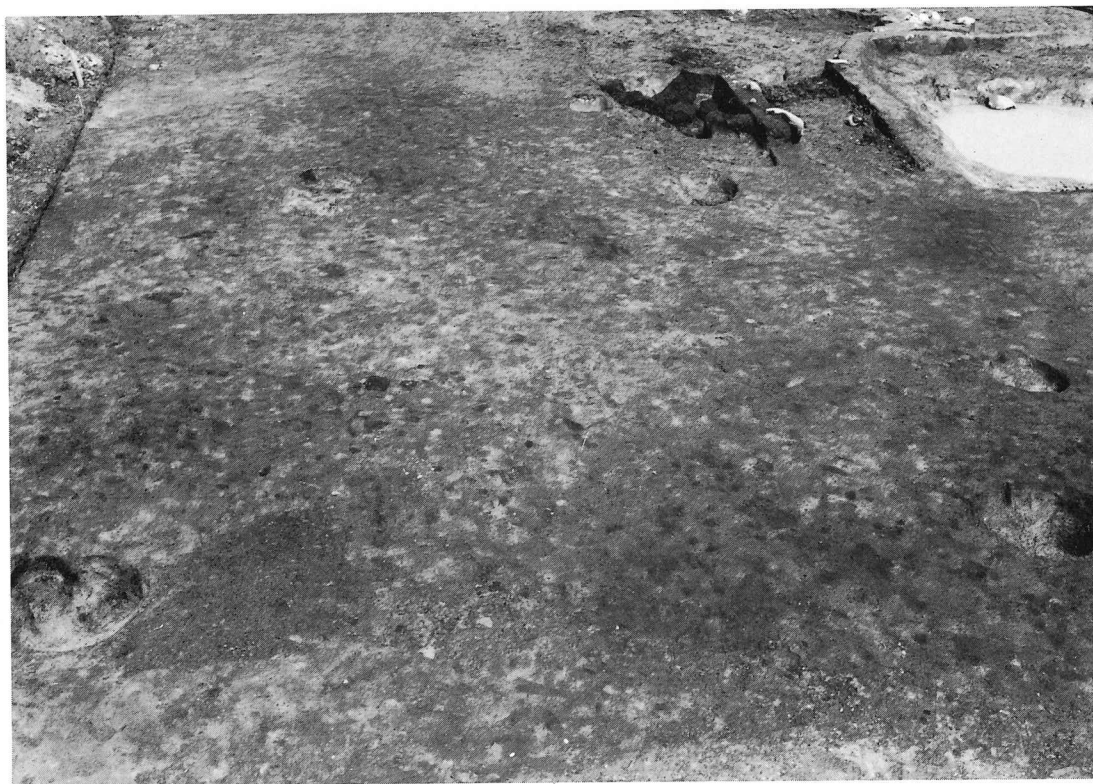
9. 第4号住居址・第2号土坑 (SK-02) (南側より)



10. 第5号住居址 (南側より)



11. 第6号住居址（南側より）



12. 第7号住居址（南側より）



13. 第3号土坑（南側より）



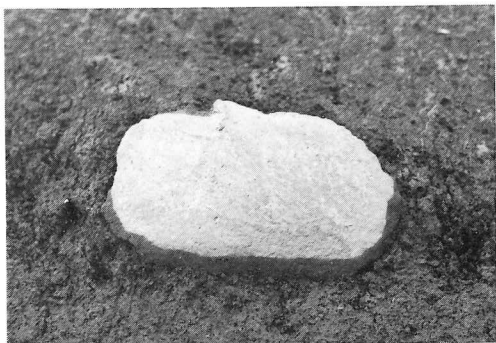
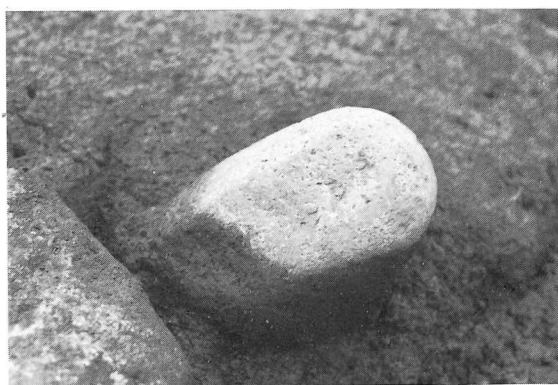
14. 第1号集石址（西側より）



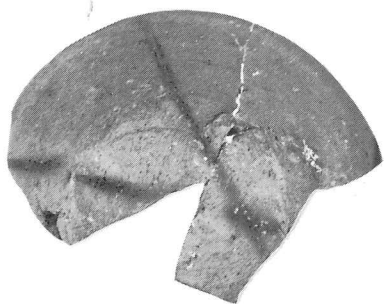
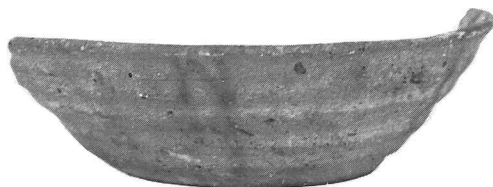
15. 第2号集石址（西側より）



16. ロームマウンド（南側より）



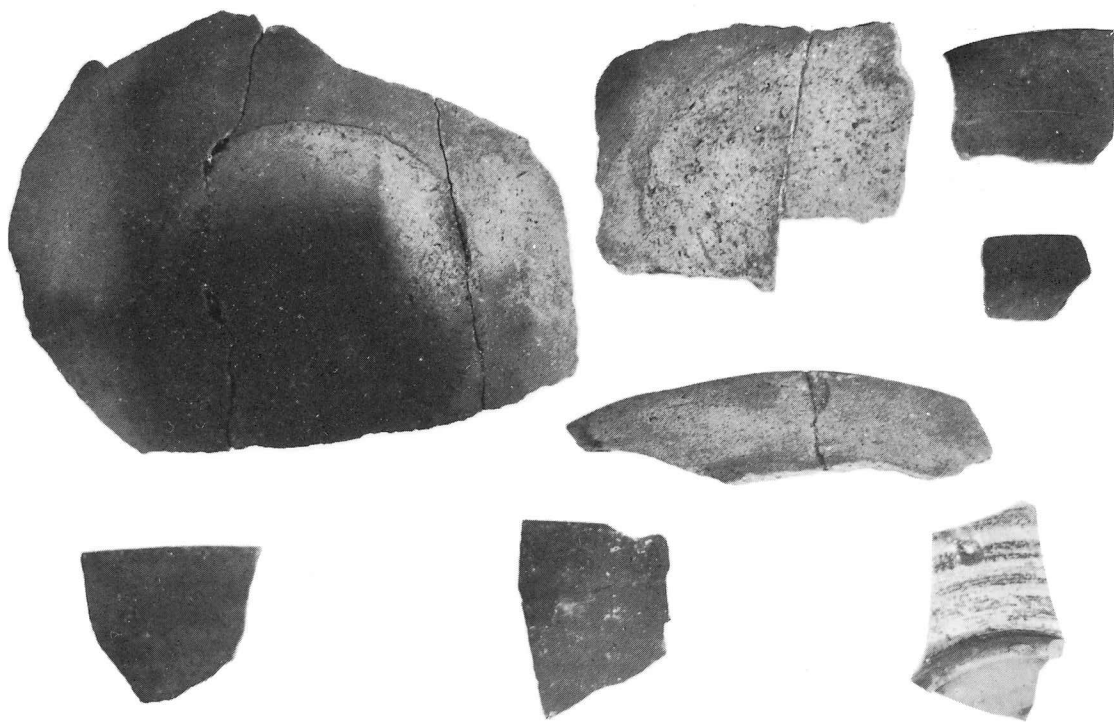
17. 遺物出土狀態



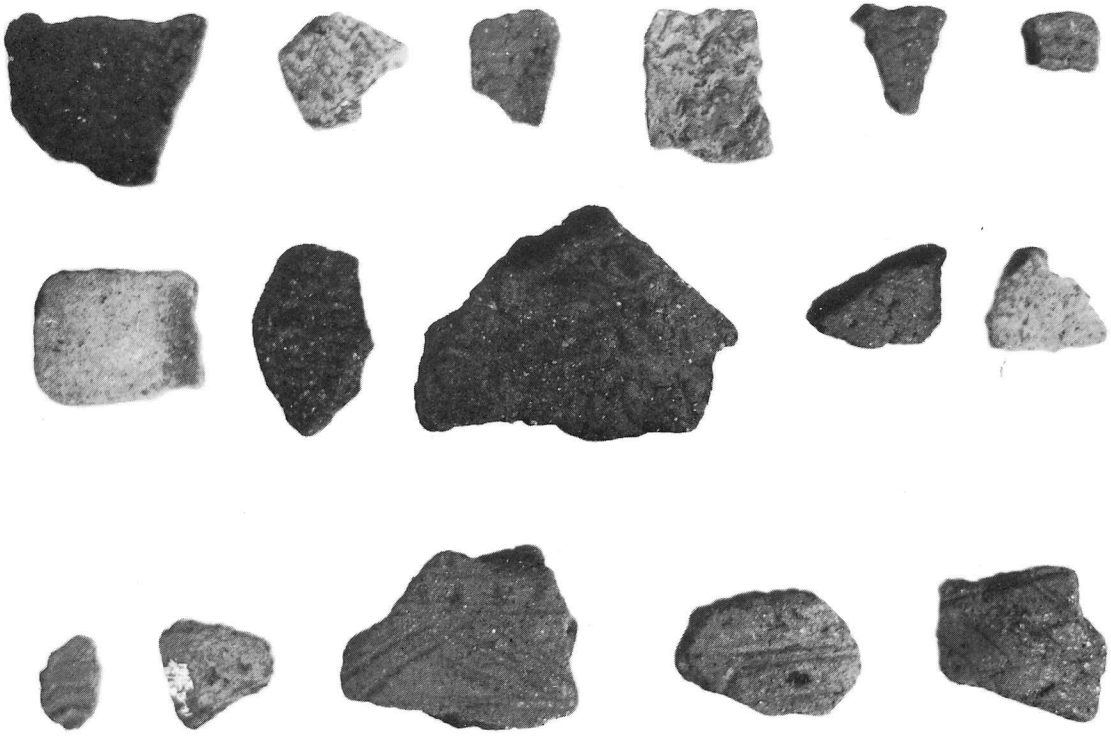
18. 第1号住居址出土土器



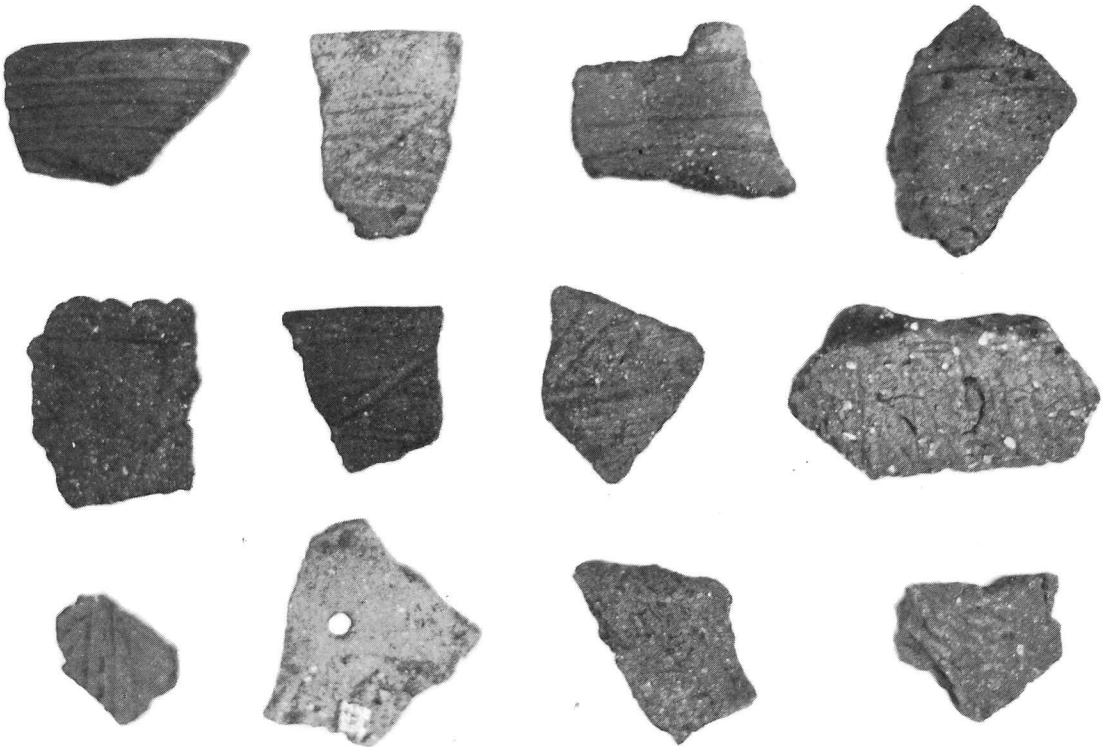
19. 第1号住居址出土土器



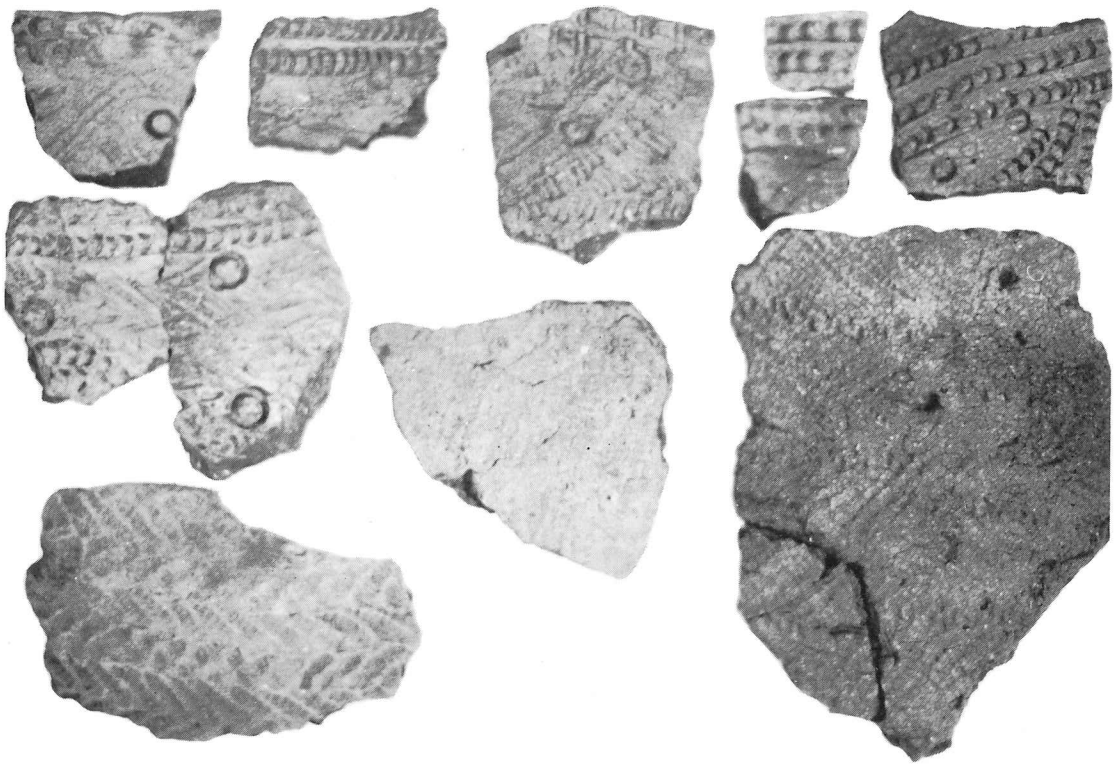
20. 第2号住居址出土土器



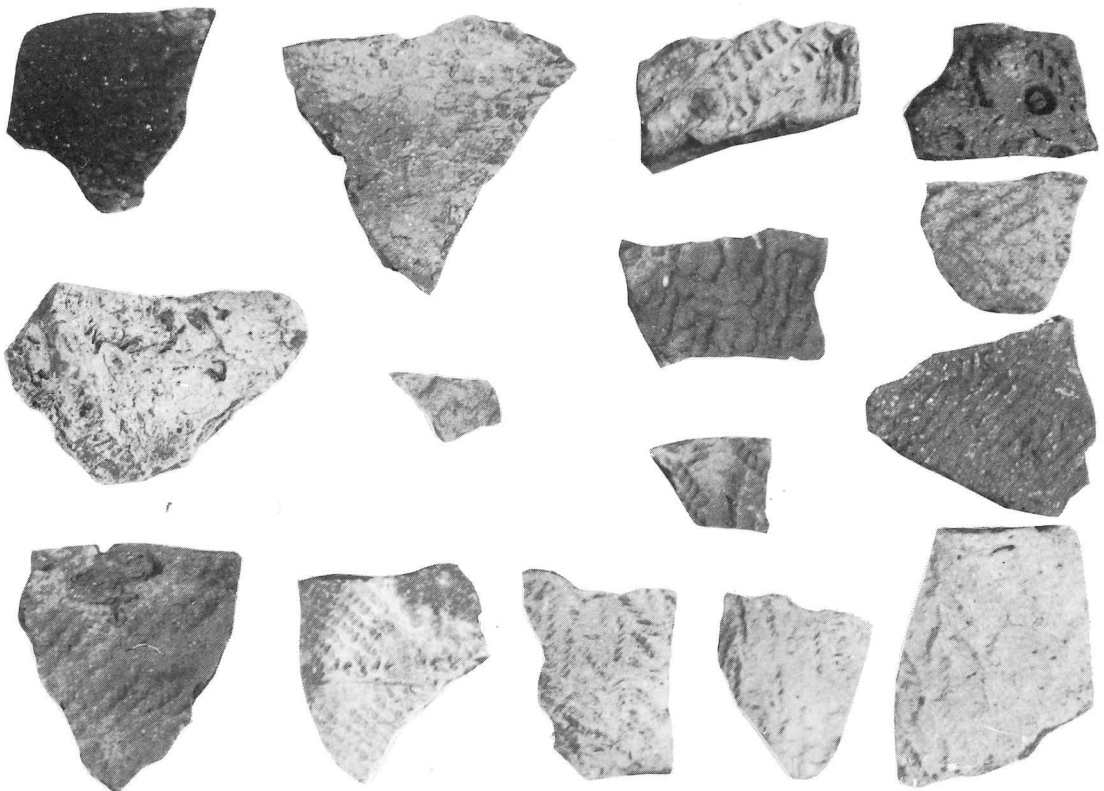
21. 第4号・第5号住居址出土土器（上二段・4住、下・5住）



22. グリッド出土土器



23. グリッド出土土器



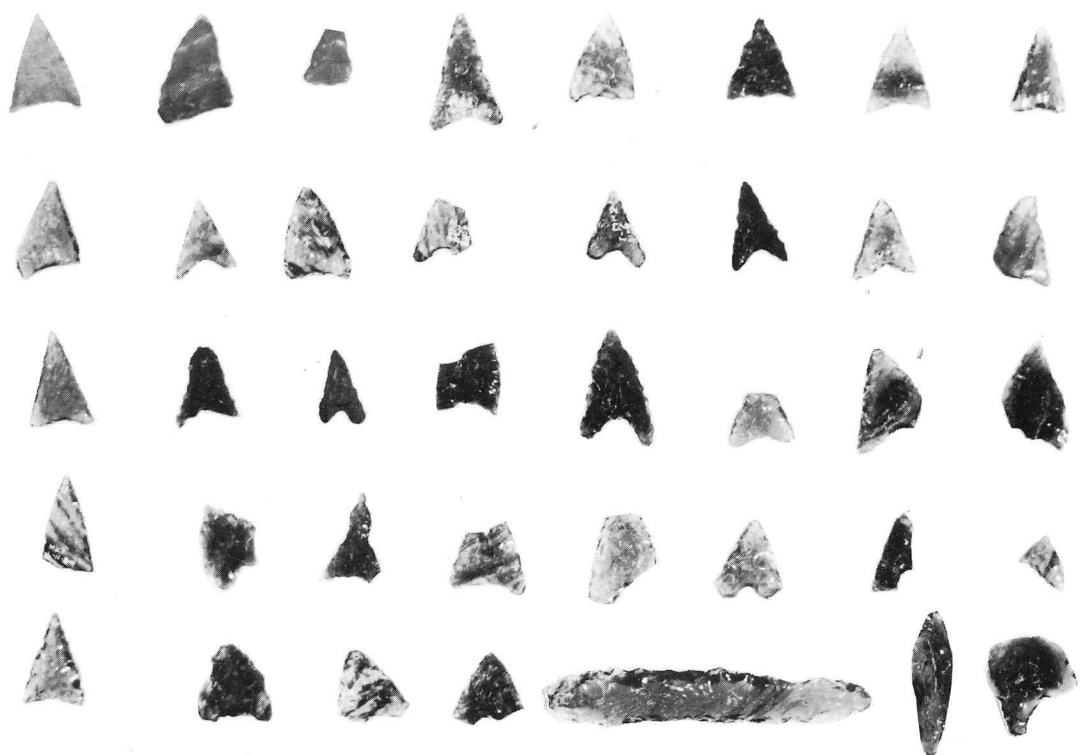
24. グリッド出土土器



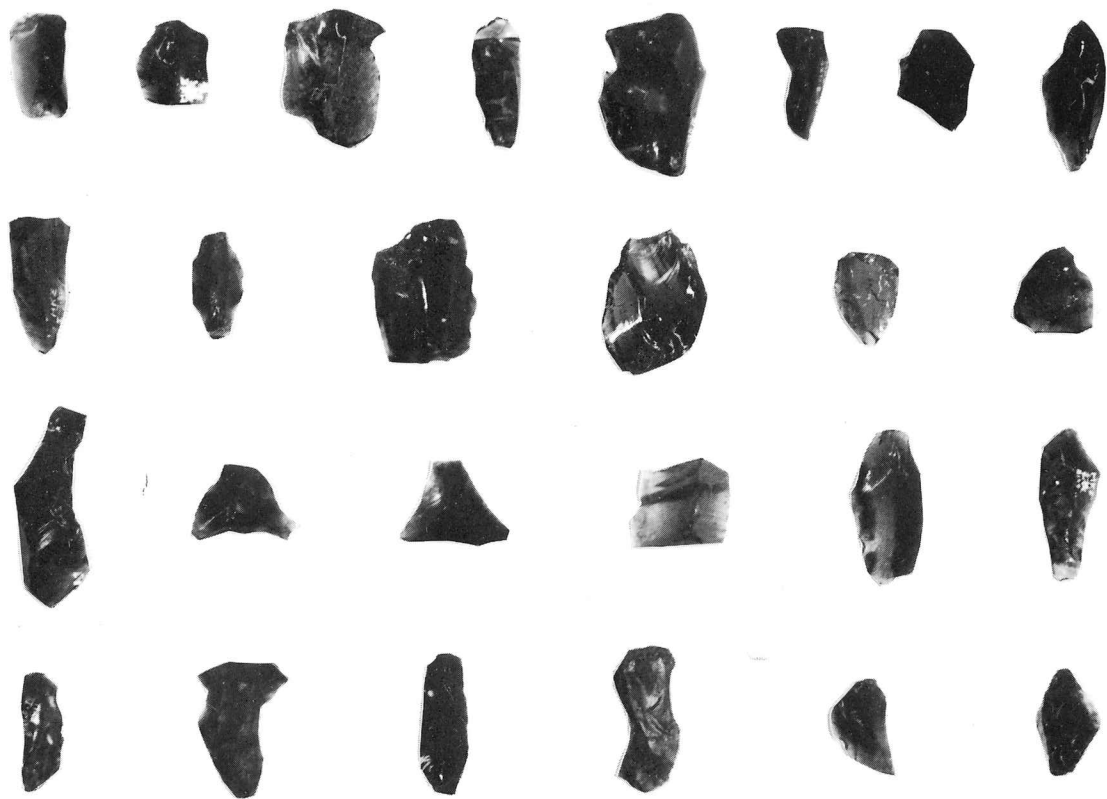
25. グリッド出土土器



26. グリッド出土土器



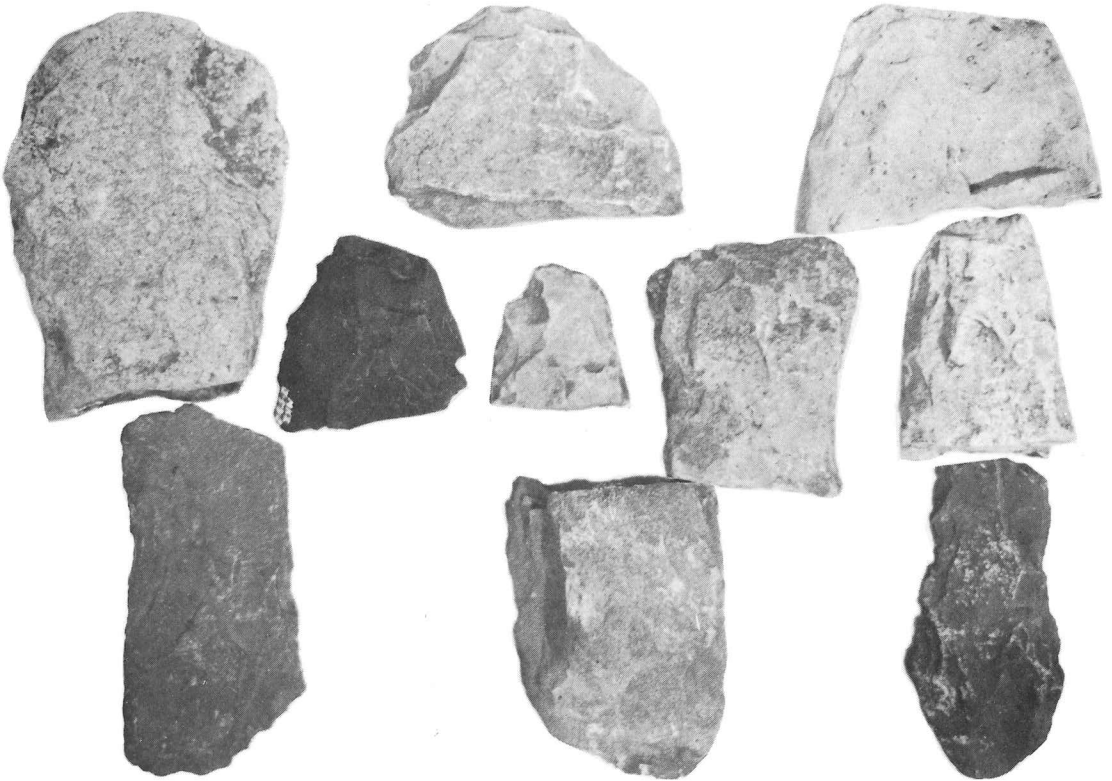
27. 遺構・グリッド出土石器



28. 遺構・グリッド出土石器



29. 遺構・グリッド出土石器



30. グリッド出土石器



31. グリッド出土遺物



32. 町長(右2人目)・教育長(右)、教育次長(左)視察



33. 視察風景



34. 調査風景



35. 実測風景



36. 金塚遺跡発掘調査参加者

望月町文化財調査報告書 第8集

金 塚 遺 跡

— 蓼科山北麓における
縄文式早期、平安時代の調査 —

発 行 1982年3月20日

東 信 土 地 改 良 事 務 所

望 月 町 教 育 委 員 会

印 刷 鬼 灯 書 籍 株 式 会 社
